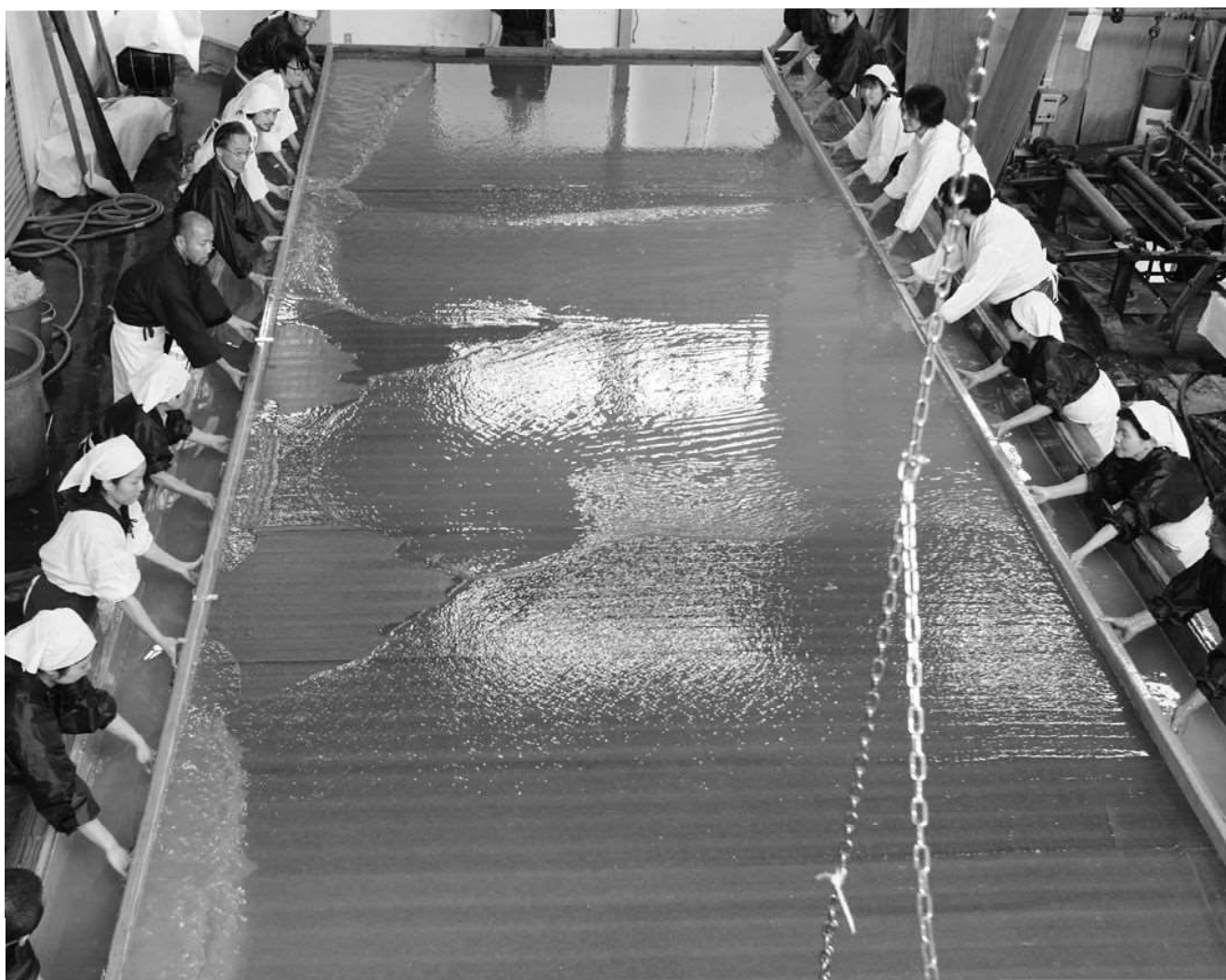


ふるさと創造プロジェクト



越前市



## 表紙写真について

上段：岡太（おかもと）神社

全国に数ある和紙産地の中でも、1500年という長い歴史と最高の品質と技術を誇る越前和紙。その発祥については、ひとつの伝説が伝えられている。

それは、26代継体天皇がまだ男大迹皇子（おおとのおうじ）といわれ越前におられたころの話。岡太（おかもと）川の上流に美しい女神が現れ、「この村里は谷間であって田畑が少なく、生計をたてるのはむずかしいであろうが、清らかな谷水に恵まれているので、紙を漉けばよいであろう」と村人たちに紙の漉き方をていねいに教えられたといいます。

習い終えた里人は非常に喜び、お名前をお尋ねすると女神は「岡太（おかもと）川の川上に住む者です」と告げて、そのまま姿を消しました。

それから後、里人たちはこの女神を川上御前（かわかみごぜん）とあがめ奉り、岡太（おかもと）神社を建ててお祀りし、その教えに背くことなく紙すきの業を伝え今日に至っています。

下段：平成長尺大紙（へいせいちょうじゃくたいし）

2014年5月23日、人気漫画家井上雄彦氏が、福井県越前市の上山（うえやま）製紙所（大正10年創業）において、建築家ガウディの世界観を描く作品に使う高さ3.3m、幅10.7mに及ぶ世界最大級の「平成長尺大紙（へいせいちょうじゃくたいし）」の紙漉きを行いました。

撮影：鈴木愛子

# 目 次

序章 ふるさと創造プロジェクトの概要.....	1
1. 目的.....	1
2. 対象地域.....	1
3. ふるさと創造プロジェクトの実施期間.....	1
第1章 東部（イースト）地区の現況.....	2
1. 歴史的な特性.....	2
2. 越前和紙の特性.....	3
3. 上位関連計画の整理.....	5
第2章 東部（イースト）地区の課題.....	8
1. 伝統産業の課題.....	8
2. 観光振興の課題.....	9
第3章 東部（イースト）地区の目指す姿・整備方針.....	10
1. 目指す姿・整備方針.....	10
2. 東部（イースト）地区の整備イメージ.....	11
3. 各ゾーンの振興策（プロジェクト）の体系.....	12
4. 越前和紙ゾーンの振興策.....	13
5. 歴史ゾーンの振興策.....	19
6. 地区全体の振興策.....	22
7. 各振興策の実施体制、スケジュールの整理.....	24
第4章 紙の文化博物館改修に向けた基本方針.....	25
1. 紙の文化博物館の改修.....	25
第5章 ふるさと創造プロジェクトの実現に向けて.....	33
1. 推進体制.....	33
2. 推進期間.....	33
資 料 編.....	34
1. イースト地区施設整備検討会（第1回）議事録.....	34
2. イースト地区施設整備検討会（第2回）議事録.....	45
3. イースト地区施設整備検討会（第3回）議事録.....	54
4. イースト地区推進委員会議事録.....	60
5. 越前市工芸の里構想策定会議（第4回）及び三産地施設整備検討会等合同会議 議事録.....	70
6. 越前市工芸の里構想策定会議（第5回）及び三産地施設整備検討会等合同会議 議事録.....	80
7. 越前市工芸の里構想策定会議（第6回）及び三産地施設整備検討会等合同会議 議事録.....	92



## 序章 ふるさと創造プロジェクトの概要

### 1. 目的

本市の東部（イースト）地区には、1500年の昔から伝わる男大迹王（後の継体大王）の伝説や、史跡、祭事、伝統工芸品に関連する工場、体験工房など多くの資源がある。

これらの資源を使って、1500年前から脈々と息づく伝統の発信と新しいモノづくり体験をテーマに、この地域の住民がそれぞれアイデアを出して仕掛けや取組をし、訪れる人たちが地区を回って万葉の歴史に思いを馳せ、伝統のモノづくりも合わせて体感できるようにする。

そのために、福井県ふるさと創造プロジェクト補助金を活用して、国重要文化財の指定を受けた和紙道具類などの素材を生かし、地区を巡る拠点施設の整備や観光客を呼び込むための様々な仕掛けを検討し、地域全体の活性化に繋げる計画を策定する。

### 2. 対象地域

和紙の里通りを核とする五箇地区、越前の里・味真野苑を核とする味真野地区を含む区域を東部（イースト）地区とする。

### 3. ふるさと創造プロジェクトの実施期間

ふるさと創造プロジェクトの実施期間は、平成26年度の計画策定を含め平成28年度までの3カ年である。

尚、本プロジェクトに位置付ける事業において、実施期間内に実現化が難しいものについては、他の関連事業と連携を図り、実現化を目指す。

# 第1章 東部（イースト）地区の現況

## 1. 歴史的な特性

### （1）男大迹王（後の継体大王）の伝説

東部（イースト）地区において、歴史上最も重要な人物は、男大迹王（後の継体大王）である。継体大王は、『日本書紀』によると、幼い頃より即位するまでの50年余りを越の国（福井県）で過ごした後に、西暦507年に58歳で即位したとある。言い伝えによると、当時の福井平野は大きな湖沼であったが、男大迹王が三国において河口を切り開き、大湖沼の水を日本海へ流出させ田園化を行ったことや、足羽山から産出する笏谷石の利用方法を民に教えたなど、産業の活性化につながる伝説が受け継がれている。

継体大王が即位する前に暮らしていたと言われる粟田部地区の花筐公園周辺では、ゆかりの薄墨桜やつつじ、紫陽花、紅葉など四季を通じて美しい自然にふれることができる。

また、味真野地区も継体大王が暮らしていたという場所の一つである。ここは、『万葉集』とも関わりが深いことでも有名であり、味真野苑には継体大王の花がたみ像のほか、『万葉集』にある歌の歌碑や『万葉集』について学べる万葉館も立地している。

### （2）伝統工芸の発祥

東部（イースト）地区の伝統工芸の歴史は、伝説によると約1500年前に継体天皇が男大迹王（おおとのおう）として、この地にいたころに遡る。百済より養蚕と絹織りの技術が伝わり、朽飯八幡神社に機織の御祭神が祀られた。これが、現代に続く織物の始まりであるという。織物は、福井県の広い地域において工業化が進み、今では合成繊維の産地を形成するに至っている。

また、男大迹王が冠の修理を地元の塗師に命じたところ、見事な出来ばえに感激し、漆器づくりを奨励されたことが今日の越前漆器の始まりと伝えられている。

さらに、同じ頃、岡本地区の岡太川の川上に美しい女性が現れ、紙漉きの技を里人に教えたのが、越前和紙の発祥であるという。のちに、この地の大滝に岡太神社が建てられ、その女性を紙祖神「川上御前」としてあがめ、紙漉きの技を今日まで守り伝えている。



## 2. 越前和紙の特性

### (1) 歴史

全国に数ある和紙産地のなかで、越前和紙は 1500 年という長い歴史を誇り、その品質と技術は高く評価され続けてきた。

日本に紙が伝えられたのは 4～5 世紀頃と推定されており、越前和紙で一番古いものとしては、730 年の「越前国大税帳断簡」及び 732 年の「越前国郡稻帳」などが今も正倉院に伝えられており、当時から技術的に優れた和紙であったと言われている。

中世には、大滝寺（現在の大滝神社）の保護の下、紙座（組合）が設けられたが、室町時代から江戸時代にかけて公家や武士階級が紙を大量に使い出すと、楮などを原料とした厚手の紙が耐久性に優れるなど、他の産地を圧倒する品質を誇っていたため、幕府の保護の下、公用紙として重用され全国に広まった。

特に、「越前奉書」や「越前鳥の子紙」は高く評価され、寛文 5 年（1665 年）には、江戸幕府から越前奉書に「御上天下一」の印を使用することが許可されたり、正徳 2 年（1712 年）の「和漢三才図会」では、「越前鳥の子紙が紙王というべきか」と評されている。

日本で唯一の紙祖神「川上御前」を祀る岡太神社、大滝神社の本殿及び拝殿は、江戸時代後期の社殿建築の粋を集めて建てられたもので、昭和 59 年には国の重要文化財に指定されている。

江戸時代には、福井藩が越前和紙を使って藩札を発行し、明治時代に入ると、明治新政府の最初の紙幣「太政官金札」の用紙にも越前和紙が使われた。

明治 7 年、東京の王子に大蔵省印刷局抄紙部が創設されると、越前和紙の職人が招聘され、偽札防止のための透かし技法として「黒すかし」という技法を完成させたことから、日本の紙幣製造技術は飛躍的に進化した。その技術は越前和紙でも「局紙」に使われ、卒業証書や小切手用紙が漉かされている。

また、越前和紙の高い品質を維持してきたもうひとつの要因として、横山大観、小杉放庵、竹内栖鳳などの日本画家たちとの交流があった。彼らの評価と示唆によって、越前和紙は改良を重ね、品質向上が図られてきた。

越前和紙は、このように古くからの紙漉き技術を伝承してきただけでなく、各時代のニーズに応えることで進化を続け、我が国最高の品質を維持してきた。



伝 紙祖神川上御前絵像

## (2) 越前和紙の特徴

1500年という長い歴史をもつ越前和紙には、他の産地にはない特徴がいくつもある。

前述のとおり、紙漉きの技を伝えたと伝承される紙の神様「川上御前」を祀っており、産業と信仰との結びつきがみられる。

また、その歴史は、時代ごとに異なるさまざまなニーズに応じて発展してきた歴史であり、そうした時代の要請に応えることができる柔軟な適応力をもっている。そのなかから高い技術力をもつ紙漉き職人が生まれ、また、多くの技法を生み出してきた。時代のニーズによって創りだされてきた越前和紙は、種類が豊富である。



越前和紙の製造工程は、基本となる8つの工程〔水浸け・洗い、煮る、灰汁だし・晒し、塵選り、叩解、抄紙、圧搾・乾燥、仕上げ〕からなる。これらの工程は古くから伝わるものであり、越前和紙産地の特色により創意工夫されたものである。これらの工程を忠実かつ丁寧に行うことで、本来の美しくなめらかな和紙をつくることが可能となる。

### 代表的な越前和紙の一例

	<p><b>【奉書紙(ほうしょし)】</b></p> <p>かつては御教書紙と呼ばれ、高貴な人たちの公文書に使用されていた。上品でふっくらとした紙肌と優美で洗練された風合いが上層階級に受け入れられ、特に優れた越前ものは「奉書」と名付けられ、他国のものとは区別して重宝された。</p>
	<p><b>【鳥の子紙(とりのこし)】</b></p> <p>越前和紙の代表でもある襖紙として使用される。紙の色が鶏卵に似ていることから、鳥之子紙、鳥之子色紙と呼ばれ、越前が主産地となっている。和漢三才図会には「肌なめらかにして書きよく、性堅、耐久、紙王というべきものか」と賞賛された。</p>
	<p><b>【美術工芸紙(びじゅつこうげいし)】</b></p> <p>水墨画、揮毫(きごう)用などに使用される紙で、昔は大麻で抄造されたものが主であった。</p> <p>漢字やかな文字を芸術的に表現する書道用紙として使われるほか、日本の伝統的な技法で描かれる日本画用紙としても使われる。越前和紙は、横山大観・竹内栖鳳・平山郁夫など、日本画の巨匠にも愛用されている。</p>



### 3. 上位関連計画の整理

#### (1) 新市建設計画〔平成26年3月変更〕

新市建設計画の主要施策として、伝統産業の活性化が位置づけられている。

##### 【主要施策】 伝統産業の活性化

本市には、国の伝統的工芸品に指定されている越前和紙、越前打刃物、越前箆笥をはじめ、漆器や織物など長く継承されている産業がバランスよく存在していることから、この特色を生かし、市全体を工芸の里と位置付けて工芸の里構想を策定し、これらの産業が継続して発展していくための振興策や、継体伝承や歴史的資源などを活用した産業観光の振興策など、産業と地域の活性化のための施策の方向性を定め、伝統産業と産業観光の活性化を推進するとともに、伝統産業の魅力を国内外にアピールし、地域産業の活性化を図ります。

#### (2) 越前市総合計画《基本計画見直し》〔平成26年7月〕

越前市基本計画において、伝統産業の活性化、観光振興に関し振興策が位置づけられている。

##### ① 伝統産業の活性化

###### ア) 工芸の里構想の推進

モノづくりのまちの特徴や伝統産業の新しい動きに対応し、産業の発展と産業観光の推進をめざす「越前市工芸の里構想」を策定し、その方針に基づき、伝統産業の活性化と個性ある地域づくりを推進する。

###### イ) 技術の継承と新商品開発支援

伝統技術・技法の習得・継承、後継者の育成の取組を支援するほか、デザイン力や技術力の強化を通じたブランド化、積極的なマーケティング戦略、異業種交流などを推進し、新商品開発や販路拡大を支援する。

また、産地の存続に係る包括的支援とチャレンジ的事業などの個別支援を組合せながら、業界・事業主が主体的に取り組む事業を重点的に支援する。

###### ウ) 拠点地域の活性化

工芸の里構想では産地の拠点となる地域を指定し、産業観光の面からも魅力ある産地づくりに取り組み、新しい顧客層の開拓、販路拡大などの施策を展開する。特に、イースト（東部）地域においては、和紙の里やタケフナイフビレッジ及び地域の史跡並びに隣接する漆の里などとも連携して、地域全体が産業観光施設としてさらに魅力的になるよう、体験実習や展示などを充実する。

また、越前打刃物の池ノ上刃物会館やタケフナイフビレッジ、越前箆笥や越前指物のタンス町界隈も産業観光の拠点とし、体験や展示販売などの魅力づくりに支援する。

##### ② 観光の振興（関連個所の抜粋）

###### ア) 歴史文化の薫り漂う観光資源の活用

見る、買う、食べる、憩うなどの素材を生かした観光を推進するとともに、まちなかの魅力的な素材や市内の歴史遺産の各所巡り、本市の歴史や伝統文化に触れるコース、伝統工芸品の体験

学習を目的としたコースなど、きめ細かな観光コースの企画・開発を観光事業者と連携し、促進する。

さらに、武生公会堂記念館をはじめ、紙の文化博物館、今立歴史民俗資料館などの文化施設を活用し、本市が誇る歴史・文化を紹介する。

#### イ) 産業観光・体験観光の推進

景観整備を進めている五箇地区やタンス町界隈は、周辺地域と連携した魅力ある産地づくりに取り組んでおり、産業観光の拠点となっている。

市内にあるさまざまな産業観光資源を活用して、産業の過去・現在・未来を楽しく学習してもらえるよう、事業所の協力を得ながら、見学受入れ態勢づくりを整えるとともに、生涯学習や学校向けの PR を行う。

また、見るだけでなく、越前和紙、越前打刃物等の伝統産業の体験観光を推進するために、短時間でできる手軽な体験や職人の指導を受けながら本格的なものづくりに挑戦する体験など、さまざまなニーズに応えられるコース設定を事業者と連携し、推進する。

#### ウ) 観光情報発信機能の強化

魅力ある「旬」な観光情報を分かりやすく提供できるよう、ホームページを常に更新・改善するほか、季節のイベントを特集した観光ポスターを随時作成する。市内の企業のホームページにおいても、本市の観光やイベントの情報を閲覧できるような仕組みづくりに企業の協力を得ながら取り組む。

さらに、本市の魅力を伝えることができるテーマ性のある観光ポスターを作成するとともに、観光事業者に対しては、平成 21 年度に製作した観光 PR の DVD を活用するほか、マスメディアに「旬」な情報を積極的に提供し、取材の働きかけを行うなど、本市への誘客を促進する。

#### エ) 交通アクセスの整備と誘導サイン充実

まちなかの観光資源の魅力を観光客に紹介するため、施設等への誘導サインや施設の説明板を充実させ、歩いて回れる楽しいコースの設定と PR に努める。

春と秋の観光シーズンに市街地周辺の観光拠点施設やまちなかを結ぶ移動手段として運行している観光回遊バスの充実を図り、観光客の誘致に努める。また、JR 武生駅を拠点としたタクシーによる観光コースの PR に努めるとともに、市民バス車両の利用による観光周遊コースの設定や、分かりやすい移動方法の紹介に努める。

自家用車やバスでの来訪者に対しては、統一した分かりやすい誘導サインを要所に設置するとともに、現在ある公共や民間の駐車場などを活用し、まちなかにおける駐車場の利便性を高める。

#### オ) 地域資源を生かした観光の推進

歴史の深い万葉の舞台となった味真野地区には、万葉集ゆかりの地として整備された越前の里味真野苑を中心に、万葉菊花園やタケフナイフビレッジがある。また、岡本地区には和紙の伝統を紹介する和紙の里や岡太神社が、栗田部地区には継体大王ゆかりの花筐公園等の文化財や史跡などの観光資源が多くあり、その特色を生かした観光ルートの設定や施設の整備に努める。

継体大王ゆかりの地である味真野地区、栗田部地区、岡本地区の継体大王にまつわる祭事や史跡を観光資源として PR する。

### (3) 越前市観光プラン〔改定・平成24年3月〕

越前市観光プランにおいて位置づけられている「具体的な取組」のうち、関連性の高いものを抜粋する。

#### ①伝統産業の体験観光の促進

伝統産業の体験観光を推進するため、越前和紙、越前打刃物、越前指物の短時間でできる手軽な体験や職人の指導を受けながら本格的なものづくりに挑戦する体験など、さまざまなニーズに応えられる体験コース等の設定を観光事業者や関係伝統産業組合と連携し推進する。

#### ②継体天皇ゆかりの地の観光環境の整備

継体天皇ゆかりの地である味真野と粟田部、岡本地区一帯を広域的な観光ゾーンとして位置づけ、観光環境を整える。継体天皇にまつわる祭事、行事、史跡等を活用した観光事業者等をバックアップする。

#### ③万葉集ゆかりの地の環境整備

万葉集ゆかりの地である越前の里味真野苑と万葉館を万葉ロマンテーマパークとして整備し、関係イベントと相乗効果が発揮できるよう環境を整備する。

#### ④来訪者の移動手手段確保

JRや福井鉄道などを利用して訪れた観光客が、目的とする観光地へスムーズに行けるよう公共交通機関等と連携し、二次交通の充実を図る。

#### ア) 観光タクシーの企画開発

観光タクシーや乗合ジャンボタクシーで周る企画の開発

#### イ) 回遊バスの運行

各種イベントが重なる時期や菊人形開催時期において、市民バスを活用し、イベント地を結ぶ回遊バスを運行する。

#### ウ) 無料レンタサイクルの活用

福井鉄道越前武生駅、観光匠の技案内所の無料レンタサイクルの活用を促す。

#### ⑤誘導サインの整備推進

観光客が分かりやすく、効率的に周遊することができるよう、また、市民も案内しやすいように観光施設への誘導看板等の設置を進める。

#### ⑥スマートフォンを活用した情報提供

利用者数が急増しているスマートフォンへの情報提供ができる仕組みを作り、観光情報発信機能を強化する。

## 第2章 東部（イースト）地区の課題

東部（イースト）地区の現況から導き出される伝統産業や観光振興の課題を明らかにする。

### 1. 伝統産業の課題

#### 課題1. 東部（イースト）地区の伝統産業が持つ文化的価値の研究・発信が弱い

- ・越前和紙は、1500年という長い歴史を誇り、高い品質と技術が評価され続けてきた産地である。紙の文化博物館には、国の重要有形民俗文化財に指定された歴史的な紙製品、製紙用具等超一級のコレクションがあるが、資料の研究が進んでおらず、展示設備が整っていない。
- ・また、はたおりの始祖である朽飯八幡神社を核とする織物の歴史については、研究や発信が少なく認知度が低い状況である。
- ・当面、紙の文化博物館の改修からスタートし、東部（イースト）地区の伝統産業の文化的価値を伝えられる地域を目指す。

#### 課題2. 伝統産業を活かした産業観光が進んでいない

- ・東部（イースト）地区には、伝統産業の博物館、体験施設、生産現場が集積しており、中でも五箇地区における和紙の生産拠点の集積、街なみの美しさは大きな資源である。
- ・一方、伝統産業の生産現場を見学するニーズが高まっているが、工場及び工房側の受け入れ態勢を整えることは困難な面が多く、時間等を限定しながら旅行者を案内する仕組みや、旅行者を案内するボランティアガイドの育成が求められる。
- ・職人、旅行者、ガイド、窓口が連携し、伝統産業を活かした産業観光を進める必要がある。

#### 課題3. 一般ユーザーに越前の伝統工芸ブランドが浸透していない

- ・越前和紙の特性として、商品ではなく素材としての生産が多いことから、一般ユーザーが「越前和紙」の名称に触れる機会が少なく、土佐和紙、美濃和紙、因州和紙等に比べてブランドが浸透していない状況にある。
- ・同様に、東部（イースト地区）の伝統産業において、越前ブランドが浸透しておらず、越前市の認知度やブランドに繋がっていない。
- ・産業振興及び観光振興の面からも、伝統産業の越前ブランド浸透を図る必要がある。

## 2. 観光振興の課題

### 課題1. 男大迹王や万葉集など東部（イースト）地区に固有の歴史資源の活用が弱い

- ・東部（イースト）地区において、歴史上最も重要な人物は男大迹王（後の継体大王）である。
- ・味真野地区には男大迹王ゆかりの寺社仏閣が多く、それらをつなぐ散策ルートの整備も進められている。これらの歴史資源の活用策をより深く探り、味真野神社及び味真野苑を中心に旅行者が男大迹王の歴史に触れられるよう工夫を重ねる必要がある。
- ・また、味真野地区は『万葉集』とも関わりが深く、味真野苑に立地する「万葉館」には味真野とゆかりの深い万葉集の歌が展示され、古代のロマンに触れることができる。万葉集の活用に関しても検討を進める必要がある。

### 課題2. 伝統工芸ゾーンと歴史ゾーン等の地域間連携が弱い

- ・東部（イースト）地区においては、和紙の里・五箇地区を中心とする伝統工芸・ものづくりゾーンと、味真野苑・味真野地区を中心とする歴史ゾーンが存在する。両ゾーンともに1500年の歴史を有する歴史・文化ゾーンであるが、十分な連携は図られていない。
- ・当面、情報発信における連携を進め、モデルコースや交通機関など連携を拡大していく必要がある。

### 課題3. 旅行者をもてなす情報発信、案内の整備が進んでいない

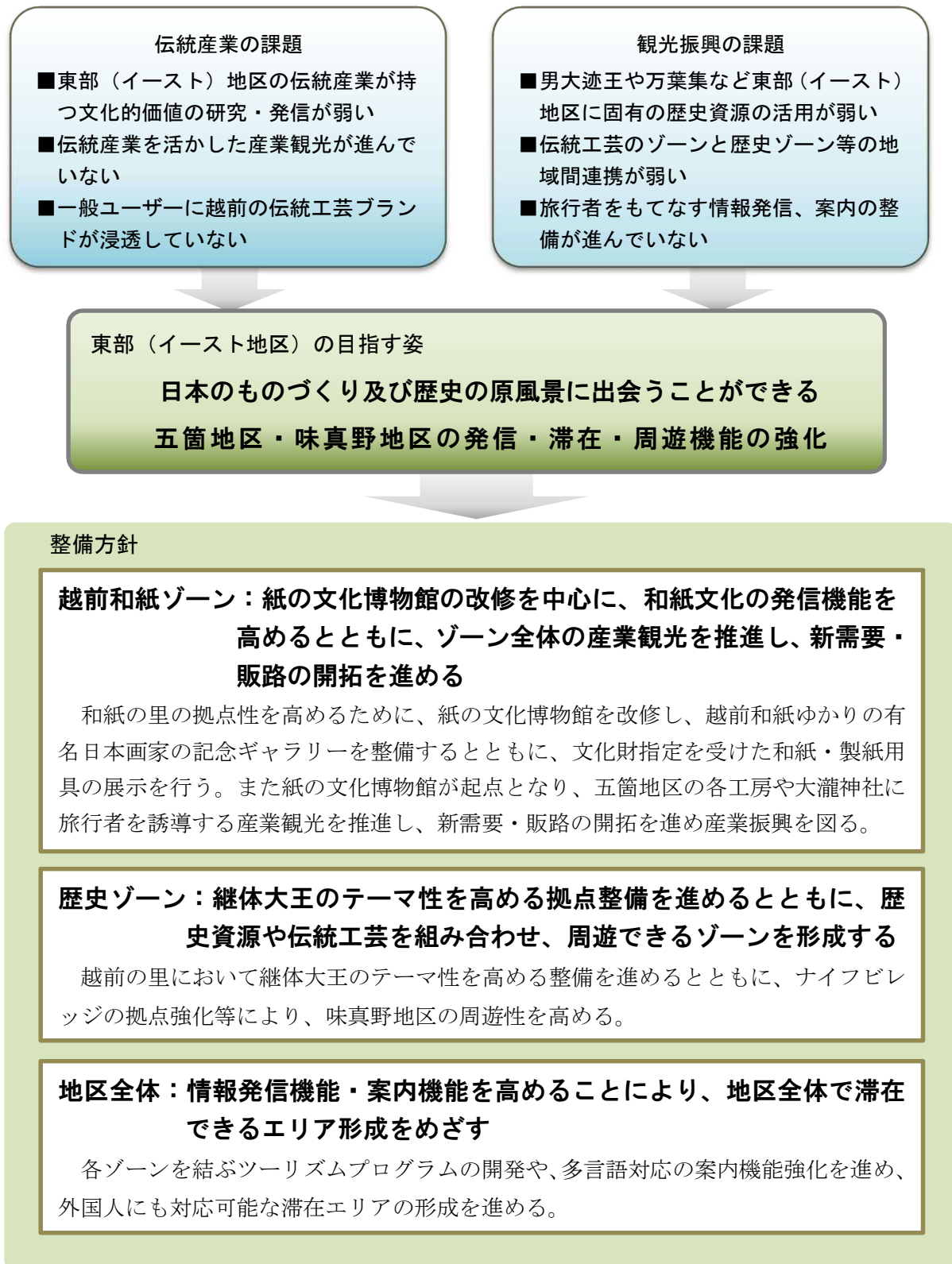
- ・越前市観光協会のWEBサイトやパンフレットを中心に情報発信が行われている。
- ・観光情報に関しては、現地におけるスマートフォンやタブレット端末を用いた情報収集、多言語対応案内、口コミ情報等に関するニーズが高まりを見せており、情報コンテンツの充実とともに情報発信方法の工夫も求められている。
- ・北陸新幹線敦賀延伸、東京オリンピック等を見据え、首都圏からの旅行者や外国人旅行者の増加を視野に入れた情報発信を進めていく必要がある。



## 第3章 東部（イースト）地区の目指す姿・整備方針

### 1. 目指す姿・整備方針

東部（イースト）地区の課題をふまえ、目指す姿・整備方針を位置づける。





### 3. 各ゾーンの振興策（プロジェクト）の体系

各ゾーンの振興策（プロジェクト）を整理し体系化する。

**越前和紙ゾーン：紙の文化博物館の改修を中心に、和紙文化の発信機能を高めるとともに、ゾーン全体の産業観光を推進する**

振興策1 紙の文化博物館を改修し、和紙文化の発信拠点、産業観光の起点とする

振興策2 五箇地区の産業観光の推進

振興策3 新需要・販路の開拓の推進

**歴史ゾーン：継体大王のテーマ性を高める拠点整備を進めるとともに、歴史資源や伝統工芸を組み合わせ、周遊できるゾーンを形成する**

振興策1 越前の里・味真野苑の魅力強化

振興策2 イースト地区をつなぐ魅力的な拠点づくり

振興策3 タケフナイフビレッジの独立工房ゾーン整備(関連事業)

**地区全体：情報発信機能・案内機能を高めることにより、地区全体で滞在できるエリア形成をめざす**

振興策1 和紙ゾーン・歴史ゾーンを結ぶツーリズムの強化

振興策2 情報案内機能の強化

#### 4. 越前和紙ゾーンの振興策

##### 振興策1 紙の文化博物館を改修し、和紙文化の発信拠点、産業振興・観光の拠点とする

事業目的	<p>全国に数ある和紙産地の中で、長い歴史、高い品質と技術を誇り、生産量が全国トップの産地として、和紙文化の総合的な発信を行う。</p> <p>特に、越前和紙を愛用した日本画家らの作品・書簡や、国指定重要有形民俗文化財指定を受けたコレクションが展示できるよう展示室のスペックを高める。</p> <p>また、収蔵品展示室（別館）の内容を見直し、越前和紙を用いた現代の様々なアーティストの作品を展示するとともに、ラウンジ空間を設け市民や観光客が休憩、商談等ができるよう工夫する。</p>
事業主体	整備：越前市      運営：越前市が指定管理者（和紙組合）に委任
事業時期	H27～H28（福井県ふるさと創造プロジェクトを活用予定）

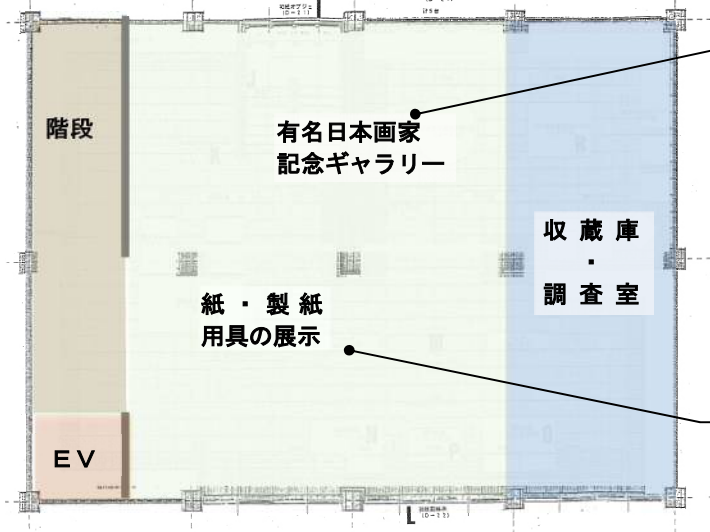
##### ■紙の文化博物館改修の方向性（事業例）

紙・製紙用具の展示（本館2階）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国指定重要有形民俗文化財である紙、製紙用具や歴史民俗資料館の文書等を展示するため、必要な基準を満たす照明、空調機能等を備えた展示室に改修する。</li> <li>・文化財の紙を中心に収蔵し、調査できる空間も配置する。</li> </ul>
有名日本画家記念ギャラリー（本館2階）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・越前和紙を愛用した日本画家らの作品やそれらにまつわる書簡等、越前和紙産地ならではの貴重な資料の展示が行える照明、空調機能等を備えたギャラリーに改修する。</li> </ul>
産地と和紙の紹介（本館1階）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現在の産地の様子、生産現場をデジタルアーカイブ等で紹介する。</li> <li>・興味を持った来館者に対しては、実際の生産現場の見学を取り次ぐ等、ガイド機能も強化する。（事務スタッフが、製紙会社に連絡する等）</li> <li>・また、市内小学生の授業で活用できるように、広さ、内容等を工夫する。</li> </ul>
有名アーティスト等展示ルーム（収蔵品展示室）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平成成長尺大紙を自ら漉いて作品を制作した有名漫画家をはじめとして、越前和紙を用いた様々なジャンルのアーティストの制作作品の展示可能な多機能を有する展示ルームに改修する。</li> </ul>
企画展・展示会場（収蔵品展示室）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・和紙の産地として柔軟に使えるスペースをとする。</li> <li>・和紙生産者による新商品の展示会や、和紙作家の企画展を開催するなど、産業振興につながる空間とする。</li> </ul>
和紙ラウンジ（収蔵品展示室）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現代の生活に合った和紙の使い方（ランプ、壁紙、テーブルクロス等）を提案するとともに、幅広い利用ができるラウンジを整備する。</li> <li>・観光客は、休憩しながら和紙の資料に触れることや、和紙の手紙を書いて投函すると大瀧神社と和紙を漉いている様子の記念印（消印）が押されて届くなど、和紙の楽しさに出会えるよう工夫する。</li> <li>・また、産地の方々が関係者等を和紙の里に案内した後、商談するなどの使い方も可能な空間とする。</li> </ul>
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>・バリアフリーへの配慮、できるだけフレキシブルに展示できる一体的な空間づくり、維持コストに対する配慮、等</li> </ul>



■機能配置イメージ例

紙の文化博物館 本館2階



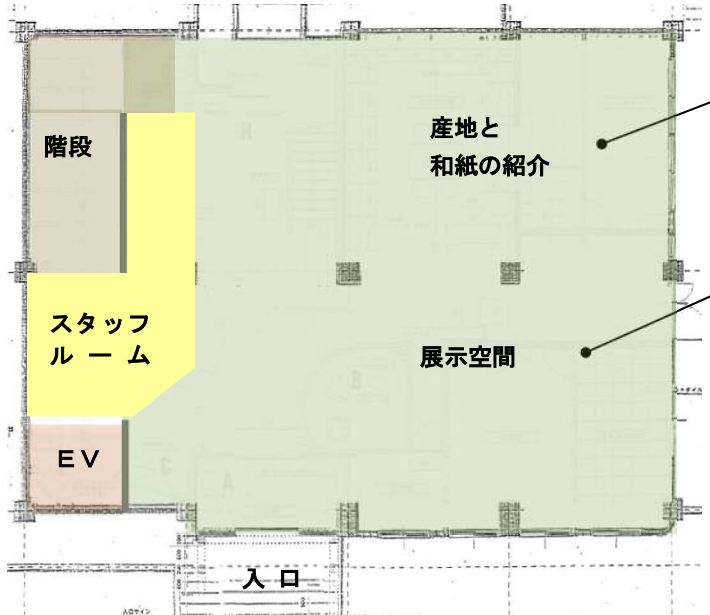
有名日本画家記念ギャラリー  
越前和紙を愛用したアーティストの  
作品、書簡を展示



紙・製紙用具の展示  
文化財指定を受けた紙、製紙用具の  
展示を中心とする文化発信



紙の文化博物館 本館1階



産地と和紙の紹介

産地の様子、  
生産現場を  
デジタルア  
ーカイブ等  
で紹介



展示空間

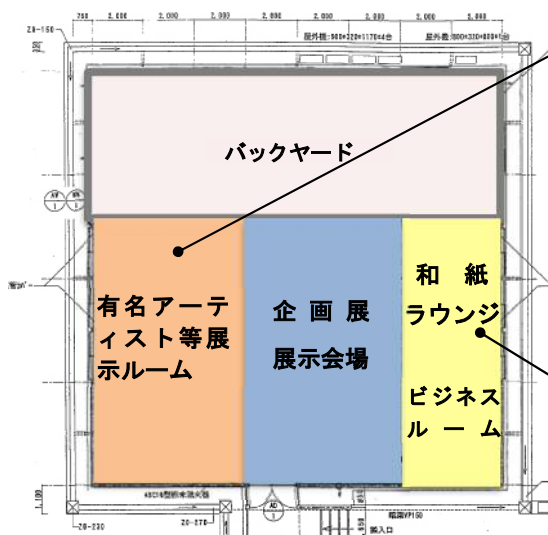
既存の展示物を中心に展示を再編

入口・事務室

入口や事務室  
の開放感を高  
める



紙の文化博物館 収蔵品展示室



有名アーティスト等展示ルーム  
親交のあるアーティストの作品を展  
示する



和紙ラウンジ

和紙の生活提案  
を行うとともに  
観光客の休憩、  
商談等幅広い使  
い方ができる





## 振興策2 五箇地区の産業観光の推進

- 事業目的 和紙に興味があるコアなファンを形成するとともに、リピーターや外国人旅行者に対応できる産業観光の仕組みを整備する。  
また観光バスで訪れる旅行者の満足度を高めるため、和紙の里通りの機能を強化する。
- 事業主体 越前市（事業の実施） 産地の組合、旅行代理店等（連携）  
※越前市全体のクラフトツーリズムの推進と連携する。
- 事業時期 H27～H28

### ■事業例

#### （１）和紙をテーマとするクラフトツーリズムプログラムの実施

- ・越前和紙の生産現場を解説付きで見学できるクラフトツーリズムのプログラムを開発し実験的に実施する。
- ・実験の中で、作り手からの要望、参加者の満足度などを確認し、プログラム開発につなげる。



金沢市が進めるクラフト  
ツーリズム実施の様子

#### （２）工房見学の仕組みづくり

- ・職人が作業する工房は、見学スペースを取ることが困難な場合が多く、仕事中は見学者との会話も難しいなど、常にオープンにすることは不可能である。
- ・複数の工房が連携し、それぞれ見学可能な時間帯を調整することにより産地全体で見学可能とする取組や、職人の手を止めないようボランティアガイドが解説付きで誘導する等、工房見学の仕組みづくりを進める。

#### （３）外国人に産地をガイドできる人材の育成

- ・近年、海外において日本の伝統工芸が高く評価されており、外国人旅行者も増えている中、伝統工芸を外国人にガイドできる人材が求められている。
- ・スマートフォンを使った外国語対応案内を進めるとともに、フェイス・トゥ・フェイスで伝統工芸の素晴らしさを伝えることができる人材の育成を進める。

## 【紙の文化博物館を起点とする産業観光のイメージ】

### 観光バスツアーで訪れる旅行者

観光バスツアーで訪れる旅行者は、滞在時間が短く手軽な見学や体験を望む傾向がある。パピルス館、卯立の工芸館を中心に、手漉き和紙の見学や体験を提供する。



### 和紙・工芸に興味がある コアなファン・リピーター

和紙・工芸に興味があるコアなファンには、手漉き和紙、機械抄き和紙の生産現場の見学を中心に、和紙文化をゆっくと味わって頂く。紙の文化博物館を起点に、見学可能な工場・工房に連絡を取り、旅行者が現場を見学できる仕組みを整備する。



### クラフトツーリズムプログラムの 実施（コアなファンの形成）

和紙に興味があるコアなファンを形成するために、和紙の解説、生産現場の見学、岡太神社の特別拝観等を組み合わせたプログラム（アテンド有）をつくり、定期的で開催する。



### 外国人旅行者への対応

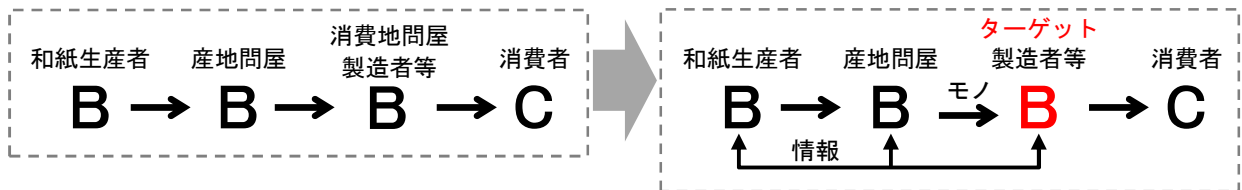
外国人旅行者は、滞在型のスタイルが多い。外国語で和紙の産地をガイドできる人を増やすとともに、スマートフォン用の多言語アプリを開発し、産地を見学できる仕組みを整える。

### 振興策3 新需要・販路の開拓の推進

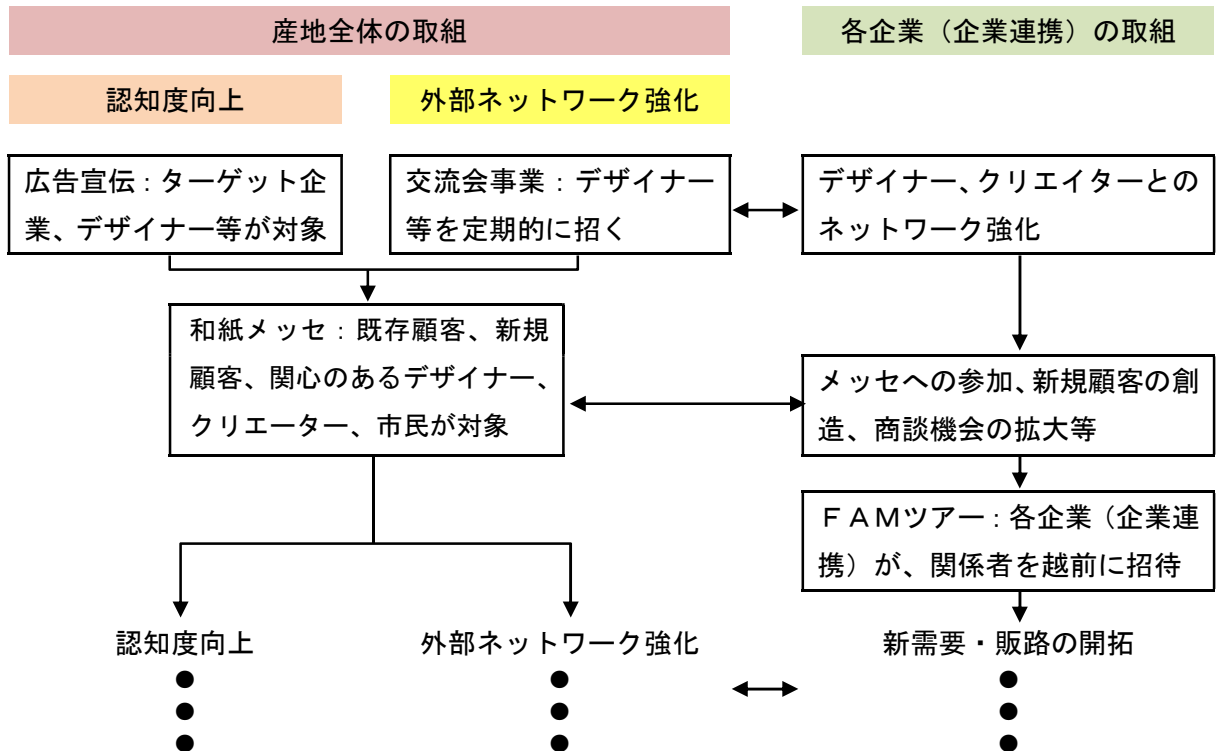
事業目的	越前和紙の産業特性である多様性を伸ばすため、各企業が持っている独自の技術、製品を基に、新しい需要・販路の開拓を進め、産地の産業振興を図る。 企業規模として、生産とマーケティングを全て行うことが難しい企業が多いことから、産地全体として越前和紙のブランディングや地域外へのネットワーク強化を進める事業を行い、各企業又は複数の企業による連携的な主体が、新需要・販路の開拓を進める。		
事業主体	産地全体の取組	和紙組合（事業実施）	越前市（事業支援） 全体のコーディネートを行う専門家（必要に応じ依頼）
	各企業の取組	企業が単独または連携で事業を実施	越前市（事業支援）
事業時期	H27～H28	事業成果を確認しながら内容・推進体制を見直す。	

#### ■事業の考え方

襖紙、証券紙等の大口の需要に対応していた従来の流通から転換し、中ロットのマーケットを開拓し、きめ細かい販路のネットワークを構築するために、生産者と産地問屋が連携し、消費者に近い企業（既存、新規）との商談機会を増やし、販売ルートを広げていく必要がある（下図）。



#### ■進め方（例示）



## ■事業例

### (1) 広告宣伝：ターゲット企業やデザイナーへのブランド力向上

- ・『+ DESIGNING』、『日経デザイン』、『デザインノート』等、デザイナー、クリエイターが購読するデザイン系の雑誌に、「越前和紙」の広告を掲載する。
- ・広告代理店やデザイナーに発注し、越前和紙の魅力を伝え、新規顧客が関心を持つ内容とする。
- ・雑誌編集者との関係性を強め、越前和紙の取材記事を増やす機会とする。
- ・詳細な資料請求や問い合わせを産地で共有することにより、新しい顧客とのつながりを構築する機会創出とする。

### (2) 交流会事業：プロダクトデザイナー、クリエイター等とのネットワーク強化

- ・国内外で活躍するデザイナー、クリエイターを定期的に越前市に招待し、講演会の開催や産地の見学を行うことをきっかけに、越前和紙のことを知ってもらうとともに、越前和紙関係者との人間関係をつくる。
- ・デザイナーのロコミで越前和紙の魅力を広げてもらうとともに、マッチングがうまくいけば、商品開発や販路開発に協力していただく。

例：佐藤オオキ氏（全国の伝統工芸の工房と連携した商品開発）、萩原修氏（つくし文具店代表、デザイン関連プロジェクトのディレクションの実施）、高橋理子氏（伝統デザインを活用した新商品開発）、柴田文江氏（伝統産業のブランド化）

### (3) 越前和紙メッセ等見本市の開催

- ・越前和紙の生産者、産地問屋が一体となり、越前市や首都圏で和紙メッセを開催する。
- ・広告宣伝事業や交流会事業の成果を活かし、ターゲットとなる企業をリサーチし、足を運んでもらうよう工夫する。
- ・商談コーナーでは、生産者、産地問屋が連携し商談を進め、越前和紙に対するニーズを開き出し、後日サンプルを届ける等、実効性の高い新需要・販路開拓を行う。
- ・新規販路とあわせて既存販路のブラッシュアップも進める。



金沢ペーパーショー・竹尾のブース

### (4) F A Mツアーの実施

- ・F A Mツアー（業界関係者を対象にした現地訪問ツアー）を定期的に開催し、ターゲットとなる新規企業、デザイナーを中心に、越前和紙の特性、文化性を伝えるプロモーションの機会とする。
- ・企業の単独開催又は複数の企業が連携した開催に対し、越前市が支援する。
- ・紙の文化博物館収蔵品展示室を改修した企画展・展示会場を活用するとともに、生産現場の案内、岡太神社の特別公開等を組み合わせ、魅力的なF A Mツアーを企画・実施する。



## 5. 歴史ゾーンの振興策

### 振興策1 越前の里・味真野苑の魅力強化

事業目的	継体大王をコンセプトに大王像の周辺ゾーンを再整備することにより、歴史の発信機能を高めるとともに、味真野神社との回遊性を高め、越前の里の観光拠点機能を強化する。	
事業主体	整備：越前市	※イベント開催は味真野観光協会
事業時期	H27～H28	

#### ■事業例

##### (1) 継体大王ゾーンの再整備

- ・継体大王をコンセプトに、大王像、蓮池、広場を一体的に継体大王ゾーンとして整備する。
- ・継体大王に関する案内の充実を図り、スマートフォン等を活用した情報発信についても検討する。
- ・継体大王ゆかりの寺社仏閣などの案内、誘導を強化する。



継体大王の花がたみ像がある味真野苑

##### (2) 味真野神社との回遊性の強化（園路の整備等）

- ・味真野神社への園路を整備し、回遊性を高める。

##### (3) イベント開催の強化

- ・味真野観光協会が中心となり、5月3・4日に「あじまの万葉まつり」が開催されている。味真野地区の歴史を活かした取組であり、発展的な継続が求められる。
- ・また、味真野地区の歴史資源である寺社仏閣等を活用したイベントの開催も行われており、旅行者も参加できるイベントの強化を推進する。



## 振興策2 イースト地区をつなぐ魅力的な拠点づくり

事業目的 イースト地区をつなぎ、周遊できる地域を形成するため、伝統工芸に関係する魅力的な拠点づくりや、宿泊施設の開業を促進する。

事業主体 民間事業者又は越前市（事業実施） 越前市（事業支援）

事業時期 H27～H31

### ■事業例

#### （1）旧家を活用した生活文化発信拠点の整備

- ・味真野地区、五箇地区の旧家等を活用し、越前市の伝統産業が生活に活用されている空間展示を行うことにより、各産地を周遊する人の流れを促進する。
- ・生活文化の発信拠点は、単なる展示では魅力が弱いことから、伝統工芸作家のギャラリーとしての活用や、工芸品に囲まれた空間で食事ができるレストランにする等、市民や観光客が立ち寄りたくなる拠点を目指す。



高岡クラフト市場街の取組例  
町家をギャラリーとして利用

#### （2）クラフトショップの開店促進

- ・クラフトを取り扱う店舗の開店に対し、一定の補助を行う制度を設けることにより、市内全域においてクラフトショップの増加を促す。
- ・また、クラフト作家自身が工房を兼ねたギャラリーショップを開店する際の支援も行う。
- ・クラフトショップが増えることにより、産地間同士がつながり、面的に工芸を楽しむことができる地域を創出する。



工房を兼ねたギャラリーショップ（瀬戸市）

#### （3）ゲストハウス・ドミトリー等の宿泊施設開業支援

- ・特に外国人バックパッカーは、ゲストハウス（素泊まり宿）やドミトリー（相部屋タイプの宿）を利用し長期滞在を好む傾向にあり、国内においてもゲストハウス・ドミトリーの開業が増加傾向にある。それらの宿泊施設を開業する際に一定の支援制度を設けることにより、外国人旅行者や長期滞在者への対応を強化する。

### 振興策3 タケフナイフビレッジの独立工房ゾーン整備(関連事業)

事業目的	共同工房型の生産体制が機能し、後継者が育っているタケフナイフビレッジにおいて、隣接地に「独立工房ゾーン」を整備し、若手職人の独立を支援する。	
事業主体	整備：タケフナイフビレッジ協同組合	支援：越前市
事業時期	H29～H31	

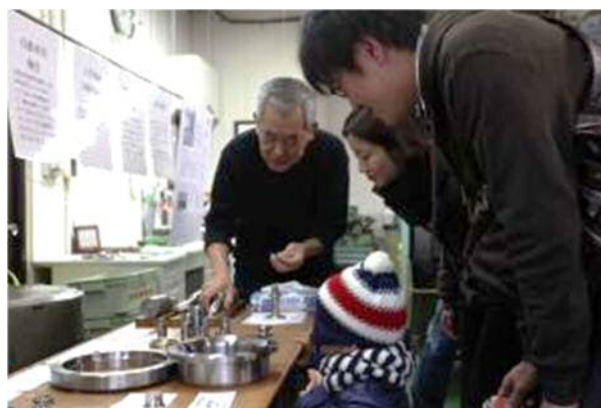
#### ■事業例

##### (1) 独立工房ゾーン整備

- ・「独立工房ゾーン」は見学者と交流しやすい空間とすることにより、見学者と職人が直接会話を楽しむことができるなど、観光交流機能を高めながら、販売につなげる工夫を行う。



製造過程をオープンファクトリー  
で見せるSUWADAの例



大田区で実験的に実施している  
オープンファクトリー

##### (2) 直営ショップの拡大

- ・現在の販売スペースが手狭なことから、直営ショップを拡大し、休日等は地元の野菜などを併せて販売できる空間を整備する。

## 6. 地区全体の振興策

### 振興策1 和紙ゾーン・歴史ゾーンを結ぶツーリズムの強化

事業目的	イースト地区におけるモデルルートや、語り部育成、サイン整備、外国人対応等を強化し、和紙ゾーン・歴史ゾーンが一体となった観光振興を推進する。	
事業主体	整備：越前市	ツーリズムプログラム開発は味真野観光協会
事業時期	H27～H28	

#### ■事業例

##### (1) イースト地区・ツーリズムプログラムの開発（モデルルート・着地型観光）

- ・ものづくりと歴史に触れることができるイースト地区において、複数のモデルルートを設定し、誘客につながる情報発信を行う。
- ・また、ボランティアガイドや工房見学など、現地の人と触れ合いながら、地元の人のお勧めポイントを周遊する着地型観光プログラムの開発を進め、希望する旅行者に提供する。

##### (2) 外国人旅行者への対応の強化

- ・情報発信の面では、Webサイトにおける外国語対応の強化を進める。
- ・東部（イースト）地区に着いてから、日本のモノづくりや歴史が学べるよう、外国語に対応できるガイドの育成や、後述する「多言語対応案内」の整備を進める。またサイン等の外国語表記も進める。
- ・滞在、宿泊機能としては、ゲストハウスやドミトリーの開業を促進する。

##### (3) サイン整備による分かりやすい誘導

- ・越前和紙ゾーンでは、和紙の里から大瀧神社までの動線が重要であり、街並みを損なわないデザインのサイン整備を進める。
- ・歴史ゾーンでは、「万葉ロマンの道」として観光名所をつなぐルートに万葉歌碑道標（灯籠）63基（中臣宅守と狭野弟上娘子の相聞歌）が設置されており、これを軸に誘導強化を図る。

## 振興策2 情報案内機能の強化

- 事業目的 スマートフォン等を活用した、旅行者への通信環境の整備、情報案内機能の強化を行い、観光の利便性を高める。
- 事業主体 越前市（事業実施）
- 事業時期 H27～H31

### ■事業例

#### （１）無料 Wi-Fi エリアの拡充

- ・ 鉄道駅、市公共施設、各伝統工芸の拠点施設等から無料 Wi-Fi エリアの整備を進め、日本人の来訪者をはじめ、外国人旅行者、地域住民が利用できる無料エリアの拡充を進める。
- ・ 商店街や特徴的なエリアは、商業者等と連携し面的な利用が可能なエリア整備を進める。

#### （２）多言語対応案内の整備

- ・ 伝統工芸の拠点施設では、Wi-Fi を使って外国人旅行者が多言語対応の案内を見ることができるようコンテンツを整備する。加えて、伝統工芸の産地や中心市街地、観光スポットにおいてコンテンツの整備を進め、外国人の受け入れ態勢を強化する。

#### 【多言語対応案内の事例】



広島クエスト  
広島県が提供している多言語対応スマートフォン用アプリケーション。5か国語に対応している。広島市では外国人向けのフリーWi-Fiの実験も実施されている。



KOBE Free Wi-Fi  
神戸市を訪れた外国人観光客に、公衆無線 LAN を1週間無料で提供するサービス。外国人観光客は観光案内窓口等でパスワードを記載したゲストカードを受け取り利用する。データを使った観光動線、滞在時間の分析も行う。

## 7. 各振興策の実施体制、スケジュールの整理

### (1) 越前和紙ゾーンの振興策

振興策	実施体制	事業年度	事業例
1. 紙の文化博物館を改修し、和紙文化の発信拠点、産業観光の起点とする ※	整備：越前市 運営：越前市が指定管理者(和紙組合)に委任	H27～H28	(1) 紙の文化博物館の改修
2. 五箇地区の産業観光の推進 ※	実施：越前市 連携：産地の組合、旅行代理店等	H27～H28	(1) 和紙をテーマとするクラフトツーリズムプログラムの実施
			(2) 工房見学の仕組みづくり
			(3) 外国人に産地をガイドできる人材の育成
3. 新需要・販路の開拓の推進 ※	実施：和紙組合 支援：越前市	H27～H28	(1) 宣伝広告 (2) 交流会事業 (3) 越前和紙メッセ等見本市の開催 (4) FAMツアーの実施

### (2) 歴史ゾーンの振興策

振興策	実施体制	事業年度	事業例
1. 越前の里・味真野苑の魅力強化	整備：越前市 イベント開催等：味真野観光協会	H27～H28	(1) 継体大王ゾーンの再整備
			(2) 味真野神社との回遊性の強化(園路の整備等)
			(3) イベント開催の強化
2. イースト地区をつなぐ魅力的な拠点づくり	実施：民間事業者または越前市 支援：越前市	H27～H31	(1) 旧家を活用した生活文化発信拠点の整備
			(2) クラフトショップの開店促進
			(3) ゲストハウス・ドミトリー等の宿泊施設開業支援
3. タケフナイフビレッジの独立工房ゾーン整備(関連事業)	整備：タケフナイフビレッジ協同組合 支援：越前市	H29～H31	(1) 独立工房ゾーン整備
			(2) 直営ショップの拡大

### (3) 地区全体の振興策

振興策	実施体制	事業年度	事業例
1. 和紙ゾーン・歴史ゾーンを結ぶツーリズムの強化 ※	整備：越前市 プログラム開発：味真野観光協会	H27～H28	(1) イースト地区・ツーリズムプログラムの開発
			(2) 外国人旅行者への対応の強化
			(3) サイン整備による分かりやすい誘導
2. 情報案内機能の強化	実施：越前市	H27～H31	(1) 無料Wi-Fiエリアの拡充
			(2) 多言語対応案内の整備

※は、ふるさと創造プロジェクト事業県補助金を活用して、平成27・28年度において実施する。



## 第4章 紙の文化博物館改修に向けた基本方針

### 1. 紙の文化博物館の改修

平成 27 年度速やかに改修工事に着手するために、工芸の里構想で検討した紙の文化博物館の改修の方向性を基本とし、産地関係者の意見を踏まえ展示計画等事業者選定をプロポーザルで選定していくための基本方針を定める。

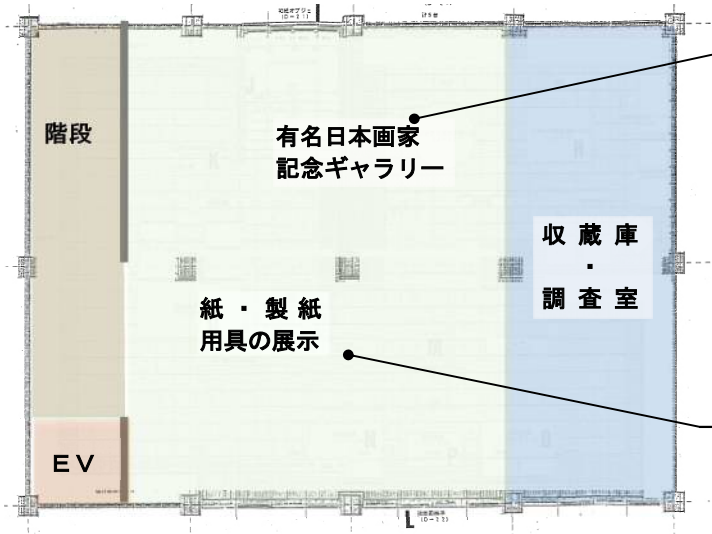
**コンセプト 紙の文化博物館を改修し、和紙文化の発信拠点、産業振興・観光の拠点とする**

#### ■紙の文化博物館改修の方向性（事業例）

紙・製紙用具の 展示（本館2階）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国指定重要有形民俗文化財である紙、製紙用具や歴史民俗資料館の文書等を展示するため、必要な基準を満たす照明、空調機能等を備えた展示室に改修する。</li> <li>・文化財の紙を中心に収蔵し、調査できる空間も配置する。</li> </ul>
有名日本画家記念 ギャラリー （本館2階）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・越前和紙を愛用した日本画家らの作品やそれらにまつわる書簡等、越前和紙産地ならではの貴重な資料の展示が行える照明、空調機能等を備えたギャラリーに改修する。</li> </ul>
産地と和紙の 紹介（本館1階）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現在の産地の様子、生産現場をデジタルアーカイブ等で紹介する。</li> <li>・興味を持った来館者に対しては、実際の生産現場の見学を取り次ぐ等、ガイダンス機能も強化する。（事務スタッフが、製紙会社に連絡する等）</li> <li>・また、市内小学生の授業で活用できるように、広さ、内容等を工夫する。</li> </ul>
有名アーティスト等 展示ルーム （収蔵品展示室）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平成長尺大紙を自ら漉いて作品を制作した有名漫画家をはじめとして、越前和紙を用いた様々なジャンルのアーティストの制作作品の展示可能な多機能を有する展示ルームに改修する。</li> </ul>
企画展・展示会 場 （収蔵品展示室）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・和紙の産地として柔軟に使えるスペースとする。</li> <li>・和紙生産者による新商品の展示会や、和紙作家の企画展を開催するなど、産業振興につながる空間とする。</li> </ul>
和紙ラウンジ （収蔵品展示室）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現代の生活に合った和紙の使い方（ランプ、壁紙、テーブルクロス等）を提案するとともに、幅広い利用ができるラウンジを整備する。</li> <li>・観光客は、休憩しながら和紙の資料に触れることや、和紙の手紙を書いて投函すると大瀧神社と和紙を漉いている様子の記念印（消印）が押されて届くなど、和紙の楽しさに出会えるよう工夫する。</li> <li>・また、産地の方々が関係者等を和紙の里に案内した後、商談するなどの使い方も可能な空間とする。</li> </ul>
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>・バリアフリーへの配慮、できるだけフレキシブルに展示できる一体的な空間づくり、維持コストに対する配慮、等</li> </ul>

■機能配置イメージ例

紙の文化博物館 本館2階



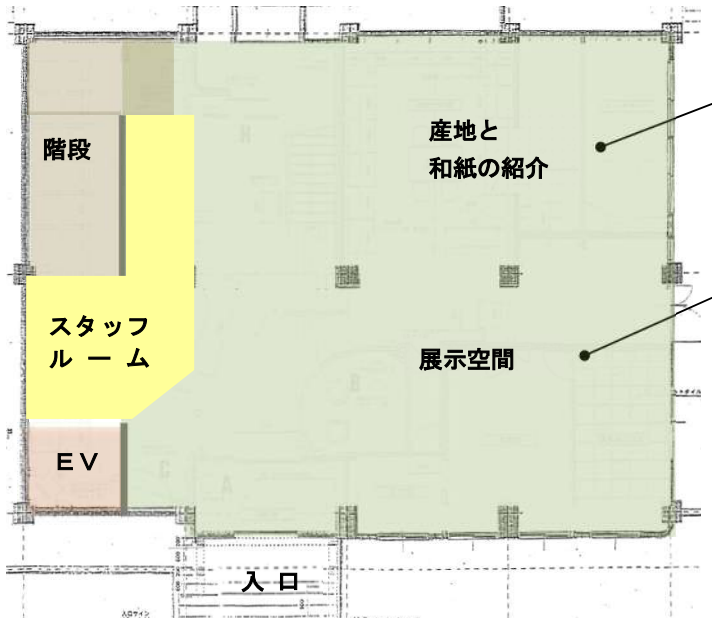
有名日本画家記念ギャラリー  
越前和紙を愛用したアーティストの  
作品、書簡を展示



紙・製紙用具の展示  
文化財指定を受けた紙、製紙用具の  
展示を中心とする文化発信



紙の文化博物館 本館1階



産地と和紙の紹介

産地の様子、  
生産現場を  
デジタルア  
ーカイブ等  
で紹介



展示空間

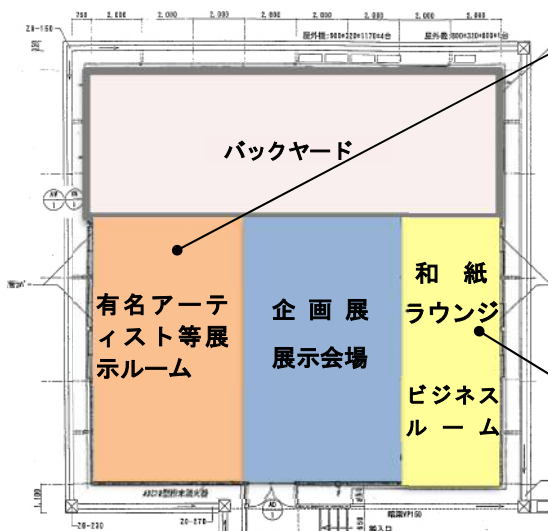
既存の展示物を中心に展示を再編

入口・事務室

入口や事務室  
の開放感を高  
める



紙の文化博物館 収蔵品展示室



有名アーティスト等展示ルーム  
親交のあるアーティストの作品を展  
示する



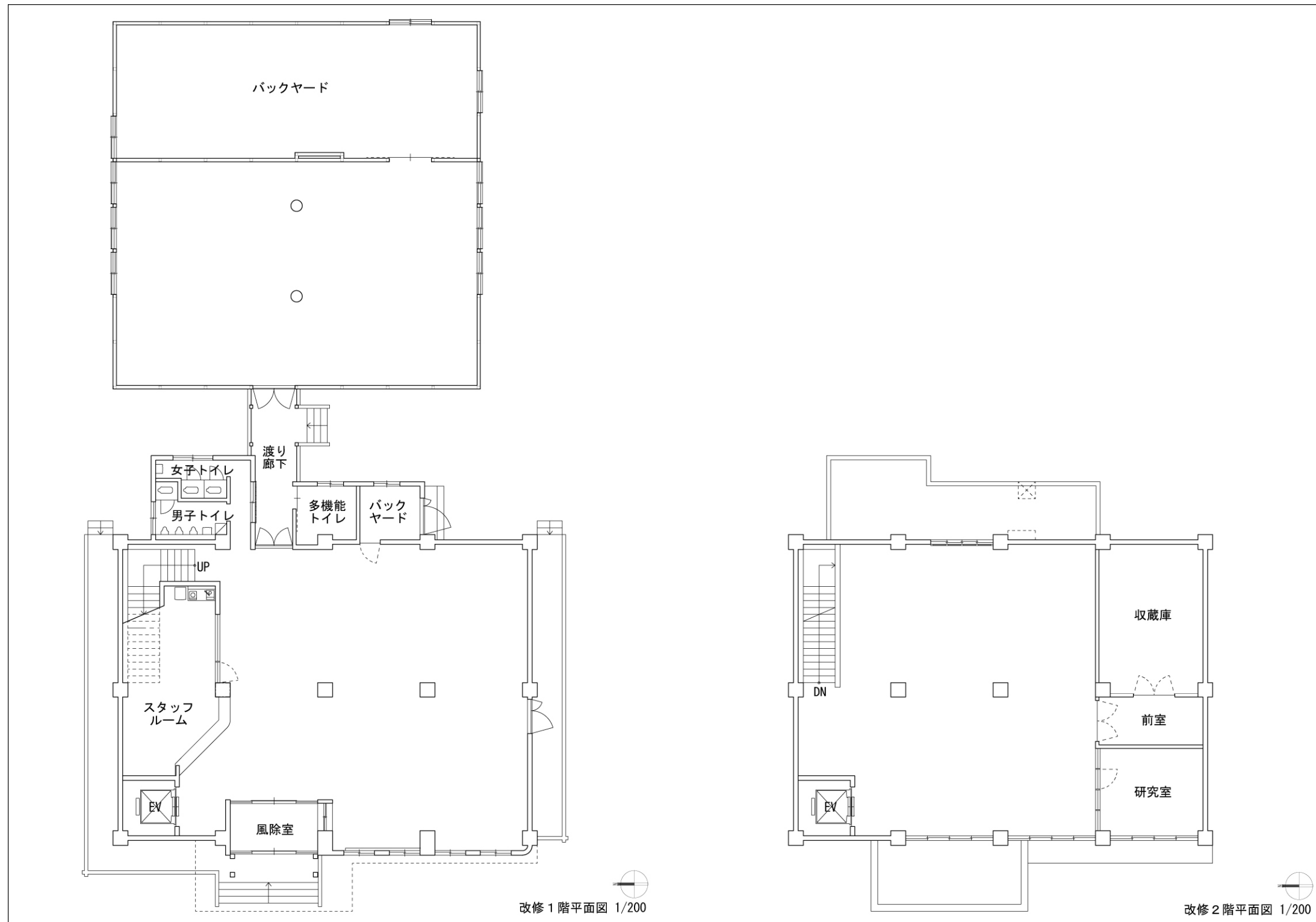
和紙ラウンジ

和紙の生活提案  
を行うとともに  
観光客の休憩、  
商談等幅広い使  
い方ができる



(2) 整備計画 (基本レイアウト)

- ・改修内容に基づき、基本レイアウトに関して検討を行う。



(A 3裏面)

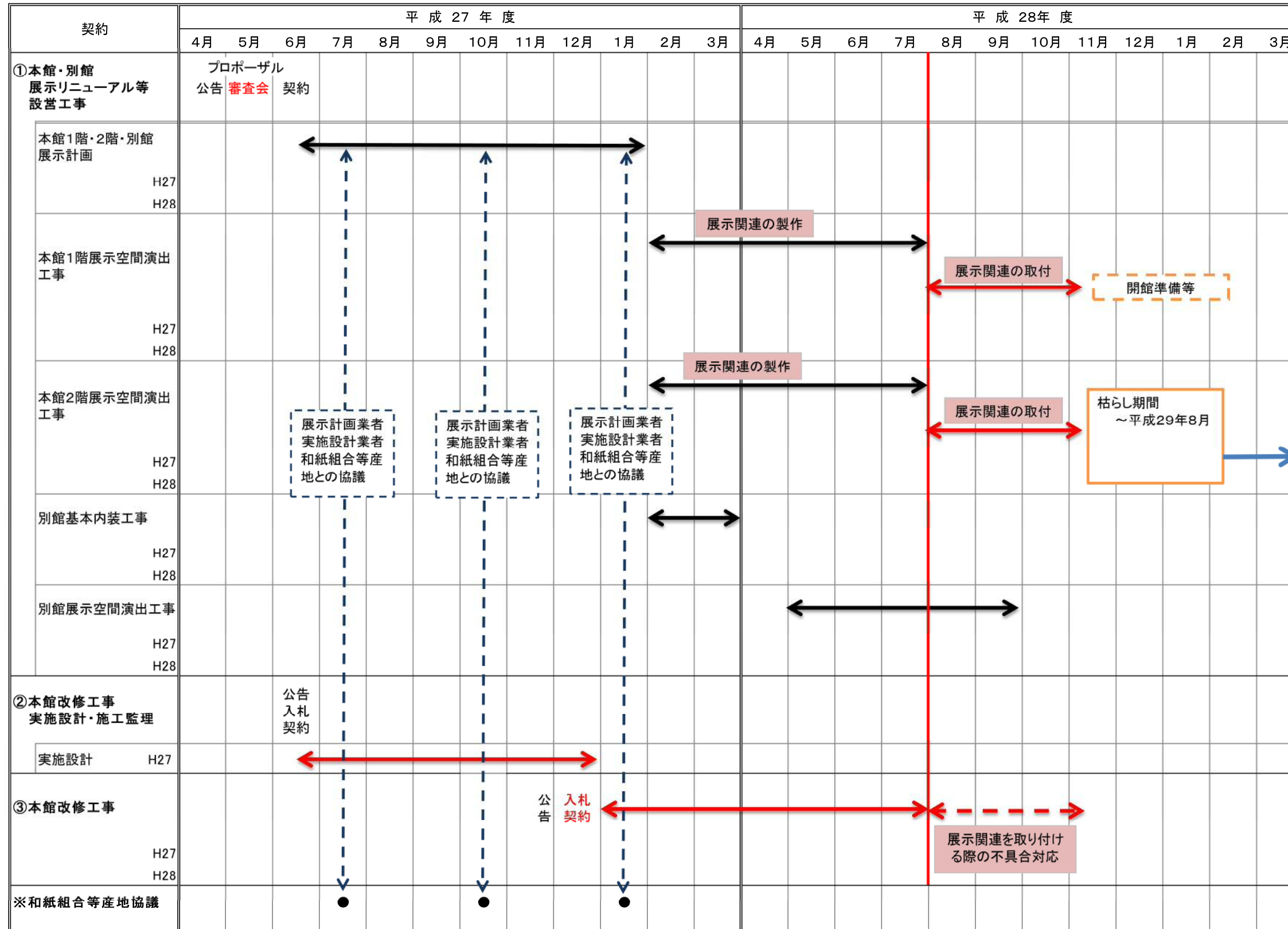
(参考) 現況平面図



(A 3裏面)

(3) 事業スケジュール

- ・ 展示リニューアルの計画及び工事を行う業者をプロポーザルで選定し、施設改修の実施設計を行う業者と連携し全体の計画・設計を進める。
- ・ 尚、展示及び施設の改修計画を進めるにあたっては、和紙組合をはじめとする産地との協議を随時行い、産地のニーズを十分反映した改修を行う。





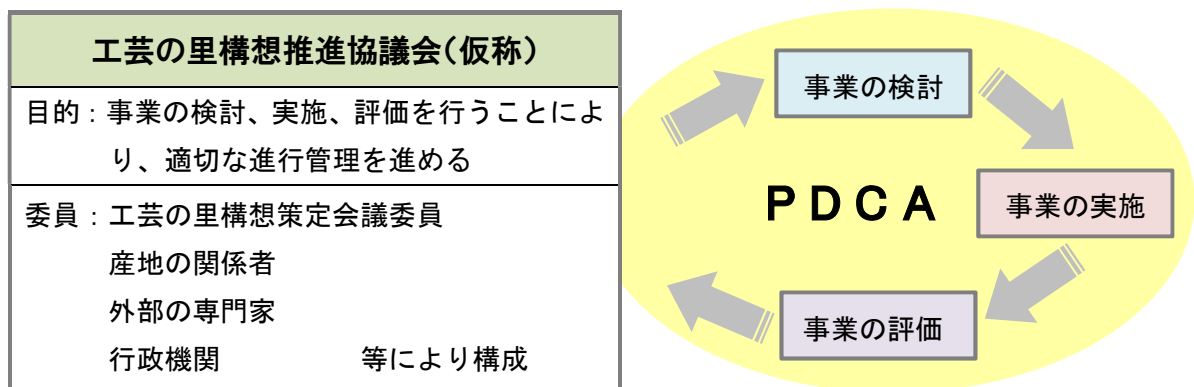
(A 3裏面)

## 第5章 ふるさと創造プロジェクトの実現に向けて

「ふるさと創造プロジェクト」に基づき振興策を進めていくが、同時期に策定している「越前市工芸の里構想」と関連が多いことから、両構想を合せて実現化の協議を進めていくことが望ましいと考えられる。

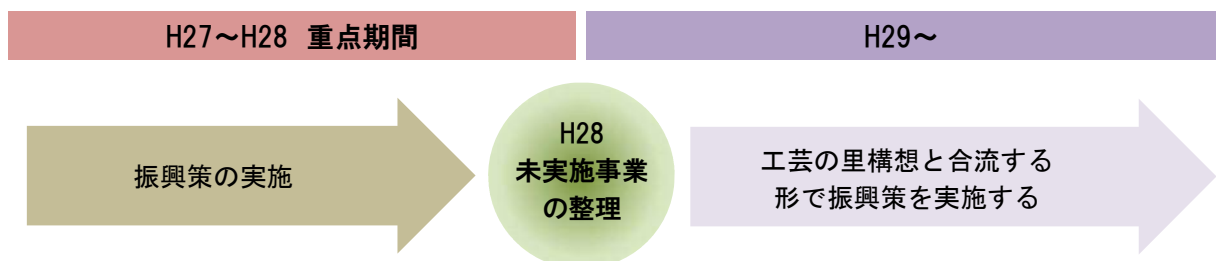
### 1. 推進体制

- ・越前市工芸の里構想では、適切な進行管理を進めるため、「工芸の里構想推進協議会（仮称）」を組織することを検討している。
- ・「紙の文化博物館の改修」など重点的な事業に関しては、プロジェクト毎の進行管理を行うとともに、全体の進捗管理は「工芸の里構想推進協議会（仮称）」と連携し実施する。



### 2. 推進期間

- ・「ふるさと創造プロジェクト」の重点期間は平成 27 年度から平成 28 年度までの 2 カ年である。
- ・重点期間中に全ての振興策の実施は難しいと考えられる。未実施事業等に関しては平成 29 年度から工芸の里構想と合流する形で、事業を進める。



## 資料編

### 1. イースト地区施設整備検討会（第1回）議事録

日 時：平成26年8月25日（月） 19:00～22:00

会 場：パピルス館2階

出席者名簿：

（委員）

団体名	役 職	氏 名
紙の文化博物館	館長	石川 浩
福井県和紙工業協同組合	副理事長	五十嵐 康三
福井県和紙工業協同組合青年部	青年部長	山下 寛也
女紙倶楽部	代表	山田 京代
和紙商業会	役員	杉原 吉直
紙漉き職人		滝 英晃
越前和紙の里 三館	マネージャー	清水 晶夫
学識者（文化財保護関連）		久保 智康

（事務局）

越前市企画部政策推進課	課 長	谷口 良二
〃	副課長	小林 勲
越前市今立総合支所地域振興課	課 長	渡辺 圭一郎
越前市教育委員会文化課	課 長	鈴木 昌幸
越前市産業環境部産業政策課	課 長	藤下 利和
〃 伝統産業振興室	室 長	転法輪 信
越前市産業環境部産業政策課	副課長	小泉 陽一

（コンサル事業者）

株式会社 計画情報研究所	米田 亮
株式会社 計画情報研究所	鶴沢 木綿子

### ■議事録

藤下課長： 現在越前市では、工芸の里構想策定会議において工芸の里構想の検討を進めている。先日、和紙組合の会議にて工芸の里構想について説明させていただいたが、欠席の方もいらっしゃったので、後ほど再度説明させていただく。

事務局： まず、委員の紹介をさせていただく。

— 委員紹介 —

施設整備検討会について簡単に説明させていただく。現在、平成26年度の越前市工芸の里構想策定のため、工芸の里構想会議を開き、構想の骨子について検討を進めている。会議の要旨をホームページにアップしているが、本日説明させていただく工芸の里構想骨子案については、第3回目の策定会議において委員からいただいた意見を踏まえた最新の内容だ。

本日のイースト地区の施設整備検討会は、ふるさと創造プロジェクトとして、平成26から3カ年、県より補助を受けて推進していく事業だ。本日は、主に、紙の文化博物館改修計画について検討いただきたい。27年度に実施計画策定、28年に工事開始という年度スケジュールは決まっているため、内容について関係各位のご意見をいただき、基本計画、実施計画に反映させていきたい。施設整備検討会は本日を除き、残り3回ほどの開催を予定している。工芸の里構想策定会議も、来年の2月末までに残り3回開催する予定であるが、工芸の里構想策定員会開催に合わせ、随時、施設整備検討会を開催し、工芸の里構想策定会議に意見をあげていくという考えである。よろしく願います。

続いて、工芸の里構想策定委員会で検討した骨子案について説明させていただく。

米 田： — 工芸の里構想について資料説明 —

事務局： 工芸の里構想は産業振興策を軸としているが、今回、施設整備検討会ということで、資料5ページを中心とした議論になるかと思う。さらなる肉付けになるご意見や問題点への指摘など、活発なご意見をいただきたい。振興策1に挙げている紙の文化博物館整備、和紙産業の土台となる部分だ。振興策2、3につなげていくという考え方で整理している。ご質問、ご意見があれば願います。

五十嵐： 資料8ページの振興策3と同じような取り組みを、何年か前に県が行っていた。それについての成果は調べてあるのか。越前和紙、打刃物、漆器、焼物の四産地を対象に、30万円以上、上限100万円までを補助するという制度だったと思う。

事務局： 25%補助するともものだったと思う。確認していないので成果は把握していない。

五十嵐： 全く同じ内容なので、確認していただきたい。また、振興策9に関しても、中小企業大学校が同じ取り組みを行っていた。データを集めて検証するべきだ。

山下： これらの事業は村おこしなのか、具体的に仕事を得られるための取り組みなのか、どちらなのかわからない。紙の文化博物館など、プロが紙の資料を見て、実際に作り手に制作の依頼がくるという流れは理解できるが、7ページ以降の、市民参加やクラフトマーケットに関する振興策となると、村おこしになるのか、我々に1日何百枚という紙制作の仕事をいただけるプロジェクトになっていくのか、わからない。どういうふうに考えていけば良いのか。

米 田： 5、6ページは基本的に産業振興であり、和紙の需要を増やしながら産地としての規模を維持していくための策だ。7ページ以降は、工芸の里全体として、来ていただいた方の満足度向上や、市民のより豊かな生活を目指す振興策だ。後半部分の取り組みに関して、生産者の方に直接携わっていただくということは難しいと思う。

担い手を見つけながら、皆さんにも参加していただく形が良いと思う。例えばクラフトマーケットであれば、主催者が別にいて、皆さんにも参加していただくという形だ。主体が違ってくる。そういう意味では村おこしに近いのかもしれない。

滝 : 紙の文化博物館改修が目玉事業ということか。

事務局 : 紙の文化博物館の改修は、ふるさと創造プロジェクトとして行っていく。ふるさと創造プロジェクトは、一つのハード整備を中心としながらソフト事業を進めていくプロジェクトだ。紙の文化博物館改修についての要望は以前から聞いていたので、今回提案している。

五十嵐 : リニューアルなのか、建て替えなのか。

事務局 : リニューアルを考えている。皆さんの意見次第だが、重要文化財を飾るためのスペースと設備を持つことが一番重要だと思う。

滝 : 道具類を紙の文化博物館に保管してほしい。

五十嵐 : 展示も重要であるが、保存することを考えなくてはいけない。

事務局 : 紙の文化博物館に保存機能は持てないと思う。総合支所と合わせて整備するという方向で検討をしている。

石川 : 資料の保管場所は必ずいる。大なり小なり、博物館と併設した場所に必要だ。保管できないと展示の変更ができない。大規模な保管場所は総合支所でも良いが、文化博物館に保管場所がないとなると、展示を変更する場合、どうすれば良いのか。

鈴木課長 : 資料の保存や展示は国の指導に基づいて行う。施設が保管場所として国に認めてもらえるかどうかの問題だ。

石川 : 国に認めてもらえるような建物を作っていただきたい。

久保 : 私は、重要文化財指定に向けて文化庁とやりとりを行ってきた。越前市が最低限守るべき施設の整備を実現するという約束で、先立って文化財の指定を受けた。そのため、文化庁は一刻も早く、文化財の展示、保管施設を整備してほしいと思っている。ただし、現在の紙の文化博物館は、文化庁から求められているスペック、スペースを全く満たしていない。文化庁が求める設備を持った施設にするためには、別棟の施設を建てる必要があるが、市としては、予算が足りないというのが現実だ。別棟の施設を整備しようとする、10年から20年かかってしまうかもしれない。それでは国は許してくれない。一方、現在、今立の総合支所を複合的な文化施設にしようという構想がある。合併特例債という財源を使うので、大規模な建物を作ることができる。そこに文化財の保管場所と展示施設を作るとするのが一番現実的で実現可能な方法だ。

紙の文化博物館は改修が限度であり、そのために使える予算も1億円程度と決まっている。その予算であれば3年以内に使うことができる。必要とされる設備を有した展示スペースは整備できると思う。紙の文化博物館はサテライト展示施設となると聞いている。本体の収蔵と展示場所にするには、予算も時間も足りない。

事務局 : 総合支所と合わせれば、文化庁が求める施設が実現できるのか。

久保 : 可能だ。もちろん準備は必要だ。総合支所整備に向けて国の補助金をもらうための手続きをしなくてはならない。展示設計と施工費に関しては補助が出るので、今



年度に必要な面積を市の計画の中で確保し、基本設計を作成し、来年の6月までに実施設計の頭出しをするという手順を踏まなくてはいけない。タイミングとしては今が瀬戸際だ。紙の文化博物館に展示、収蔵スペースを作れることが最良であることはわかるが、現実としては難しい。

五十嵐： 総合支所に作ろうとしているスペースを縮小し、そのスペースを紙の文化博物館に作るにしても、それほど金額は変わらないのではないか。総合支所のワンフロアを使わなくてはいけないのであれば、その分、支所の規模を小さくして、予算を紙の文化博物館にかければよいのではないか。

久保： 人の問題がある。

そもそも、この振興策を見て思ったのだが、一つ一つの事業の主体者が書いてない。一体どこの誰がどれだけのお金を使って行う策なのかまで書かないと、単なる絵に描いた餅だ。実現の見込みがあるのかないかわからない。どのくらいの予算をかければ、何年後に実現できるのか、ということまでを示したリアルな案を出さないといけない。

米田： スケジュールや予算、実施体制というのは、事業を実施する上で最低限必要であるということはもちろん理解している。ただし、今はその段階まで検討が進んでいない。

久保： 紙の文化博物館に関しても、単なる箱物と思ってもらっては困る。保存のノウハウを持ったしっかりとした管理人が必要だ。同産地の皆さんに対し、研究で還元していく能力を持った人間が必要だ。

五十嵐： 総合支所に資料保管スペースを作ったとしても、人が必要であることに変わりはないのではないか。

久保： 残念ながら、紙の文化博物館のためだけに新たに人を採用することはできない。さらに、総合支所に作るスペースは和紙道具のためだけの施設ではない。現在越前市には、国や県指定レベルの文化財を展示できる箱物が一つもない。公会堂でも指定品は展示できない。センター機能になる場所もない。発掘しても整理するスペースがないため、小学校のスペースを間借りして急場しのぎで対応している。越前市の文化財センターが必要だ。

石川： 文化財センターは総合支所に作れば良いと思うが、我々としては紙の文化博物館に実物の紙がないのは、問題だと思っている。現在は収蔵する場所も一時保管するスペースもない。小さいスペースでも良いので、一時保管する場所は最低限必要だ。保管場所がないと、展示を行う場合は必ず配送業者に運送を頼むのか、という話になる。紙がないと、紙の文化博物館の意味が全くなってしまう。

総合支所にも、もっと大きな保管場所が必要であるということは、理解できる。例えば和紙の道具に関しても、今までの道具は文化財に指定されているが、50年後には、これからの道具が文化財に指定されるかもしれない。そうになると、現在2,500点の文化財が5,000点に増える可能性もある。当然、今の倍以上の保管スペースが必要になるので、それを見越した建物は持っていただきたい。

久保： 1か0かという話ではない。紙の文化博物館に紙があってしかるべきだということとはよくわかる。展示のための改修と収蔵スペースの整備のどちらをも行うことが、予算的に可能かどうか確認する必要がある。また、紙の文化博物館で展示を行う際には、市から、紙の文化博物館の管理者である和紙組合に文化財を貸し出すことになる。市の展示収蔵施設から和紙組合が雇っている学芸員に文化財を預けるという形だ。そのため学芸員の方には、文化財を扱うためのノウハウを持っていていただけないといけない。

私が一番危惧しているのは、市の内部や議会で市長の構想に反対意見をもっている人がいた場合、紙の文化博物館に展示、収蔵スペースができたのだから、もう予算は必要ないだろう、と言われてしまう可能性があるということだ。私はそれを一番恐れている。産業政策課として紙の文化博物館が実現できたのであれば、教育委員会には文化財についての予算を回さなくても良いであろう、と言われてしまう可能性がある。それだけは、注意していただきたい。

滝： 横山大観やレンブラントの作品を展示できるスペースを作ることは、難しいということか。

杉原： 横山大観やレンブラントの作品が展示できれば良いと思う。多くの人がある。

久保： それらの作品を展示するための場所として一番安くできるのは、100～200万円の、単体のエアタイトケースを設置することだ。しかし外気の温度コントロールされていることが前提だ。

滝： 実際展示を行う場合に必要な予算など、我々では全くわからない。

久保： 具体的にどうしたら良いのか、どれだけお金がかかるかをイメージすることはすごく大事だ。レンブラントなどの作品を展示するのであればエアタイトケースは必要だ。エアタイトケースがあったとしても、古美術品を扱える経験のある学芸員のプロがいないと貸し出しは認めてもらえない。

滝： 井上雄彦の作品であれば、展示を行うことはそれほど難しくないのか。

久保： 私は京都の国立博物館で文化財を貸出す役割をしていた。必ず学芸員の経験を問う。要は人が大事だということだ。

滝： 貸し出しに値する人材がいないと、どうしようもないということか。

久保： 今の紙の文化博物館の学芸員の方に研鑽を積んでいただければ良い。古美術に関しては文化庁が2年クールで研修会を行っている。それを受ければ、国指定レベルの文化財の貸出しは認めもらうことができる。

石川： 紙の文化博物館の学芸員の方には、文化庁の研修を受けてもらうつもりだ。王子市にある紙の博物館で、紙の取り扱いに関する研修も行ってもらう予定だ。

滝： 必ずそのような、文化財を扱える人材が必要だということなのだろう。

久保： 今、産業政策課が取り組んでいることと、そのような人材育成の取り組みとが一致すれば良いが、それは無理だろう。

事務局： 産業振興課は、あくまで産業振興施策が中心だ。

久保：市の指定文化財よりも上位の文化財については、市の文化課に申請すると、文化財の担当者が施設の適合照会をかけて判断をし、貸し出しの許可を出すことになっている。

現在、県が越前和紙を世界無形文化遺産に登録しようと試みている。越前和紙全体というのは非現実的だが、奉書や檀紙など、個別のジャンルで団体認定されれば、その時点で世界無形文化遺産にノミネートされる資格ができる。

滝：和食のような流れで認定を受けることはできないのか。

久保：和食は特例だ。越前和紙は粛々と、ルールに則って登録に向けた取り組みを行うほうが良い。岩野さんが人間国宝に認定されているが、人間国宝と団体認定というのは180度方向性が逆の考え方だ。

杉原：では、人間国宝以外に奉書で団体認定をとることは、無理だということか。

久保：文化庁の担当者の考え方としては、岩野さんが個人認定されている限り、奉書に関しての団体認定は難しいということであった。しかし、他の情報を聞くと100%無理だとは言い切れないようだ。ただし、かなりハードルが高い。理屈として逆だからだ。

例えば、岩野さんの技術を若い人が継承しようと研究会を作り、1年のうちの1ヶ月を研修期間とする。研修期間中は給料分の補助金が出る。それを使い、岩野さんの奉書を複数の若い衆で体得していこうとするルールができれば、まず市か県の無形文化財の指定をかける。市か県の指定を受けるというステップを踏んでから、国の団体認定を受けるまでの道はそう遠くない。地元の人々の理解があれば、方法論的には難しくない。無形文化遺産認定は、効果的な産地振興策だと思う。

一方、人間国宝という個人認定でいえば、日本伝統工芸展に出品することが登竜門であり、奨励するのは教育委員会の仕事だ。福井県は今年度から、出品者に対して補助金を出す。これは他県にはない施策だ。そういうことについても、この振興策で言及しておくのと、よりリアルになると思う。

事務局：紙の文化博物館の後ろにある木造の収蔵庫は、文化財を保管展示することができず、B to BのBを惹きつけるための施設になると思う。皆さんに関係する話だと思う。どのような方法があるか意見を出していただきたい。

石川：スペースを利用した商売にはなかなか結びつかないのが現実だと思う。

杉原：初めて和紙の里を訪れた客には紹介するが、日帰り客は時間がないので、資料館を見ている時間はない。昼頃に訪れ、紙漉きをして打ち合わせすると時間がいっぱいになる。

事務局：FAMツアーの際に利用できるのではないかな。

石川：もちろん利用できるが、現実的に商売に結びつけようとするならば、漉き屋がどれだけ活用するかによる。それは組合や企業の問題だ。違う意味で、商売につなぐ仕掛けをしていかななくてはいけない。客と商談する場としては適さないので、ターゲットを違う人に向け、越前和紙のPRと、和紙の使い方提案をする施設にしても良い。

- 杉原： ただ見て帰るのではなく、紙に絵を描くワークショップや、手紙を書いて投函でき、化粧印を押して配送してもらえるとといったことができれば良い。
- 石川： 商品を見せる場所、FAM ツアーなどをできる場所に変えていかないといけない。手前の建物は常設展を行う場所になると思う。企画展示ができるのは一部かと思う。現状では、紙の製品説明しかされておらず、その紙がどう使われているかの説明が全くない。ただ吊るしてあるのではなく、作った人もわかるような展示があれば、商売につながるかと思う。卯立の工芸館の展示とは差をつけるべきだ。来た人が直接手で越前和紙に触れられるだけでも良い。
- 今の展示は、あくまで穴埋めだ。空きスペースをなんとか埋めた苦肉の策が、現在の状態だ。
- 杉原： 今回の展示は今の展示で、良い。
- 石川： すごいな、というだけで終わってしまっている。商売につながっていない。
- 杉原： 井上雄彦の影響力は大きい。現在、森美術館で展示をされており、次は21世紀美術館で展示を行う予定だそうだ。越前でも展示をできれば、産地振興につながる。
- 石川： そういった展示を行うスペースが必要だ。木造の収蔵庫で柔軟に対応できればと思う。紙の文化博物館と卯立の工芸館とは、差別化していかななくてはいけない。
- 久保： 文化財を活用して人を引き寄せる取り組みは様々な自治体が行っている。越前市においては和紙と打刃物が中心となるだろう。1泊するのか、日帰りなのかによっても訪れた人が時間を使う場所が変わってくる。宿泊客、日帰り客に対する個別プランニングが具体的にあって、初めて説得力を持つ。宿泊する場合はどこに宿泊するのか、といったことにも連動した構想にすべきだと思う。市内に潜在的な魅力はいっぱいあるので、もっと宿泊などについて提案しても良いのではないか。
- 石川： 回遊について考えることも大事だ。
- 久保： 工芸の里構想では、産地間で、限られた客の奪い合いになる可能性がある。全体の底上げを目指すべきだ。工芸の里構想の中では優遇されているので、和紙組合は一人勝ちになると思う。
- 清水： 例えば、卯立の工芸館は行きたいが、紙の文化博物館は見たことがあるから、もう行きたくないといった客や、その逆の客がいる。施設の料金設定や収入についての調査をしていただきたい。
- 事務局： 調査となると個別の施策になる。
- 清水： 先ほどから聞いていると、時系列、人件費という個別の具体的な話がされていた。どこから予算を確保するのかという部分では、やはり収入を増やすことが良いと思った。
- 久保： 市長のやる気を削がない程度に、人と金が必要だということを訴えなくてはいけない。これくらいのお金をかけたなら実現可能だというリアリティまで持たせなくてはいけない。リアリティを持たせるという意味では、例えば和紙の里3館、もしくは関連施設の入場料金を共通にするなどといった個別の具体案があってしかるべきだ。

- 滝 : 紙の文化博物館に、臨機応変に使える展示スペースがあったら良いのではないかと。B to BのB部分も、会社ごとに枝分かれすると思う。それぞれに対応し、簡単に展示を変えられるような場所があると、足を運ぶきっかけになると思う。
- 久保 : 普通は、展示の内容を変えるのは学芸員の仕事だ。紙の文化博物館の場合はあまり学芸員が展示を変えてない。むしろ、説明に力を注いでいるという印象だ。
- 杉原 : 卯立の工芸館の2階が自由に展示できるスペースになっている。
- 石川 : 作品展は卯立の工芸館で行えば良いと思う。ジャンル別、年代別や産地別など、実際に紙を見せる展示は紙の文化博物館で行うべきだ。今は展示物を取り外すこともできず、展示内容を固定化せざるを得ない。展示する紙も、越前の和紙にこだわる必要はない。他の産地のものと比較もしていけば良い。木造の収蔵庫を、柔軟に展示が行える場所にしていかなくてはならない。
- 事務局 : ハードとしての問題があり展示が変更できないということであれば、使い勝手が良くなるように改修すれば良い。また、人材の問題などについては、別の段階で整理をしていくことが必要だ。紙の文化博物館については指定管理制度をとっているため、管理者が展示を企画していけば良い。料金についても、指定管理者が上限の範囲内で料金設定できる。そういったことについてうまくコミュニケーションとれていないので、もっと意見交換をすると良いアイデアが出てくるのかと思う。
- 清水 : 私は紙の文化博物館の閉鎖的な事務室がオープンになれば良いと思う。事務局員が質問を受けやすいように、訪れた人との距離がもっと近くなれば良いアイデアが出てくると思う。
- 山田 : 卯立の工芸館は子どもを連れて行きやすい。展示スペースのある2階が暗くても、1階は明るいので入りやすい。一方、紙の文化博物館は入りにくい雰囲気だ。もっとオープンで外から入りやすいイメージになると良い。卯立の工芸館は伝統工芸師の方も気軽に話をしてくれる。
- 滝 : まず、入ってもらいやすいように工夫しないと、観光客の方も立ち寄らない。他の施設よりも奥にあるため、卯立の工芸館だけを見て紙の文化博物館までは足を伸ばさない人もいる。
- 山田 : 大野市にある博物館は木造で、非常に入りやすい雰囲気が漂っている。中にも子どもが遊べる場所があり、積み木もある。
- 久保 : 見かけ上はオープンで良いが、本当にオープンにすると、空調のコストが大きくなるので注意が必要だ。
- 石川 : エントランスをガラスにしたほうが、外から様子が見えて入りやすいのかもしれない。現状も重厚で良いと思うが、エントランスの間口が狭いのだろう。
- 久保 : 開放的な空間は卯立の工芸館に集中させても良い。紙の文化博物館は五箇の宝が見られる場所ということに特化しても良いと思う。
- 滝 : 重厚な展示を期待して実際に入った人が、がっかりしないように内容を工夫しなくてはならない。
- 久保 : 支所で作る文化財センターの展示スペースはそれなりのハイスペックを目指すので、しっかりした展示ができる。重要な文化財の展示は、文化財センターで行うと



割り切れば、紙の文化博物館はもう少しスペックを落とせる。機能分担をコントロールすれば良い。

事務局： 平山郁夫さんの絵を持っている人がいるという話も聞いたことがある。もしその作品を借り、展示することができれば魅力的な展示になると思う。

石川： 岩野平三郎の書簡があると聞いたこともある。ただ、古美術品というレベルのものを貸し出してくれるかわからない。横山大観の作品を、市に買っていただければ良い。

そういった美術作品の展示となると、卯立の工芸館の2階で展示すれば良いという話になってくる。それぞれの施設で機能分担をしなくてはいけない。作品と紙という分け方でも良いと思う。卯立の工芸館は作品の展示用だと思う。棲み分けをしていったほうが良い。量が多い時には第1会場、第2会場という使い分けもできる。

山下： 工芸の里構想として具体的に案が出てくるのかと思って期待していたが、資料を見ていても何の魅力もない。データもありふれたことが書いてある。がっかりした。

清水： 資料のための資料という印象だ。

山下： ヒアリング後に、「きっと何も変わらないだろうな」という話をしていた。結果がこれだったので、案がないのだなと思った。期待はずれだった。

久保： 想像するに、本日の議論のような活発な議論は、他の組合では行われていないということだ。他の産地では、積極的に建設的な話を交わしていないのだと思う。

事務局： 振興策というものが宝物のように出てきたら誰も苦労しない。前向きにお付き合いいただいているので、気持ちはわかるが、ご理解いただきたい。

山下： 悩んでいることがそっくりそのまま書いてあるという印象だ。

石川： 本日の資料はヒアリングをまとめた結果だと思っている。

山下： 確かにここからスタートなのだと思うが、何か打つ手があるのかと思って来たのでがっかりした。

事務局： 実際はどうしようかということとは働いている人が考えなくてはいけないので、本日は意見を出していただきたい。

石川： 本日は施設整備検討会だと聞いて来た。この会で振興策についての話をするのであれば、別に機会を設けていただかなくてはいけない。そうすれば、施策に関してそれぞれが案を考えてくる。3回や4回で終わるとは思えない。

事務局： 紙の文化博物館を来年改修するということは大前提にあるため、特出して議論をお願いした。意見は全体に関して出していただきたい。

石川： イースト地区推進委員会とは何をしているのか。

事務局： 観光という観点で、三産地の連携について検討を行っている。

清水： 産地をつなげるという話は以前からあがっていたが、実になっていない。

事務局： 産地ごとで商品があまりに違うため、個別に策を考えなくてはいけないということとはヒアリングで感じた。そのため3つに地区を分けて、それらをつなぐことを考えている。

清水： 越前市はガリバー的な集客施設があり、それに付随して人が集まる場所とは違う。越前の里をガリバーにするといった思い切った施策があるのであれば別だが、なかなか産地をつなぐことは難しい。

山下： 振興策については越前市と我々が考えて、実行していくのか。

事務局： 産業振興の観点として意見をいただき、行政が形を作っていくと思っている。

清水： 今日のような意見を聞いて、アイデアを出してくるのがコンサルタントの仕事なのだろう。

滝： それはそうなのだろうが、アイデアを聞くだけなら我々がいる意味は無い。今、資料のあら探しのようになっているが、そうではなくて、それぞれこうしていきたいという思いがあるのであれば、任せっきりになってしまっていることに違和感がある。こういう話があるが、こういう話もある、という進め方をしていかなくても3回では絶対に終わらない。来年という締め切りが決まっているのであれば、ちょっとでも実のある進め方をしていけないといけない。

石川： 今日は施設整備検討会なので振興策1についてだけの話かと思っていた。

事務局： 施設整備も工芸の里構想に位置づけられた一部分だ。先ほど地区推進委員会では何をするのかという話が出たが、地区推進委員会では味真野、今立、イースト地区をいかにつなげるかというソフト事業に関して、若い方を中心に自由活発に意見いただいている。それをコンサルタント業者が整理し、レベルアップして資料を提示する。

一番良いのは、資料の内容に関して、自分たちはこうしたい、こうしたら良いのではないかと、他の産地でこういう話を聞いたことがある、といったようなヒントをいただくことだと思っている。そういったことを含めて提案を述べていただくと、具体的に誰がどうするのかという書き方に落とし込めるようになる。

今後、施設整備検討会は3回の開催を予定しており、工芸の里構想委員会も3回ほどの開催を予定している。基本的には、各検討会から持ち上がった意見を、工芸の里構想策定会議の中で練って整えていくという道筋を考えているため、2段構えの委員会構成になっている。本日いただいた意見が反映されているのかの確認も含め、お時間に都合がつく方は、工芸の里構想委員会に参加いただきたいと考えている。

久保： 全体の構想策定会議の委員名簿があるが、この先生方が各産地での検討会からあった意見をまとめるのは難しいだろう。この会議を聞いていなくてはいけない。文章で伝わるわけがない。所詮はコンサルタントに頼るしかない。

地区推進委員会と地区整備検討会を分離したことが一番の問題だ。メンバーを絞ったほうが個別の話聞けるが、全体の中でモチベーションを持たせないと、何がどこまで活かされるかという感覚が持てない。地区推進委員会と構想策定委員会だけが合同会議を行うのか。

事務局： 合同会議は施設整備検討会の方にも参加いただく。

久保： 全員が集まる会議を開くという意味か。

- 事務局： そうだ。ただし工芸の里構想の会議は日中に開催することとなる。そのため、ご都合のつく方に参加いただくというスタンスをとっている。地区推進委員会にもそのように説明している。ウエスト地区からもセントラル地区からも集まっていたくようにしている。次回は9月24日の14時開催を予定している。
- 久保： 私はこういう会議に出るからには中途半端な立場でいたくない。たまたま本日は予定が空いていたから参加したが、当会議が開催されると聞いたのは一昨日だ。そういう日程調整をする会議は迷惑だ。出られる人は出てくれというのでは、失礼だ。構想策定会議が上部会議で、その委員の日程優先ということだろう。当会議はあくまで、工芸の里構想の各論部分を検討するに過ぎない会議なのだろう。
- 事務局： 施設整備検討会は、産地の細かい意見を聞く会議だ。
- 久保： 全体の工芸の里構想がどうなっているのかということに対して問題意識を持っていないと、自分たちの問題だと思って議論できない。そもそも、施設整備検討会は何なのかということだ。人を呼ぶからには次回もこのメンバーが全員集まれるよう日程調整をしてもらわなくては困る。意見がどう反映されたのか、次回に厳しくチェックしなくてはいけない。
- 石川： 工芸の里構想というのは、つまりは観光が目的となるのか。前から言っているように、産地としての目的は観光の活性化ではない。
- 久保： 観光も含めて産地振興するという話だろう。
- 石川： 手段という意味ではわかるが、目指す姿が観光ありきではない。観光は、一つの方法であり、工芸の里構想の目指すべき先に観光という言葉が出てきてしまうのは違うと思う。
- 山下： 同感だ。そのため、我々のための施策なのか、村おこしなのかという質問をした。
- 久保： 観光と産業施策を分けるという考え方になってしまうと、先ほど指摘したように、地区推進委員会と施設整備検討会のような分け方になってしまう。観光であれ何であれ、越前市で誰が何をどう思っているか、何が起こっているかを頭にインプットしてこそ、本気の意見を言えるはずだ。
- 米田： 観光を中心に考えているという思いは全くない。観光という言葉が出ているので誤解されやすいのかと思う。確かに振興策1は交流機能が中心になるが、振興策2はむしろ観光の要素がまったく入っていない。産地としてどうしたら産業を振興できるのかということを中心に、振興策に取り組んでいかななくては意味がない。もっと議論していきたい部分だ。
- 石川： 観光、産業振興も手段だ。工芸の里構想が誰のためのものなのかということが出ていないから混乱する。それについて早い段階で、策定委員会で決めてもらわないといけない。最後にそれが出てくるというのはおかしいと思う。
- 清水： 和紙の里としても、会議を行う必要があるのではないかな。

以上

## 2. イースト地区施設整備検討会（第2回）議事録

日 時：平成26年9月18日（木） 19：00～21：00

会 場：パピルス館2階

出席者名簿：

（委員）

団体名	役 職	氏 名
紙の文化博物館	館長	石川 浩
福井県和紙工業協同組合	副理事長	五十嵐 康三
福井県和紙工業協同組合青年部	青年部長	山下 寛也
女紙倶楽部	代表	山田 京代
和紙商業会	役員	杉原 吉直
紙漉き職人		滝 英晃
伝統工芸士		沖 桂司
越前和紙の里 三館	マネージャー	清水 晶夫
学識者（文化財保護関連）		久保 智康

（事務局）

越前市企画部政策推進課	課 長	谷口 良二
〃	副課長	小林 勲
越前市教育委員会文化課	課 長	鈴木 昌幸
越前市産業環境部産業政策課	課 長	藤下 利和
〃 伝統産業振興室	室 長	転法輪 信
越前市産業環境部産業政策課	副課長	小泉 陽一

（コンサル事業者）

株式会社 計画情報研究所	米田 亮
株式会社 計画情報研究所	鶴沢 木綿子

### ■議事録

藤下課長： 本日はお忙しい中お集まりいただき、ありがとうございます。現在越前市では、9月議会が行われている。本日は産業建設委員会が開催され、補正予算要求として提出したものについては、概ね了承いただいた。11月に行われる「和紙文化 in 越前」に関する100万円の補助金についても、ほぼ承諾いただいている。

本日は、前回のご意見を受けて修正した骨子案を元にご意見をいただきたい。よろしく願います。

米 田： — 資料説明 —

藤下課長： 紙の文化博物館に関連する事業として、今立総合支所を文化財センターとして再整備することを記してあるが、総合支所の整備については総合支所再整備検討委員会での議論となる。この点については、当検討会ではあまり論議されないようお願いする。

事務局： 資料に示しているものはあくまで案である。あまり資料の内容にとらわれずに、ご意見いただきたい。

紙の文化博物館の収蔵庫は、重要文化財指定品を展示する場所というよりも、産地として振興していくために、井上雄彦さんのような人が作品を展示できる施設だと思う。さらに、各企業が作っている製品を活かせるような場所をイメージしている。いろいろな使い方があると思う。

山下： 資料にある場所で良いのか、さらに博物館に設置する必要があるのかはわからないが、和紙カフェの案は良いと思う。

事務局： パピルス館で行われているクラフトイベントなどの取り組みを充実させるイメージだ。ただし、場所にこだわる必要は全くないと思う。

山下： 私の企画ではないが、例えば、いろいろな便箋が1枚ずつ展示販売されており、それを購入して、和紙カフェで手紙を書くことができるシステムをとっても良いという話があった。

米田： 門司港にある日本郵船のビルの1階に「テガミカフェ」がある。便箋やはがきを買ってドリンクを頼むと、そこで手紙を書いて投函することができる。手紙文化を振興させることを目的に行われている。和紙についても、和紙をもっと日常的に使ってもらうためのスペースがあったら良いのではないかと思う。

滝： お客さんが座って展示を見られるスペースがあると良いと思う。さらに、紙の本帳や書籍が読めるようなスペースであったら良い。

コーヒーなど飲食物を提供するということになる、担い人がいないのだろうということは理解している。

事務局： 和紙カフェと書いてあると、カフェの印象が先行するが、商談にも使うことができ、さらに市民のくつろぐ場所としての機能があるゆったりとした空間のイメージだ。

滝： 和紙が、生活用品として、今の時代にもマッチできるということを見せられる場であると良い。越前筆筒の机を使用したり、コースターを和紙にしたりと、普段の生活に潤いをもたせたような越前の品が見せられるスペースであれば、有意義だと思う。

山下： 今は、お客さんを案内してまわるときも、座って話をするところがない。博物館でも立って話をすることになる。そのため、和紙カフェのようなスペースがあれば良いと思う。ただし、今想定している場所は建物の奥なので、わかりにくい。博物館を通らなくても入れるようにすれば良いと思う。気楽に行きやすいほうが良いのではないかと思う。



清水： 人の問題が大きい。新しい企画をするごとに人がついていかないのが現状だ。誰が管理するのかという話になる。和紙組合で博物館の指定管理を受けるのであれば、人の数も含めてプランを考えてほしい。

また、お客さんに関しても、ある程度誘導しないと通った通りには動いてくれない。恐竜博物館でも案内看板が立っていて、人を誘導している。

質問だが、階段の位置は図面にある場所で決定なのか。

事務局： 決定でない。予算の中で収まるのであれば階段の場所が変わることに問題はないと思う。

清水： エレベーターを設置できないのか。たまに、階段では2階に上がられない方がいる。

事務局： 予算的に、人が乗るためのエレベーターを設置することは難しいと思う。維持費も関係してくる。ただし、車椅子用の昇降機は設置することができると思う。

滝： 車いすの人が2階に上がれないと意味がない。

久保： 公共施設を改修する際にまず考えることは、バリアフリーだ。バリアフリーは優先すべきだと思う。

どれくらい予算がかかるのか、具体的に計算しなくてはいけない。予算の枠は決まっているので、シュミレーションしていかないと、話が具体的に進まない。空調に関しては、今は電気の空調機械が主になっており、耐久年数は20年程度だ。少なくとも設備を何年間持たせるかまでイメージして、試算しないといけない。

また、前回収蔵スペースがほしいという話があったが、反映されていないのではないか。

事務局： 収蔵スペースに関しては、資料4ページにある、「紙の文化博物館改修の方向性」の中に明記している。ただし、どれくらいの規模にするかということは、今後決めていく話になる。

久保： 収蔵庫がある場合、空調のスペックが変わるので、経費が変わってくる。そこまですべてを想定して試算していかなくてはいけない。

事務局： この会議は、具体的に試算をする前に、一つ一つの内容をきちんと確認し合い、合意を図っていくというための会議という位置づけだ。

先ほど少々誤解を招く発言をしてしまったが、バリアフリー整備についても、頭ごなしに実現不可能ということではない。優先すべき項目から予算の枠にあてはめていき、その後、予算内に収まらなかった要望について、どうするか考えていく。予算内に収まらないから対応できないというのであれ、集まっていたいてい意味がない。必要なものが何かを聞きたい。

久保： 現在の平面図に落とし込まれている部屋の枠は、あくまで案と捉えて良いのか。

事務局： 紙の文化博物館平面図の色分けは、現状をなぞっただけだ。パピルス館の改修の時のように、壁を抜いたりできる可能性はある。

沖： 建物の強度、耐震が担保されているのであれば、フロアのうっとうしさをなくし、いろいろな展示ができるスペースにするために、間仕切りを取り払ってフラットにするという考え方もあると思う。

- 事務局： 重要な柱以外は、取り外すことも可能だ。間仕切りを取り払い、フロアをフラットにすることは十分に可能だと思う。
- 滝： 現時点で建物の耐震強度に問題はないのか。
- 事務局： 建物の耐震強度に問題はない。2階の壁の一部に弱い部分があったが、耐震には問題ない建物だ。去年の予算で検査している。
- 沖： スペースのバリエーションがあるということが、大事だと思う。
- 清水： 横5本、奥行き3本の柱の場所は、決まってしまうのか。
- 事務局： 柱は絶対に移動できないと思う。
- 久保： どういうスケジュールで整備を進めていくのか。
- 事務局： 今回の構想をもとにして、27年度に実施設計を行い、平成28年度に工事、平成29年4月1日にオープンという予定だ。
- 久保： それは無理だ。改修してから枯らし期間が必要だ。指定文化財を展示しないとしても、公共機関が作る博物館、美術館は必ず、東京文化財研究所のガス検査を受けないといけない。改修工事であっても、竣工からオープンまでは最低でも1年の4分の3程度、枯らし期間が必要だ。博物館や美術館の場合は厳密に規定されている。文化財未指定のものばかりを展示するとしても、定期的にデータを取る必要があり、最終的には東京文化財研究所の判断が必要だ。検査をクリアしないとオープンできない。平成29年度の春にオープン予定とおっしゃったが、今のスケジュールだと無理があると思う。
- 米田： スケジュールについては、ご指摘いただいた通り練り直す。
- 藤下課長： また相談させていただきたい。
- 事務局： 年度が明けた段階で、越前市として平成27、28年度の事業計画をどうするかという話になる。そこで、例えば平成27年度の12月もしくは平成28年の1月から紙の文化博物館の改予算要求をしてスケジュールを組んでいかななくてはいけない。必要性があれば年度をまたいで工事も可能だ。先ほど申し上げた予定もあくまで既定の通り行われる場合である。スケジュールの前倒しの必要があれば、そのように調整していかななくてはいけない。
- 久保： 平成29年の春にオープンのスケジュールは見直したほうが良いと思う。
- 滝： 施設整備の方向性として、今は文化財やアーティスト作品がメインになっているが、現在進行形で行われている手漉きや機械抄きの和紙づくりを、映像等で見られると良いと思う。
- 事務局： 和紙カフェのような空間で、映像が流れているイメージか。
- 滝： 場所は想定していないが、現在進行形の和紙づくりが紹介できる機能ができれば良い。今は施設整備の方向性が、文化だけに偏ってしまっている。
- また、同時に、和紙制作のための設備と、それによって漉ける和紙が紹介できると良い。お客さんがその映像等を見て、和紙制作の依頼をしてくれる可能性もあると思う。

- 米 田：産地としての産業の現在の姿を見せるということだろう。実際の作業現場でも見たいが、産地に来て、まず、まとめて見ることができる場所があると非常に良いと思う。
- 久 保：個々の企業でも観光客を受け入れているところがあると思う。そういった場合、情報ガイダンスはどうしているのか。
- 滝：地元の間屋さんがお客さんを連れてきてくれるパターンが多い。もしくは越前和紙組合経由だ。Webで検索してくる人もいる。
- 久 保：コネクションの無い観光客が突然訪れて、製造現場を見たい場合は、難しいのか。若い人はWebで見て情報集めてくると思うが、中高年の方は、行き当たりばったりで来るのではないか。
- 滝：年配の方のほうがしっかり調べてくる。来月、Webで検索して私の会社を見つけたという、佐賀の方が訪れる予定だ。
- 久 保：やはり訪れた人が最も感激するのは、漉いている現場を見た時だと思う。それを売りにすべきだと思う。紙の文化博物館に情報発信のガイダンス機能を持たせるべきだ。清水マネージャーがおっしゃったように人の問題が必ず出てくるが、どんな場合でも人の問題は必ずある。単にビデオを置くだけでは何の役にも立たない。
- 滝：単にビデオを置いてくれと言っているのではなく、今現在、現場が行っている仕事を見せるスペースがほしいということだ。紙の文化博物館はスペースが限られているので、ビデオだとしても、ないよりはあってほしいという意味だ。
- 久 保：ビデオで見るくらいなら、お好みに応じて見学できる場所の情報を伝えたほうが良い。
- 滝：見学に来ていただける方はそれで良い。ただし観光客の人は時間の枠がある。
- 久 保：それがまさに越前和紙、打刃物、箆笥の三産地が合同で議論しなくてははいけないところだ。観光客の滞留時間の常識にとらわれず、もっと和紙産地に長く滞在してもらうためにはどうしたら良いか、考えていかないといけない。
- 山 下：漉いている立場からすると、例えば外から作業場を眺めるだけなら構わないが、やはり何かしら説明などをするととなると、作業の手は完全に止まってしまう。
- 久 保：やはり、人の問題になる。例えばボランティアを組合で募集し、生産現場を見学する際も、ボランティアが質問に応じるというシステムを作ったら良い。
- 工芸の里構想というのは、和紙の産地だけではなく、工芸の里に来るお客さんの底上げをしないと意味が無い。産地で仕事をしている人には関係ないと思うが、情報発信にまず反応してくれるのは観光客だ。どこの観光地も、いかに長く滞在してもらうかということを考えている。
- 山 下：間屋さんがお客さんを連れてきた場合は、間さんが説明してくれる。その間、私達は仕事ができる。
- 鈴木課長：和紙の里には過去に何回も工芸の里構想のような計画があり、そのすべてに、紙漉きの現場が見学できるようにするという内容が含まれていた。しかし、現在もそれが実現できていない。単に案内人がいれば良いという問題ではない。かつて、酒

を飲んだ観光客が製造現場に入ってきて、製造者に対して不躰な態度をとったこともあった。和紙を指で押して、すべてをダメにしてしまったこともある。

久保： 私は単に、客の立場として、製造現場を見ることができたほうが良いと言っているだけだ。

米田： 資料7ページに記してあるが、工芸の里構想の中で、産地全体でクラフトツーリズムに取り組んでいくことを検討している。プログラム化するまでには試行錯誤を繰り返す必要があり、さらに、越前市として情報発信窓口の一本化をしていかなくてはいけない。いろいろな問題があるので、すぐ理想的な形で進めることはできないと思うが、調整しながら全体で取り組んでいきたい。

久保： 率直な印象だが、まだ産地の皆さんは商売ベースで考えている気がする。もっと紙のユーザーを広げようと思うのであれば、紙ファンを増やすための取り組みを行っていかなくてはいけない。一見さんが大切だ。製造現場の見学も、他の工芸の産地では当たり前に行っている。

滝： 産業ではなく、工芸だからできていることがあるのではないかと。

鈴木課長： 越前和紙の産地の多くは、家の奥や後ろ側に紙漉き場を持っている。それが観光化できない理由だと思う。

米田： 例えば越前打刃物であれば、観光客の方に産地を訪れてもらい、最終商品を買ってもらうという流れがあるが、和紙の場合は最終製品ではないため、見学者がすぐにファンや個人的な消費者につながらないという部分がある。ただし最終的なエンドユーザーに対してどうイメージアップしていくかは、非常に大事な部分だと思う。

清水： 最近は昔のように町内会とか商工会のツアーはあまりない。もっと中身を知りたい、深く知りたいという要望があると思う。

久保： やはり作っているところを見ると買いたくなるものだ。

事務局： 例えば、見学できるスペースを整備する場合に、行政で支援するという話になれば、産地としては受けられるのか。

五十嵐： 現在の越前和紙の製紙工場で、補助金程度で見学できるように整備可能な建物は、おそろくない。通路を作る場所もないと思う。それを踏まえて考えてもらわないと、単に補助金を渡すので整備できるか、と聞かれても困る。

久保： ボランティアの方などに案内をしてもらい、しかるべき情報提供と誘導をしてもらえば良い。

清水： 福田忠雄さんは墨流しの体験で人気を集めている。そういう漉き屋があると面白いと思う。

石川： 産地を訪れた観光客に対して文化博物館の職員がきちんと対応すれば良い。職員が各漉き屋と連絡をとりあい、見学の調整をすれば良いだけの話だ。実際に各企業の場所まで案内しなくても良い。見学の手配をし、地図を渡してあげるだけで良い。そのためには、紙の文化博物館の事務所をオープンな空間にし、訪れた人が声をかけやすくしなければいけない。作業現場の見学を希望する人が毎日いるわけではないので、十分対応できる。あとは受け入れられるところを把握しておくことが大事だと思う。

朝倉遺跡の一乗谷は、産地のアプリがある。スマートフォンにアプリをダウンロードしておいて、実際にその場に行くと、英語や中国語で説明が聞ける。同様に、紙の文化博物館の中の展示についても、アプリで説明できれば良い。ソフト的な取り組みも必要だと思う。

- 米田： 外国人の方も増えてくると思うので、多国籍語で対応は必要だろう。
- 石川： ソフトであれば、更新も容易だと思う Wi-Fi 機能の整備が必要になってくる。
- 米田： 前回、別の会議で観光の話をしていた際、やはり Wi-Fi がないと外国人の方が困るという意見があった。
- 滝： 通り沿いと大滝神社には Wi-Fi があったほうが良い。
- 杉原： 大滝神社は良い神社だが、あまり知られていない。
- 滝： 神社に関して詳しい説明がないからだと思う。
- 石川： そういう意味では紙の文化博物館には、産地への導入となる説明が必要だ。
- 米田： 紙の文化博物館には、入り口の機能を持たせられれば良い。
- 杉原： 大滝神社に来た外国の方に、祭りの様子をタブレットで見せたら、食い入るようにして見ていた。
- 山田： 産地に来て現場を見たいという人は、それほど高齢の人ではないので、スマートフォンのアプリも活用されると思う。
- 滝： 中高年の方でも数人で来られる場合は、1人はスマートフォンを持っていると思う。
- 久保： 京都で今外国人観光客に人気があるのは、伏見稲荷神社だ。外国人旅行者は皆 Web に観光地の投票をする。そこで、もう1度行きたい観光地ランキングの1位に、伏見稲荷が何度か選ばれた。選ばれた大きな理由は、無料で2時間くらい楽しめるからだ。さらに京都駅に近い。金沢は外国人対応が遅れており、意外と外国人が流れていない。
- 清水： 京都の伏見稲荷神社では、外国人の出すごみ問題については、いかがか。
- 久保： よくわからないが、かつてほどゴミが捨てられている様子を見たことはない。
- 米田： 例えば You tube で紙を漉いている様子を見て現地を訪れるなど、外国人の方は口コミで動いていることが多い。産地の紹介方法の一つとして、そういったメディアの使い方はあると思う。
- 石川： さらに実際に産地を訪れた方がスマートフォンをツールとして、歩いて見てまわれるということが重要だ。
- 米田： また、和紙だけではなく、打刃物や筆筒など、他の産地と連携できると、潜在的にもバリエーションが増える。
- 事務局： Wi-Fi を整備するというのは、良いアイデアかと思う。工芸の里構想の新しい方向ということで十分位置付けできると思う。
- 久保： 京都は Wi-Fi のないところはほとんどない。
- 滝： Wi-Fi はフリーじゃないと意味がないと思う。パスワードを入れてつなぐというのでは、手間だ。

- 久保：フリーだとしても、日本の場合、英語のページを開くために一手間かかる。セキュリティの問題なのだろうが、外国人の方はうっとうしく思うそうだ。
- 杉原：フリーにして、さらにルーター開放してセキュリティをつけないでおけば良い。
- 石川：さらに、アプリが全部ガイドランスし、情報発信してくれるとなると良い。
- 清水：外国の観光客の方を見据えるとしたら、二次交通についての提案が必要だと思う。
- 鈴木課長：海外の方は、南越駅が出来る予定である武生インターチェンジから和紙の里まで平気で歩くと聞いた。また、「Washi」という言葉が世界の共通語になっているが、本物がわからないので、本物を求めて越前を訪れるとことが多いと聞いた。越前和紙の産地は本物を保存していかなくてはならないと思う。
- 事務局：金沢の外国人対応の話があったが、金沢は古い旅館を外国人向けに改装した宿が多くあるそうだ。そのため、外国人が金沢の安宿に泊まり、1泊2日で広島まで行くということもあるそうだ。日本の拠点になっているらしい。越前市も、そういった観光客を呼び込めないか。
- 久保：越前市であれば、立地的に、京都に滞在している観光客を対象にしたほうが良いと思う。宿泊場所に越前市の情報を置いておけば良いと思う。
- 米田：ドミトリー形式の宿が外国人の方に好まれる。ただし、日本の各地にはまだ少ないため、それがあがる金沢や京都に長く滞在するのだと思う。
- 清水：紙の文化博物館の整備の話に戻るが、例えば階段の位置を変えられなくなれば、展示空間のバリエーションは限られてしまうのか。
- 事務局：絶対に外せないのは15本の柱だけだ。内側の壁は取り除ける可能性が高い。
- 石川：1階の階段から出ている壁は、もともとなかった。
- 久保：ある空間だけ空調のスペックをあげる場合、あまりオープンスペースにすると空調コストがかかってしまう。ある程度壁があったほうが、そこだけ空調レベルをあげることができるので、ランニングコストが抑えられると思う。また、仮設の壁の場合は、その空間に固定のケース設置はできないと思うので、可動のエアタイトケースなどで対応することになる。
- 石川：本館で企画展をしていきたい。また、他の産地から借りてきたものを展示する場合もあるかもしれない。
- 久保：一番良いのは空間全てをハイスペックにすることだ。あとはコストの問題だ。
- 石川：2階の空間すべてをハイスペックにできれば良い。
- 米田：2階の空間を重要文化財の展示に耐え得るスペックに整備するとし、ランニングコストなどについて検討していかなくてはならない。
- 事務局：何を展示するかも重要だ。
- 石川：展示する材料はたくさんある。歴史的なもの、世界の紙、日本全国の和紙、お札関連でも展示可能だ。ただし今は手元にない。また、平三郎さんに許可をいただき、日本画がどうやって生まれてきたかをたどる展示も企画できる。江戸時代の紙がこうだったという分析もできる。ただし、スペースに限りがある。常設展と企画展の両方を行うことを考えるとスペースがない。どこに何を置くかについては最終的に詰めていく話だ。

久 保： もし紙の文化博物館の2階で県外から借りてきた品で企画展を行う前提ならば、絶対に、ある程度のスペックを持った収蔵庫が必要だ。

また、2階に作品をどう上げるかということも考えないといけない。エレベーターがあったほうが良い。作品を階段で持ってあげるとするのは最後の手段だ。例えば大幅の掛け軸が斜めに入る程度のエレベーターを設置するといったことを考えていくべきだ。搬入をどうするかなど、具体的に考えていかないといけない。

事務局： エレベーターは維持管理を含め、高コストだということは聞いている。

事務局： 文化博物館について、非常に有意義なご提案をいただいたと思う。紙の文化博物館の施設改修及びソフト的な事業に加え、更に補強して検討していきたい。また、何かご意見等あればよろしく願います。

— 9月24日合同会議について説明 —

久 保： 福井県としては、越前市が工芸の里構想に取り組んでいるということは理解しているのか。方向性の整合性はとれているのか。

事務局： 整合性はとれていると思っている。

小林副課長： 県のものづくりの里プロジェクトでは、5産地が連携強化をしていくことが目的であり、今は産地の方に意見を聞いている段階だ。ふるさと創造プロジェクトは越前箆笥と和紙と打刃物の三産地の、ハード整備がメインになっている。ふるさと創造プロジェクトは、人を呼ぶことから産業振興に取り組もうという傾向の補助金であり、産業観光として、どのくらい人を呼べるのかなども補助金の基準にされている部分がある。この会議でそこまでを確認する必要はないが、そういうにらみ方で進めているという意味で、概要を話させていただいた。

事務局： 先ほどご提案いただいたソフト事業などを、ふるさと創造プロジェクトに関連させ、ソフト事業に関しても補助を受けて取り組んでいければ、大きな効果が期待できる。

本日は非常に貴重なご意見をいただきありがとうございました。また会議録を整理しメールで配信させていただく。もし趣旨と違う点などがあればご指摘いただきたい。また、9月24日に行われる合同会議の会議録についてもお配りさせていただく。次回のふるさと創造プロジェクトイースト地区施設整備検討会に日程は未定である。日程は事前に調整させていただく。できるだけ皆さん参加いただける形で開催させていただきたい。事務局で課題を整理し、論点を絞ってご意見を伺う会議にしたい。よろしく願います。

藤下課長： 本日は貴重なご意見をいただきありがとうございました。また構想に反映させていただき、次回の会議に諮りたいと思う。

以上



### 3. イースト地区施設整備検討会（第3回）議事録

日 時：平成26年10月10日（金） 19：00～20：30

会 場：パピルス館2階

出席者名簿：

（委員）

団体名	役 職	氏 名
紙の文化博物館	館長	石川 浩
福井県和紙工業協同組合	副理事長	五十嵐 康三
福井県和紙工業協同組合	組合員	山田 晃裕
福井県和紙工業協同組合	組合員	小畑
福井県和紙工業協同組合	組合員	五十嵐（岩六製紙所）
福井県和紙工業協同組合	組合員	柳瀬
福井県和紙工業協同組合	組合員	梅田
和紙商業会	役員	杉原 吉直
越前和紙の里 三館	マネージャー	清水 晶夫

（事務局）

越前市産業環境部産業政策課	課 長	藤下 利和
〃 伝統産業振興室	室 長	転法輪 信
越前市産業環境部産業政策課	副課長	小泉 陽一

（コンサル事業者）

株式会社 計画情報研究所	米田 亮
株式会社 計画情報研究所	鶴沢 木綿子

#### ■議事録

藤下課長： 本日はお忙しい中お集まりいただき、ありがとうございます。これまでに工芸の里構想策定会議を4回開催し、イースト地区の施設検討委員会を2回開催した。そこでいただいたご意見を資料にまとめている。これらに対して忌憚のないご意見をいただきたい。本日はよろしく願います。

米 田： — 資料説明 —

事務局： 具体的な設備の配置などは後で決めていけば良いと思う。現段階では、紙の文化博物館にどのような機能を付加すべきかについて、ご意見をうかがいたい。

また、前回議論されたエレベーターについてだが、3人乗り程度のものであれば、500万円ほどで設置可能である。

これからは産地全体として外国人客を意識していかなくてはいけないと思う。外

国の方を呼ぶ際、どのような機能が必要だと思われるか。

杉原： 私が案内する場合、仕事で産地を訪れた方が多いので、仕事の現場を見てもらうようにしている。また、大滝神社を見られた時の感動は深い。日本人でも同様だと思うが、文化博物館よりも奥にもっとすごいものがあるということを知らずに帰ってしまう人が多く、もったいないと思う。

米田： 産地としての深みは大滝神社や生産現場にあると思うが、まず、入り口機能としての紙の文化博物館に必要な機能についての提案をいただきたい。産地の深部に引き込んでいくための入り口だと思う。

杉原： 多言語でのインフォメーションが重要だ。

米田： 多言語で産地の紹介をする場合、スマートフォンのアプリなどで対応する方法もある。いずれにしても、和紙と和紙の里について、多言語で紹介できるような仕組みは必要だろう。

杉原： もしくは、有料でも良いので、ガイドが案内するような取り組みがあっても良い。時間があらかじめわかっているならば、申し込む人はいると思う。

事務局： 文化博物館から生産現場や大滝神社へつながる仕組みが必要なのだろう。和紙の里としては、紙の文化博物館を中心とするという考え方で良いか。

梅田： 紙の文化博物館には現在、大滝神社の写真とそこへ行くまでのルートが記されているが、それを見て大滝神社に行く人はいるのか。

石川： いる。休日だと和紙の里から歩いて大滝神社を訪れる人がいる。案内図のようなツールも必要かと思う。

杉原： 大きな看板は、今の時代の風潮に合わない。よく見ればわかるという程度が良い。

石川： パンレットなど小さいツールを持って歩いてもらい、同時に、人を誘導する意味での案内看板があっても良いと思う。Wi-Fi 整備やアプリでの案内が一番良いと思う。

米田： アプリで経路誘導もできる。杉原さんがおっしゃるように、目立つサインを入れると地区の雰囲気にならなくなる。きちんと調和するデザインのサインを作っていく必要がある。

石川： 五箇地区は景観大賞に選ばれている。大滝神社などの看板がなぜ紫色なのかは説明できない。

米田： 既存の看板のデザインを見直す必要も、あるのかもしれない。

清水： 空調環境が整備されるのは本館の2階だけなのか。

事務局： 2階は文化財を展示するための特別空調整備が必要だが、全館で、ある程度空調整備を行う必要があると思う。

米田： 空調だけではなく、ショーケースのスペックも高いものになると思う。

石川： 小さくても良いので、収蔵庫を建ててほしい。

清水： なぜ今の図面ではスタッフルームがこれほど小さいのか。

事務局： 具体的な面積などは、これから考えていく。今は機能を中心に考えていただきたい。

- 石 川： バックヤードではなく、文化財を保管できる収蔵庫にしてほしい。展示入れ替えをするための紙を保管することができない。
- 米 田： 2階で企画展を行う際、保管スペースがどの程度必要かということは検討しなくてはいけない。
- 石 川： バックヤード自体、文化財をおけるようなスペックにしておく必要があると思う。もしくは他の予算を組んで収蔵庫を作ってほしい。
- 米 田： 今ある土地でどの程度対応でできるのかという検討も必要だ。実際、現在の図面通りのバックヤードで広さが足りるわけがない。再度検討させていただくこととなる。
- 梅 田： ビジネスルームには、一般の人の立ち入りも可能なのか。
- 米 田： 自分の工場を案内したり和紙の里を案内した後に商談したり、企画展で新作を発表した後にここで商談をしたりと、自由に使えるラウンジの一部というイメージだ。そのため、1階の収蔵庫のところは無料で入れる必要があるかと思う。今後の検討になるが、2階だけを有料にし、1階を無料にするという方法もあるかと思う。
- 事務局： 生産者としてどういう場所であることが一番良いのか、皆さんの立場で考えていただきたい。
- 梅 田： メーカーが一般の方に直接販売するという事は少ない。問屋さんに同席してもらおうということになれば話は変わってくるが、単にメーカーがここに来てビジネスを行うのというのは難しい。
- 清 水： パピルス館に商談スペースがあると良いと思う。紙を保管する倉庫のような建物が、別にあっても良いと思う。
- 石 川： 重要文化財を置く収蔵庫がない。展示する場所は2階が良いが、展示品を保管する収蔵庫を作って欲しい。
- 収蔵庫がないと、ビジネスルームで商談を行っている際に紙を見せようとしても、わざわざ離れた場所に紙を取りに行かなくてはいけなくなってしまう。
- 事務局： 収蔵庫への要望は当然お聞きさせていただく。実現できるかどうかは金銭的な話だけではなく、事業全体の中での位置付けを見ながら検討することとなる。
- 五十嵐（岩六）： 1階の展示空間にある、「多機能トイレ」というのは何か。
- 米 田： 障害者用トイレの事だが、小さい子供も入れるような機能を備えているので「多機能トイレ」という呼び名にしている。男女兼用で一つ設置することが多い。
- 五十嵐（岩六）： アプリ開発に力を入れるのであれば、有名日本画家ギャラリーなども、音声で説明が聞けるシステムにすれば良いと思う。
- 柳 瀬： 私の友人が卯立の工芸館で紙漉きをしているが、和紙についてもっと深く知りたいと思う人は、大滝神社に行きたいという話になるそう。しかし、本人は紙漉きをしているので案内できず、誰かに案内を依頼することもできないので、わかりやすい誘導ができると良いということだった。
- 梅 田： 卯立の工芸館は場所も良いが、外観が入りやすい。紙の文化博物館は入りにくい。
- 清 水： 建物の特徴もあるが、卯立の工芸館の職員の山田房枝さんは、訪れた方に積極的に声をかけて呼び込んでいる。

梅田： 一般の人が紙の文化博物館に対して何を求めているのだろうか。ある程度の機能は揃っていると思うが、その他にどういうものが求められるのだろうか。明るい雰囲気が良いのか、子供たちを連れて来られるような施設が良いのか、歴史的な施設が良いのか。それがわからない。求められている機能に応えることができれば、沢山のの人に訪れてもらえる。

石川： 建物の入り口は、開放的なガラス張りにして入りやすくしなくてはいけない。

米田： 入りやすさや建物自身の魅力をどう高めるかという話も、大事だ。

石川： パピルス館も外観を変えただけで、全体の印象が変わった。

事務局： 資金的に余裕があれば、建物の増設も可能となるかと思う。

小畑： 収蔵品展示室は新築すれば良い。

山田： 今の収蔵庫には紙が展示してあり、その紙に触ることができる。やはり皆、紙に触りたいのだと思う。ただ展示物を見ているだけでは、あまりおもしろくない。

石川： 企画展の展示会場で、紙に触れるスペースを設けるなど、工夫すれば良い。

米田： 単に見るだけではなく、いかに五感で感じてもらえるかに重きをおいた展示が増えている。

石川： 2ヶ月に1回程度、展示内容を変えていかないと魅力にならない。

山田： 紙を吊るすバトンなどの設備も必要だ。

事務局： 展示設備については、ある程度資金をかければ対応できる。

米田： 紙の展示方法も、吊るす方法もあれば、引き出しに入れるという方法もある。どういう形が良いか、今後考えていけば良い。

石川： 来月、「和紙文化 in 越前」の中で、工場見学を行う。工場見学は、観光的な観点から考えると、今後取り組んでいかななくてはいけないことかと思う。

米田： 見学時間を決める、当番制にするなど、色々と方法はあると思う。最近では見学者側の質も上がってきている。

石川： 皆、紙がどうやってできるかということを知らない。手漉きの方法はメディアにも出ているが、機械でどうやって紙を抄くのか知らない人が多いので、現場を見ると感動するようだ。

米田： 見学の際の安全管理は必要だ。高岡では、鋳物の流しこみを行う工場の見学を行っている。かつては危ない現場なので見学などもってのほかだと言われていたが、今は見せられるようになった。現場を見ることでファンが増えることは間違いない。

杉原： 年に1回でも良いので、工場がオープンになる時があると、皆それを目指して訪れるかと思う。

石川： 今回の「和紙文化 in 越前」でも、工場見学が一番の目玉だ。今回試してみて検証することが大事だ。

藤下課長： 紙の文化博物館で有名日本画家作品を展示すると書いているが、実現可能か、おうかがいしたい。

石川： 作品を借りて展示するためには、まず、設備を整えないとえないといけない。

小泉： 空調などを整備するという前提で、作品提供のご協力をお願いできるかどうかという話だ。

- 石川： 岩野平三郎さんが横山大観の作品を持っている。それを貸してもらえば良い。
- 清水： 貸してもらうことは可能なのか。
- 石川： 可能だと思う。横山大観の作品でなくても、大観のお弟子さんの作品も多くある。今、卯立の工芸館で展示されている中条氏が持っている美術作品もまだまだたくさんあるということだ。
- 事務局： 1年に何回か企画展示できるものはあるのということか。
- 石川： ある。展示を重ねて、福井県立美術館の持っている美術品を借りられるようにしていかななくてはいけない。
- 米田： 産地のコレクションを活かしながら、連携できる美術館を増やしていけば良い。
- 石川： 福井県立美術館には書簡を貸しているはずだ。福井県立美術館にも収蔵宝があるので、作品を貸し合い、タイアップできると思う。
- 実は今、レンブラントに関して、我々が再現した和紙で原版を刷ってもらうようオファーしてある。明後日オランダに紙を持っていく。レンブラントの原版も当時の印刷機も残っている。うまくいくと複製ではなくオリジナルになる。レンブラントの美術館の学芸員も、現在の和紙での刷り上がりと言昔の刷り上がりとを比較したいと思う。比較することで、紙によって見た目が大きく異なることがわかる。さらに刷ったものをオランダで展示するという話になっているので、展示の中で、楮紙や三桮紙で刷ったものと、昔のレンブラントの作品を比べることができれば、それなりに良い展示になると思う。もし実現できれば、刷ったものを貰うことができると思う。
- 米田： 金沢美大にもレンブラントを研究している方がおられるそうだ。タイアップできるかもしれない。
- 石川： レンブラントだけでも非常におもしろい展開が期待できる。
- 米田： 大きな美術館ではないが、きらりと光るようなことが紙の文化博物館でできれば良い。
- 石川： 横山大観の作品が数点あるだけで十分だと思う。同時に書簡を並べれば、横山大観作品を越前で展示する理由も伝えることができる。
- 東山魁夷さんの作品も、岩野市兵衛さんが持っている。
- 米田： 紙の文化博物館は、産地としての奥の深さをしっかり見せるような機能かと思う。2階部分は文化財指定されたものと産地のコレクションを中心に展示すると良い。
- 事務局： 展示も常に変化させる必要があるのだろう。
- 石川： ある程度入れ替えを行わないと劣化する。
- 梅田： 展示内容が変化していると、何度でも足を運びやすい。
- 石川： やはり、バックヤードが必要だ。
- 藤下課長： 定期的に変化を変えていけば、観光協会のHPにアップしてもらうことができる。見る人もだんだん増えていくと思う。
- 米田： 全国の和紙産地の人も展示を見たいと思う。ロコミから広がるということもあると思う。

石 川： しっかり取り組んでいけば大きい美術館とも提携できるようになると思う。なぜ越前で展示する必要があるのかという理由付けもできる。

米 田： 例えば同じ横山大観の展示だとしても、3年後に内容に変化をつけて再度、横山大観の展示を行うというサイクルで良いと思う。内容が尽きるということはないと思う。

石 川： 川合玉堂の絵もあるそうだ。横山大観のお弟子さんでもそれなりに有名な人の作品がある。

現在、紙の文化博物館の2階に展示してある岩野市兵衛さんの写真や紙は、1階の有名アーティストのスペースに展示しても良いと思う。

米 田： 井上雄彦さんのようなプロジェクトも、これから行われていくと思う。そういうことが行われた際、越前でも展示できれば良いと思う。井上雄彦の場合は、若い人も入りやすい。

石 川： 岡本小学校には富田溪仙さんの絵がある。

藤下課長： 本日は色々なご意見いただきありがとうございます。今後も皆さんのお知恵を拝借することが多々あると思う。その際はよろしく願います。

以上

#### 4. イースト地区推進委員会議事録

日 時：平成 26 年 8 月 19 日（火） 18：30～20：30

会 場：岡本公民館 研修室 2

出席者名簿：

（委 員）

団体名	役 職	氏 名
イースト地区（味真野地区、栗田部地区、岡本地区、南中山地区、服間地区）	市 民	市橋 司
	市 民	石田 真一
	市 民	八木 奈都美
	市 民	瀧本 麻記子
	市 民	内田 俊也
タケフナイフビレッジ協同組合	理事長	加茂 詞朗*
福井県和紙工業協同組合	副理事長	五十嵐 康三*
越前市商工会	副会長	山下 勝弘*
今立商業振興協同組合	ファッションハウス山守	山田 哲男
〃	かせや味噌	鈴木 雅史
味真野自治振興会	副会長	畠山 重左久*
仁愛大学	学 生	小畑 すみれ
学識者	仁愛大学講師	升田 法継

※：別途会議の機会を設定するため、本会には参集の案内をしていない。

（事務局）

越前市企画部政策推進課	課 長	谷口 良二
〃	副課長	小林 勲
越前市産業環境部商業・観光振興課	課 長	田中 康和
越前市産業環境部万葉菊花園	園 長	姉崎 昌剛
越前市今立総合支所地域振興課	課 長	渡辺 圭一郎
越前市教育委員会文化課	課 長	鈴木 昌幸
越前市産業環境部産業政策課	課 長	藤下 利和
〃 伝統産業振興室	室 長	転法輪 信
越前市産業環境部産業政策課	副課長	小泉 陽一

（コンサル事業者）

株式会社 計画情報研究所	米田 亮
株式会社 計画情報研究所	鶴沢 木綿子

#### ■議事録

事 務 局： 工芸の里構想では現在、和紙産業をどのように振興していくかという論点で検討を進めている。その中で、ふるさと創造プロジェクトにおけるソフト事業、地域活性化のための振興策というと、7 ページ以降、工芸の里構想全体で各産地をつ



なく方策や、生産者や住民協働の取組などが当てはまる。イースト地区の地域資源である様々な施設や歴史、文化を活用しながら、若い方を中心にこういった取組を行なうことができれば、地域全体が盛り上がっていくのではないかと考えている。それを目標として議論いただければと思う。よろしく願います。

升田委員： 7ページの振興策1で、旧家を利用したギャラリー、レストランなど生活文化発信拠点が必要だという話があったが、私も現在、駅前に情報発信拠点が必要だと強く感じており、市役所の方にも相談しながら検討を進めている。蔵の辻に向かう商店街に一箇所適した場所があり、そこでプロジェクトを起こせればと考えている。その場所は伝統文化の香りが強く残っている町家だ。そのプロジェクトとこの振興策がオーバーラップする。奈良でも、若い人が町家を活用したショップで成功している。若い人の人口も増えているということで非常に良いと思う。

また、庁舎そのものがショールームという振興策は斬新であり、非常に感銘を受けている。企業では、コクヨが実際に自分たちのオフィスショールーム化し、見学者を招いている。文具だけではなくてオフィス空間ということでソリューションしている。シスコも同様の取組を行なっており、非常にインパクトがある。

和紙の里の活性化やナイフビレッジとの連携には、物語、ストーリー性をもたせることが大事なのだと思う。現在、ナイフビレッジでは「和紙の里もある」というだけの紹介の仕方であり、ナイフビレッジには和紙に関する物語が提供されていない。和紙の側も、和紙に関する物語だけで、ナイフに関する物語がない。そこに行けばある、という情報だけではなく、点と点をつなぎ、いざなうようなしくみがあれば良いと思った。

市橋委員： 庁舎のショールームという話があったが、観光客がそこの市役所に行くことは少ないかと思う。商業施設や駅などシンボリックな建物に越前市の伝統工芸を発信する拠点があるというのであれば納得できるが、庁舎をショールーム化することがイメージできない。例えば町家にショールーム的な施設があり、どんな方が来てもそこに案内すれば展開できるということであれば理解できるが、観光客を市役所に案内するということを聞いたことがない。他の都市の事例があれば聞かせていただきたい。

また、ブランド化する上でロゴやキャッチコピーは欠かせないことと思うが、現在の構想には出てこない。越前和紙も、ロゴがあるのかわからない。タケフナイフビレッジにはロゴがあるが、越前打刃物全体にそのロゴが使われているわけではないと思う。越前和紙だとわかる印があると良いかと思う。越前市の伝統工芸の統一的なロゴでも良い。

私は小さい頃から味真野で育っているが、伝統工芸品に触れる機会がなかった。全く触れていないということではないと思うが、学校で使っているコピーペーパーもわら半紙であり、越前和紙の良さに触れる機会がなかった。この年齢になってやっと、越前和紙の良さを自分で発見していったわかった。教育機関で使うということももちろん重要だが、一般家庭で使ってもらうことも非常に大事かと思

う。

筆筥に関してだが、昔であれば筆筥を嫁入り道具で持ってくるという文化があったが、今は筆筥を入れるスペースが家の中がない。作り付けの家具を越前筆筥にするというの、相当こだわりがある人ではないと、選ばないと思う。もっと身近で手軽に越前和紙や筆筥、刃物に触れられる状況が生活の場にあると良い。

升田委員： 地元の方が和紙や刃物に対して、消費財としての良さをわかっていないということか。受容する側として、良さを理解しているからこそ外に発信したいという展開ではないのか。

市橋委員： 地元の人も良さをしっかりとわかっていないと思う。私と同じ世代の若者に聞いたとしても、越前和紙の何が良いのかを理解していない人が多い。越前打刃物が海外で売れているということも、今、はじめて知った。ドイツの刃物を差し置いて切れ味が良いということも知らなかった。良いということがわかっている、具体的に何が良いということを知らない。

米 田： 伝統工芸を活用した庁舎建設も、まず住民の方にその良さを知っていただくための策かと思う。富山県の氷見市は、高校の体育館であった場所を利用して新庁舎を作ったが、市長の部屋をガラス張りにするなど、もっと市民と会話できるような市役所を目指している。その取り組みが注目されて毎日視察者が訪れている状況だ。そういった意味では、外への発信もできるのかと思う。

鈴木委員： 地元としては、身近すぎる伝統工芸という考え方になっている。高級品であることはよくわかるが、日用品としての選択肢になりにくい。私は商売をしているので、越前筆筥を店舗のディスプレイに使ったり、和紙を包装に使ったりと、自分で発信できる立場にいる。しかし、消費者という立場では、和紙をわざわざ買うという選択はないと思う。

和紙産業では、最終消費者の方の意見が生産者の耳に入ってくず、何がニーズかわからないまま、問屋との話し合いだけで製品を作っていくというしくみが昔からあるのだろうと思う。しかし、中には独自で需要を吸い上げ商品化し、販売している業者もある。そういうふうに柔軟な考え方で商品開発していくところが残っていくのだろうと思う。

米 田： 和紙は他の包装用品よりも値段が高いため、なかなか使ってもらえないという話を聞く。いかがか。

鈴木委員： 産地だから安価にいただけるとい部分もある。越前和紙だという印がないので、どこかに少しでも共通の印があると、浸透していくきっかけにはなるかと思う。普通の包装紙よりも丁寧に扱ってもらえると思う。

内田委員： 私は色々なイベントの開催を通じ、若者が伝統工芸品を知らないということを感じた。以前、和紙の里でイベントを行なったが、私の成人式の仲間は誰も越前和紙を知らなかった。しかしイベント終了後、皆、パピルス館で越前和紙を使った名刺入れや団扇などのグッズをお土産に買って帰った。その時にはじめて越前和紙の伝統や重みを感じたと思う。越前和紙は加工しやすい分、伝統工芸を知ってもらうきっかけとして強いのではないかと思った。

小畑委員： 私は三国出身であり、大学入学と同時に武生に引っ越してきた。同じ福井県でも三国で打刃物を知っている人は2人に1人程度だった。越前和紙についても半分程度だった。皆、名前は知っているがその良さがわからないことが多い。実際に和紙に触る機会もほとんどなく、小さい時に触れて良さがわかってないと、大人になってからも絶対に使わないと思う。筆筥に関してだが、三国でも三国筆筥という伝統的な筆筥が作られており、実家にも置いてある。バイト先の旅館でもフロントに三国筆筥を置いていた。筆筥としては使わなくてもインテリアとして使っていた。現代では、機能性の面で考えると色々と良いものが出てきている。インテリアとしてならば需要も出てくるのではないかな。また、和紙を包装用紙に使うという話があったが、とても良いなと思った。贈り物として自分がもらう側であればすごくうれしいと思う。中に入っている食べ物も、包装紙もということであれば越前市がより良く見えるのではないかなと思う。

米田： 先ほど内田委員も言われたように、和紙はそれほど高価でないので、入り口として活用できる可能性はある。

事務局： 福井県が小学1年生の児童全員に若狭塗りの箸を配布したというニュースを見た。同様に、刃物関係の方が強くおっしゃるのは、子ども一人に包丁を1本渡すほどのことをしないと、なかなかその良さが伝わらないということだ。小さい頃から良さを知ってもらおうとすると、小さい頃から使ってもらおうことが一番大事だということをおっしゃっていた。

市橋委員： 私は現在キャンプ場で働いており、子どもたちに包丁を使わせる機会がある。越前打刃物は切れすぎて危ないという話があるが、切れる方が怪我をしないし、包丁の持ち方も覚えやすいので子どもにとってすごく良い。子どもにプレゼントするというのは大賛成だ。

越前和紙に関しても、メモ用紙などをプレゼントして、越前市の全家庭においても良い。越前和紙はどういう特徴があり、どういったものに強いかがわからないが、例えば絵を描くのに向いているのであれば、保育園や家庭で画用紙として気軽に使ってもらえるようにプレゼントすれば良いと思う。

米田： 地元の方に使ってもらうためにどうするかというのは、皆さんからアイデアをいただいて取り組みたいところだ。和紙の関係者に聞いたところ、版画に使う紙から絵師の方が使う紙、安い紙まで何でも漉けるということだったが、逆に何が特徴なのかかわからないということでもある。

市橋委員： 生産者の人から、庶民に気軽に使える紙の提案があれば良いと思う。

山田委員： 伝統工芸と関係のない仕事をしていると、地元においても和紙産業がどういった活動をしているかわからず、ニュースで知ることがほとんどだ。地元にいるからといって誰かから教えてもらうこともない。外に発信するのも良いが、もう少し地元の人にわかってもらうことが大事かなと思う。和紙や包丁は手土産として持っていきづらい。

和紙を見たいという要望があった際、パピルス館を教えることが良いのか、大滝のように職人さんが漉いているところを伝えたほうがいいのかも悩むところだ。

そばを食べに来たら、その店で和紙が使われており、近くに和紙の里があるというので行き、その後タケフナイフビレッジに寄るといったように、ルートになっているものがあると良い。

米 田： 産地をつなぐストーリーが今のところあまりない。それを提供していかなくてはいけないのかと思う。

八木委員： 地図を見ている、全く知らない施設が多い。タンス通りや越前打ち刃物会館に関しても、聞いたことも行ったこともない。若い世代はほとんど知らないと思う。私も、和紙を触った経験といえば小学校の卒業証書を漉いただけであり、それ以降、触れていない。越前打刃物も名前を聞いた事があるだけで、実際使ったことがない。若い世代にどう伝えていけば良いのか。和紙や刃物はテレビではじめて聞く情報も多く、和紙を使った団扇があることも最近知った。それを売っているところも私の家から近いところだった。知らないこと多いのもうちちょっと知っていききたい。

米 田： 先ほど自己紹介で岡本カフェなどを実験的にやられていたということであったが、若い人たちが集まり、クラフトを展示販売したり、食器として使ったりするという場所があると良いと思う。門司港で手紙カフェという取組が行われている。紙の文化と人をつなげるための取組だ。生活の中で伝統工芸を使える空間を用意してあげるということで、接点を増やすということが大事かと思う。

石田委員： 私不老町に住んでおり、和紙にはじめて触れたのは小学校の卒業証書だった。今は、隣の家も和紙を漉いている事業者だが、何も知らないといった状況だ。和紙組合内で完結してしまっていて、地域住民やそこに住んでいる人に何も伝わっていないと感じる。証券紙の生産が廃れている中で、越前和紙に何ができるのかが疑問だ。ブランド化するのであれば、越前和紙であればこれができるという、売りがあれば良いと思う。

私の親は大工をしており、和紙クロスを薦めている。私の家にも和紙クロスが使われているが、あたたかみがあるなどといった特徴を感じる。そういったものが発信できる場所があると良いなと思う。「越前和紙ではこういうことができるのだ」ということを知りたいし、逆に、「こんなものを作れないですか」といった提案をしたいと思う。産業に関わっている人と、地域の人や若者が意見を言い合える場所があると良いと思う。

伝統工芸ではないが、金津創作の森のように、1ヶ月なり1年なり、若い人が実際に住んで体験や実習、研究できる環境がこの地区にあると良い。そういった中でクラフトショップなどが機能していけば、町全体が活発になっていくかと思う。

内田委員： 私は、人から伝わる情報がすごく大事だと思っている。テレビやニュースなど情報はデジタル化されているが、伝統工芸という部分で見るとデジタルというよりはアナログの、職人さんから一人一人に伝わっていくというような情報が、非常に大事なのではないかと思っている。手で触れてみる、という伝え方をしていくことが重要だと思う。

市橋委員： 越前市の飲食店などで、例えば越前打刃物を料理で使っているというのであれば、お客さんが見えるところに、「この店は越前打刃物の包丁で料理しています」と記し、お店の中やディスプレイで和紙や筆筒を使っているのであれば使っているということを、お客さんが見えるところに記して伝えるようにすれば良いと思う。お客さんとしては別に書いてある必要はないが、伝統工芸品に気づくことになる。文化施設でもどんどん表示してもらえばよいと思う。細かいことだが大事な取り組みかと思う。

また、現在、ネットショップが流行っており、越前市内でもネットで販売をしているところがある。ネットショップで買い物をすると、必ずお店からの礼状がついている。手紙の文化がなくなってきている中で礼状の文化はすごく重要だと思う。越前市内の販売業者に、礼状には必ず越前和紙を使ってもらうようにすれば、PRになると思う。あたたかみもあるしショップのイメージも良くなると思う。

また、生産者としてはあまり気が進まないかもしれないが、消費者とすればアウトレット品のように気軽に買えるものがあるとありがたい。和紙の端材や打刃物のアウトレット品などが身近なショップやイベントで買えると、触れやすい。せっかく産地に住んでいるにもかかわらず、正規品の高いものしか販売されておらず、安いものが手に入らないというジレンマを持っている人もいるのではないか。

また、若手の伝統工芸の職人さんがクラフトをもっと身近に感じられるように、イベントなどで伝統工芸を体験できるブースを作っていきたいと言っていたのを聞いた。イベントを主催している団体が多くいるので、どんどんコラボレーションしてもらい、伝統産業に触れる機会を増やして欲しいと思う。素人である私たちが越前和紙を仕入れて、折り紙体験しようと考えていることもあるが、結局、素人が教えるため、そのものの良さが伝えられない。

米 田： 逆に生産者からすると、どのようにイベントを開催すれば良いかわからないということもあると思う。一緒に取り組んでいくと、さらに良くなると思う。

市橋委員： イベントなどの場所を提供できる人は、越前市に多くいると思う。うまく連携すれば情報発信や情報交換もしやすい。顔見知りが増えると、振興策 9 や 10 ももっとスムーズにできるようになるかと思う。

事務局： 現在、ふるさと創造プロジェクトとしては産地をつなげるということがキーワードになっている。何かアイデアがあるのであれば教えていただきたい。

田中課長： 飲食店で使ってもらうということは良いことだと思う。麺類組合では、そば祭りや越前焼きの器を使っている。また、資料に FAM ツアーについて書いてあったが、以前、焼物組合と丹南広域組合が協力し、越前焼きの良さを知ってもらうために、大阪の飲食店の方を呼んでモニターツアーを開催した。その結果、多く越前焼を使ってもらっている。和紙に関してもハウスメーカーを対象にモニターツアーを開催し、意見を取り入れていくというのも、一つのアイデアかと思う。

また、駅前にある匠の技は、ある意味アンテナショップなのだが機能していない。アンテナショップをもう少しまちなかに作るべきなのかということも、検討していきたい。

姉崎園長： 伝統的工芸品を地元で使ってもらってないということであったが、例えば量販店で越前打刃物を見たことがあるかということ、おそらく、ないという人が多いと思う。駅前の平和堂にも関の打刃物しか置いてない。地元の人が買いやすいところに売っていないのが問題かと思う。

越前和紙が株券で使われた理由は、透かしの技術があったからだが、現在、透かしの技術が衰退している。越前和紙の印を欲しいという話が出ていたが、透かしを和紙の中に入れて印とするのも一つの案かと思う。こういった技術を衰退させないことが大事かと思う。

私は観光にも取り組んでおり、出向宣伝をしたりしているが、都会で出向宣伝していると和紙の名刺入れを若い女性を買っていく。若い人のアイデアを今後もらって取り組んでいかなくてはいけないと思う。何よりも、物が売れないと発展しない。

升田委員： マーケティング的な話だが、地元の方が身近でない、良さがわからないということであれば、マーケットニーズが不明であり、商品開発も困難といえる。そこで、ニッチで専門的な部分としての良さはあるので、ある顧客層には売れるとして、さらにマーケット広げるためには、外部の声に耳傾け商品開発につなげていけば良い。観光で人を呼び込むこととニーズ把握とをセットにしながら、マーケットの声を収集していくのはどうか。

関西の事例だが、外国の観光客の観光地ベスト5に姫路駅が入っている。直線で新幹線が300キロのスピードが出るところは姫路駅のみだからだそう。外国人はホームに立って、エンターテイメントとして体験し、その様子を動画で撮影する。そしてフェイスブックなどにアップする。そうやって口コミで人気が出る。外国人だけとは言わないが、大量消費時代が終焉を迎えた今、産業振興と観光とは両輪で取り組んでいくことが必要なように感じている。

事務局： いわゆる外部の目として若い方の視点も非常に重要だ。

イースト地区の万葉館などと和紙の里は、物語を作ってつなげていくことが重要だと思う。各施設に文化的な共通項があるかと思うので、文化課課長にご説明いただきたい。

鈴木課長： 10ページの地図を見ていただくとわかるが、北陸自動車道があり、その真ん中に武生インターチェンジがある。10年後にはここに南越駅という新幹線の駅ができる。駅を降りてレンタカーを借り、西か東どちらかに行くことになる。たいていの方は越前海岸があるため西に行くが、我々としては東へ来てもらいたい。そのためにはまず、魅力あるものを大きく打ち出し、その周りに付帯していかなくてはいけないと思う。魅力のあるものというのは、味真野、今立をまとめた一つの大きな地域だ。ハード面の方策としては和紙会館を10年後に、外国の方にも来

ていただけるように整備する。ソフト面としては1500年前から継体天皇の伝説もあるので、発掘しながらつなげていく発想が取れないかと思っている。

現在、和紙の里に外国の方が多く訪れている。外国の方であればインターチェンジからタクシーに乗らずに和紙の里まで歩くだろうといわれている。そういう人たちが来るという可能性も念頭においていただけると、作り方が変わっていくと思う。和紙は日本ではだんだん使う人が少なくなってきたが、世界的に使われる潜在的な魅力がある。魅力の発信に関する発想をいただければと思う。

内田委員： 3地区を連携させるという話だが、各地区の職人や、現場で働いている人は、どういう思いをもっているのか。連携したいと思っているのか。もし可能であれば、次回、そういったことがわかる資料があればありがたい。

事務局： 基本的には売れるということを重視しており、連携のことまで考えている職人さんはあまりいない。商談、商品開発に関しても、自分たちで1から10までやってきたという流れがあるので、なかなかうまくいかない。中で苦しんでいるというのが現状だ。

内田委員： 最終的に底力を発揮するのは産地の人たちだと思う。

事務局： 今困っている部分は何かということ具体的に聞き取りしながらソフト面での支援策を考えて取り組んでいるが、なかなか成果が出ないのが現状だ。

田中課長： 職人さんは売り方を知らない。良いものを作っているという自負はあるが、あとは問屋が売ってくれると考えていた。その流れが変わってきたのがわかる例として、タケフナイフビレッジがある。タケフナイフビレッジは生産者自ら売っていかうとした。池ノ上工業団地の刃物職人は今も、昔の職人かたぎで、問屋が売ってくれるという意識をもっているのだろうか。

事務局： 意識は変化している。打刃物は、現在、地元の卸を相手にはしていない。越前市の問屋で外国を相手にしているところはほとんどないが、越前の打刃物が良いから他の産地の業者が買い取りに来て、海外に売っている。まったく事情が変わっており、本当に忙しいという状態がずっと続いている。ただ、いつまで続くかは非常に心配されている。

事務局： 最終的にどこで売られているかとも、職人さんが知らない。つまり気にしていない。そのため、好調な売上げがいつまで続くかわからないという不安がある。それが打刃物の現状だ。

藤下課長： 伝統的工芸品の強みとしては、マスコミの食いつきが良いことがある。何かをすれば、広告費を使わなくてもマスコミが宣伝してくれる。今年、井上雄彦さんが大紙を漉いた際、呼びかけをしなくてもマスコミが本社取材に来た。

升田委員： 過去に、和紙の使い方アイデアコンテストなどを開催したことはあるか。

事務局： 私の記憶ではそういうイベントを開催したことはない。

市橋委員： 越前和紙で人が乗れる車を作ることができれば良い。それくらいのものであれば、全国から取材に来ると思う。また、LEDは発熱が少ないので、街灯のランプシェードに越前和紙を使うといった工夫も可能になるのかもしれない。結ぼうとしている地域の街灯を全て越前和紙にすると面白いし、全国的に注目されると思う。



観光としてつなぐという意味では、現在、味真野と今立の観光の連携が取れていない。それぞれが観光情報を発信しているが、今の状態では、訪れた人もばらばらだとわかってしまう。全体として統一したブランディングが必要だ。味真野、今立をつなぐ統一した色の看板や、同じような案内の仕方があると良い。ばらばらだと訪れた人が迷惑することになる。全体的なマップも、連携したものを作るべきだと思う。

私は味真野で振興会などにも関わっているが、皆、結局素人だ。看板を新しくするなどといったレベルでの取り組みが多く、お客さんをどう味真野にひっぱってくるかというところまで意識がまわらない。今立地区も同じなのかもしれない。そういったしくみについて考えてくれる人が必要だと思う。また、訪れた人が地域にお金を落とす、泊まってもらおうといったしくみが求められる。今立地区では、農家民泊も行なっているのです、それを味真野に展開しても良い。しくみが必要だと思う。

姉崎園長： 私は、現在、今立地区と味真野地区を結ぶという取り組みを行っている。両方をつなぐテーマとしては先ほど鈴木課長がおっしゃったとおり、継体天皇というのが一つ大きい枠なので、まとめながらアイデアを練っている。またご協力いただきたい。

鈴木課長： 大滝の古いまちなみにある家に泊まった外国の方がナイフビレッジまで歩いて往復したそう。その家の人が、英語表記の地図が欲しいと言っていた。看板も英語表記があれば見やすい。

姉崎園長： 国際音楽祭にはフィンランドやドイツなど、色々なヨーロッパの国の演奏家が訪れる。彼らは泊まったときに、市内の色々なところを回って見ている。そして自国に戻った際、越前市はこういうところだということを、ブログなどに掲載する。外国人の方が来てくれれば情報を広げてくれる。

升田委員： 京都の観光客はここ 10 年で急増している。8 年ほど前から海外への情報発信に注力してきたことが実を結んでいると聞く。今では、外国人観光客自身がさまざまな京都情報をフェイスブックや口コミサイトなどを使い発信している。

市橋委員： コーディネーター役のような形で、地域につなげる民間の要となる人も大事だと思う。デジタル化してすごく便利な時代になったので、アプリなどで多言語に対応するなどしても良いと思う。

姉崎園長： 県の観光部局は Wi-Fi の整備をしようとしている。海外の方が訪れたときに日本語だけの案内ではわからないので、タブレットなどで、自国語で検索するためである。

升田委員： 東京では東京オリンピックで訪れる観光客に向けての Wi-Fi の整備が急ピッチで進められている。

市橋委員： 観光施設で、Wi-Fi 機械の貸し出しなどはできないのか。それがあるとすごく便利だ。

升田委員： 無理ではない。地域振興策として要望をあげて NTT に伝えると、需要見込みの側面もあるが、可能性はある。

田中課長： 今、一般ユーザーが求めているのは高級品なのだろうか。安価な簡単に手に入るものなのだろうか。資料に越前の伝統工芸に関する三角形が書いてあるが、ターゲットをどこに置くべきなのか。

升田委員： 具体的には戦略あつてのことだと思うが、これまでの皆さんのご意見を拝聴していると、認知度が低いというのが共通のテーマだと思う。認知度を広げるには、まずは、廉価品から高級品までのフルラインナップでも良いと思う。安い廉価品でとりあえずマーケットを広げ、その後、様子を見ながら利益が取れるところに打ち込んでいくというのもありだと思う。

田中課長： 観光面で言うと、観光客が来るためにはその素材を磨かなくてはいけない。観光素材が悪ければもう二度と来ない。最終的にリピーターになってもらうためには、高級品で売っていくべきなのか、実用品で売っていくべきなのか、よくわからない。ターゲットを絞ったほうがいいのか。

事務局： 工芸の里の会議の中で議論し、ターゲットゾーンを設定しているが、もちろんその部分だけに取り組むということではなく、各部分に対しても振興策を打ち出している。観光に関しては物見有山の観光客なのか、芸術文化のプロなのかによって対応が変わってくる。情報発信方法にも変化をつけて取り組んでいこうとしている。

田中課長： 最初はトータル的に取り組んでいかなくてはいけないと思うが、最終的にどこを狙っていけばよいのだろうか。

升田委員： 最終的なターゲットを絞るのは、今は難しい。

市橋委員： ハンドメイドの高級品、中間層をターゲットにするというのはすごくしっくりきた。私が観光地でどのようなお土産を探すかという、少し高いが買えない金額ではないものを買うと思う。皆さんも同じなのではないか。

升田委員： 最終的には、マーケット情報としてだんだん判断できる素材がそろってくるので、ターゲットを絞っていける。今はまだ情報がなさすぎる。

姉崎園長： どうやって売っていくかという戦略が必要なかもしれない。トヨタのレクサスは最初、高額の車を売り、高級車のイメージをつけてから 200 万台の車を売り出している。レクサスというブランドイメージは高級車として保っておき、普通の値段の車を買ってもらう作戦だったのではないかと思う。

事務局： 非常に良いご意見を多くいただきありがとうございます。今日の会議の内容は事務局で取りまとめ、ご確認のうねメールで送付する。ご意見などがあれば返信いただきたい。

地域の若い方が、伝統工芸や地域の良いものを知らないということを知ったことが、非常に大きい収穫かと思う。いかに地道なことでも住民の方々と協働で伝統工芸品を盛り上げていければと思う。

以上

## 5. 越前市工芸の里構想策定会議（第4回）及び三産地施設整備検討会等合同会議 議事録

日 時：平成26年9月24日（水） 14：00～16：30

会 場：越前市役所別館2階 大会議室

出席者名簿：

（委 員）

	職	氏 名
1	武生商工会議所副会頭 武生特殊鋼材(株) 代表取締役会長	河野 通重
2	福井県産業労働部プロジェクトマネージャー 本田技術研究所(株)元常務取締役	保坂 武文
3	福井県立大学 地域経済研究所 講師	江川 誠一
4	デザイナー (株)プレーン代表取締役 グッドデザイン賞審査委員	渡辺 弘明
5	インテリアコーディネーター ライフコーディネートショップ ゆー・代表 県都デザイン懇話会委員	竹内 幸子
6	(株)JTB 中部国内商品事業部 仕入販売部金沢デスク るるぶトラベルプロデューサー	森 小春
7	工芸品コーディネーター 市新事業チャレンジ支援事業審査員	杉原 敦子（欠席）
8	越前和紙 美術作家	青木 里菜
9	市民公募委員（丹南FMパーソナリティー）	近藤 和佳
10	市民公募委員（自営業）	三崎 俊幸

（イースト地区施設整備検討委員）

1	紙の文化博物館 館長	石川 浩
2	福井県和紙工業協同組合 副理事長	五十嵐 康三

（ウエスト地区施設整備検討委員）

1	越前打刃物産地協同組合連合会 理事長	高村 光一
2	タケフナイフビレッジ 理事長	加茂 詞朗

（セントラル地区越前指物組合）

1	越前指物協同組合 理事	内藤 吉男
---	-------------	-------

（イースト地区推進委員）

1	仁愛大学講師	升田 法継
---	--------	-------

(オブザーバー)

1	福井県総務部市長振興課 課長	(代理) 前田
2	福井県産業労働部地域産業・技術振興課 課長	(代理) 坂本
3	公益社団法人福井県観光連盟 観光プロデューサー	中本 秀史

(事務局)

1	越前市産業環境部 部長	清水 俊行
2	越前市産業環境部産業政策課 課長	藤下 利和
3	越前市産業環境部産業政策課伝統産業振興室 室長	転法輪 信
4	越前市産業環境部産業政策課 副課長	小泉 陽一

政策推進課、産業政策課、商業・観光振興課、文化課、地域振興課、越前市観光協会

(コンサル事業者)

1	株式会社 計画情報研究所	安江 雪菜
2	株式会社 計画情報研究所	米田 亮
3	株式会社 計画情報研究所	鶴沢 木綿子

## ■議事録

### (1) 越前市工芸の里構想 骨子(案)について

事務局 : — 資料1~3について説明 —

河野座長 : 今説明いただいた資料について、質問などがあれば伺いたい。最終的には担い手がどう動くかが重要になってくると思う。

中本委員 : 先日、越前市を含めた5エリアの伝統工芸に関する、ものづくりの里プロジェクトに参加をさせていただいた。そこでは、観光客に対する工房の見える化が話題として挙がっていた。行政がハード整備を行うことは可能だが、最終的に観光客の目線になった場合、どこでどう感動を覚えるかという観点が求められる。そこで、今まで見えなかった職人と接点を持つことが必要になってくる。接客のプロではなくとも、職人の方が観光客など訪れた方と接点を持てるための仕掛けが、このプロジェクトに組み込まれていけば良いと思う。また、武生駅周辺についてはどうするか、個人的に気になっている。

河野座長 : 市としては、武生駅前について、何か施策などを考えているのか。

清水部長 : 中心市街地活性化の取り組みの中で、庁舎を含む全体としての町のありかたを検討している。その中で議論されていくと思う。この会議の中には、武生駅周辺の検討は含めていない。

河野座長 : 新しく建て替える本庁舎で、越前市の観光資源の紹介をするという内容は、検討されているのか。

清水部長 : 本庁舎の整備に関する検討はまだ始まっていないが、観光資源の発信については、当然、議論されていくと思う。

河野座長： 本庁舎は現在の場所のまま、建て替えを進めるということなので、駅前を含めて整備計画を検討いただきたいと思う。ふるさと創造プロジェクトは県のプロジェクトである。今日は県の方にも参加いただいているので、ご意見いただきたい。

前田委員： 今回のふるさと創造プロジェクトにかかわらず、県で支援しているいくつかの施設があるが、最近は観光客の方も本物を求めているということ、よく耳にする。できるだけ本物を見せる、作るということが、一つの主なテーマとしてあると思う。今回の構想でも、例えば、産地の様子をデジタルアーカイブなどで紹介するとともに、実際の生産現場を見たいという人にはガイダンス機能を強化するということは、本物につながるし、越前和紙を愛用したアーティストの企画展というのも本物である。

また、旧家を活用した生活文化発信拠点というのは、とても良いと思う。生活文化空間を作り、観光客などに体感していただく、知っていただくというのはすごく良いと思う。

河野座長： 和紙の産地で取り組んでいるふるさと創造プロジェクトは、イースト地区が対象ということなので、ナイフビレッジと連携することにつながると思うが、いかがか。

前田委員： 県のふるさと創造プロジェクトというのは、補助金上、地域を限定して支援を行っていくことになる。そのため、今回は和紙の産地を支援することになるが、実際はイースト地区での連携を含めて検討いただき、その中に県の補助金が入るという形になると思う。

河野座長： イースト地区として、タケフナイフビレッジから何か要望があれば伝えていただきたい。

加茂委員： 和紙の里とタケフナイフビレッジの連携が取れば良いが、車で移動しても10分ほどかかってしまう。ナイフビレッジに来られた方が和紙の産地を見たいという場合は案内しているが、公共交通機関を使っただけの移動は不便だ。こちらで対応できる時は、和紙の里まで車でお客さんをお連れしている。逆に、和紙の産地からお客さんを連れて来ていただくこともある。以前、自転車での移動が良いのではないかという話もあったが、自転車でも相当の距離がある。移動手段を含めて連携できると非常にありがたいと思う。

河野座長： 最終的には、いかに点を線で結ぶかについて検討することになるのだろう。

石川委員： 連携というよりは、人の流れをどうするかが重要だと思う。産業として和紙と打刃物は違うものなので、それぞれ個別の振興策が必要だと思う。一方、つなぐという意味では、どちらも人の動きをどうするかという観点での考え方になるのだと思う。県が進めている、ものづくりの里プロジェクトでも、全体的にマップを作るなどして産地間を連携させ、人の動かし方を検討している。そういったものを利用していけば、さらに産地間の連携ができていくのかと思う。また、どう案内していくかということも、重要だ。和紙産地の中でも、刃物や箆笥の中を案内できるツールを持つことが必要かと思う。

また、紙の文化博物館の改修については、本物をどう見せるかが重要になる。本物を見せれば人も集まるであろうし、博物館で和紙に興味を持っていただき、各産

地に入っただけで良い。さらに越前市全体のものづくりに興味を持っていただき、打刃物や箆笥の産地へと広がっていくと良い。体験ツアーも開催していきながら1泊2日なり、2泊3日なり宿泊いただくといった形で、次々とステップを踏んで、人を惹き付けるような魅力を見せていくことが大事だと思う。また、ご検討いただきたい。

河野座長： 先ほど、中本委員からご指摘があったが、職人といかに接するかが一つの大きなキーワードになるかと思う。これは各産地に共通して言えることかと思う。

森委員： タンス町に関しては、特に施設などの拠点を持たず、各店舗で観光客の対応をするという話であったが、以前の工芸の里構想策定委員会の中で、観光客の方に店舗に来られては、職人の手が止まってしまうのであまりおもしろくないという率直なご意見をいただいた。その点に関して、現場ヒアリングで挙がったご意見をお聞かせいただきたい。

事務局： 指物組合に関しては、セントラル地区ということで8月と9月の2回、ヒアリングを行った。1回目は指物組合の理事会の席で、理事の方から率直な意見をいただいた。また、9月には、指物組合の理事長と、福井のデザイン文化研究をしている方にアドバイスをいただきながらヒアリングを行った。資料3として、ヒアリング結果を整理したものを添付している。

藤下課長： 資料3の24ページにタンス町に関する記載がある。産地の拠点という項目の中に記してあるが、「会館よりも各工房に来てもらい、そこが一つの展示場みたいな形になると良い」というご意見をいただいた。

三崎委員： 私としてはタンス会館を作り、そこでまず観光客を受け入れ、それから各店舗をまわってもらうほうが良いと思うが、タンス町にもいろいろな考え方がいる。拠点を作ってしまうと、その拠点が売り場にもなってしまうので、逆に各個店の売上が下がるのではないかという意見もあった。どちらが良いのかはわからないが、私は拠点が良かったほうが良いと思う。

内藤委員： 西地区の方が先月と今月、2度に分かれてタンス町の各店舗を見学した。今まで通り過ぎたことはあったが、店の中を見たことはないということだった。その時のアンケートではやはり、実際にものを作っているところを見たいという回答が最も多かった。四町まちづくり協議会でもタンス町の話が出ているが、その中でも、実際のものづくりが見える場所として、タンス町、またはその近くに何か拠点を作ってはどうかという話が出ている。現在タンス町には空き家がないが、今後後継者がいない企業へ市外の若者に入ってもらい、継いでもらうといった取り組みを進めたいと思っている。

以前から武生のまちなかには伝統工芸品を売っている場所がないという指摘を受けていた。タンス町周辺に、伝統工芸品を販売する場所を作りたいという意見も聞いている。タンス町であれば、まちなかであるし、駅から10分から15分の距離だ。

河野座長： タンス町通りそのものが、博物館というイメージか。

内藤委員： 会館を作ってそこで筆笥を並べると、各店舗の商品が売れなくなるのではないかと  
という意見がある。それよりは、タンス町通りの中に、各作業場を見ることができ、  
体験もできる施設があれば良い。

河野座長： 職人と触れ合いたいという要望に対しては、体験工房を作ることで応えるのか。

内藤委員： 以前、単なる1日体験ではなく、一般の方が職人に習いながら無垢のテーブルや  
椅子などの製品を作る体験を行った。制作には1、2年かけた。私も何名かと一緒に  
作らせていただいた。そういった取り組みが日常的に行える施設も、タンス町に作  
りたい。また、3,000円から5,000円程度の費用で、持ち帰るものを作られれば良  
いという意見もあるので、体験プランの検討も産地としての課題の一つだと思う。

河野座長： 職人とのふれあいは、なかなか続かないと思う。

内藤委員： 最近が良いものがほしいという人が多く、職人と一緒に作るプログラムへの参加  
要望も少なくない。特に自分で作ると思い出に残り、一生使いたくなるのだと思う。  
単に良いものばかりではなく、要望に沿って手を貸すという形をとっている。また、  
古い筆笥の再生にも取り組んでおり、技術の伝承にも取り組んでいる。

河野座長： 旧家の活用が構想の中に出ているが、タンス町に空き家などはあるのか。

内藤委員： 今のところ、タンス町には空き家がない。

河野座長： 私は、セントラル地区が人を呼びこむためのキーポイントになると思う。その範  
囲を広げてしまえば、タンス町も薄れてしまう可能性があるのでは、兼ね合いが難  
しい。1、2回体験教室を開いて人が来たというような一過性で終わらせず、随時賑  
わいのある場所となるための取り組みを考えるべきだと思う。

内藤委員： 現在でも、県外や外国の方がいらっしゃっている。商店街を巻き込みながら、活  
性化に取り組んでいきたい。

河野座長： セントラル地区が賑わいをつくると、周りにも影響してくると思う。

内藤委員： 中にいる人にはわからないことも多くあるので、アイデアをいただければありが  
たい。

青木委員： 私はアルバイトで紙漉きを初めて14年になるが、まだ、よそ者という意識がある。  
地元の人が変わる意識がないと、何も変わらないと思う。そのような中で、自分な  
りに越前和紙の産地に対して何かできないかと考え、2010年に英語のホームページ  
を立ち上げた。その結果、現在多くの外国人の方が越前和紙の産地を訪れている。  
明日からは、大英博物館にいたイギリス人の修復家の方に産地を案内する。また、  
翌週には、レンブラント関係でオランダの方が訪れる予定だ。その翌日には、イギ  
リスで活動している日本人の修復家の方が来られる。彼女達の話を知っていると、  
どうやらイギリスでは修復用の和紙の品質に疑問を抱きつつある人が多いようだ。  
さらにその後もオランダの方、アメリカの方、そしてスウェーデンの方といったよ  
うに、多くの方が訪れる予定だ。

以前チリの方が越前市を訪れ、和紙の産地を見学した。ナイフビレッジが近く  
にあることを知ると興味を持たれ、7キロ程度を歩いて移動した。雨が降っていたが  
歩いて行って戻ってきた。私にとっても、田舎の景色がすごくきれいで歩きたくな  
る気持ちはわかる。外国の方は歩いて移動すると思う。そこで私は手書きで英語の



地図を書いているが、なかなか先が繋がらない。武生や味真野地区に興味がある方がいらっしゃるが、私もあまり詳しくないので説明できない。

職人と観光客との接点についてだが、私も、工場を訪れた人に話しかけられると紙の厚さが変わってしまうなど困ることもあるが、職人が作業をしている横で、工場や職人を知っている人が案内して説明するのであれば、職人さんと直接話をしなくても、生の現場を味わってもらえることができるので良いと思う。私は岩野市兵衛さんのところによく伺うのだが、現場に入るだけで歴史や和紙の息吹を感じることができ、海外の方も大満足して帰る。さらに、帰った先でも口コミが広がる。これが売上にどうつながるかという、なかなか難しい話ではあるが、売上から先に話をしてしまうと、何もできない。

個人的には、原料の確保に取り組んでいきたい。例えば楮の畑の担い手を探している話がある一方で、外国の方が楮の体験をしたいという要望がある。ここをなんとか結び付けられないかなと思うが、私はどうしてもよそ者なので、現場に迷惑をかけないように考慮して、展開できない。もどかしいことが多い。現場の人は外からの人を歓迎しているのか疑問だ。本当に必要であれば変わり様があると思う。その点について、ヒアリングされていかがだったのか教えていただきたい。

米田： 和紙、打刃物、箆笥の三産地に対してヒアリングを行ったが、やはり職人としては、制作現場に来られても生産の邪魔になるという意見があった。ものをつくる視点からすると、誰かが来たり見られたりすることに抵抗感があるという意見もある。ただし、産地として、例えば越前和紙をもっと好きになってもらう、打刃物をもっと知ってもらうというためには、やはり人に来て見てほしいという意見がある。お互いにとってプラスになるような仕組みを考えることが非常に大事かと思う。今回はその対応方法として、クラフトツーリズムを提案している。間に入る人や外部の人を増やししながら、実験的に取り組んでいければ良い。最終的には、体系的に事務局がコントロールしていく形にしないと、産地の迷惑になる部分もあるのかと思う。

青木委員： リピーターになるかならないかも、わからない。以前、ヨーロッパに出て行くなれば、1,000人くらいに会う気持ちで向かい、その中から5、6人がリピーターになれば良いという助言をいただいたことがある。どこに転がっているかわからない宝物を拾い上げるために、手当たり次第いろいろなことに取り組むことも大事だと思う。

河野座長： 青木委員はよそ者と思わずに、産地と、訪れた方をつなぐ役割を担えば良い。また、訪れた多くの方に対応できるのは組合しかないと思う。組合全体で当番を設けて体験工房を運営するといった方法をとれば良いと思う。

河野座長： 打刃物の施設は現在の工芸開放試験場の場所に作るという話だ。

高村委員： 現在の池ノ上工業団地が作られた理由は、打刃物の産地がまちなかであってほうるさいため、静かな場所に移す必要があったからだ。それまでは武生の町全体が打刃物の町であった。しかし、打刃物の工場が池ノ上に移ってしまい、まちなかが静かになったという一方、風情がなくなったという声も聞く。人のいない静かなところを探して作ったものに対してまた人を呼びこもうとすることは、余程の魅力を演

出しないと叶わないと思う。池ノ上工業団地は交通の便も悪いので、車がないと来ることができない。バスはもちろんないし、タクシーもお金がかかる。気軽に訪れるような場所ではないので、わざわざ見に来るようなものを用意しないと、来ても来れないと思う。

河野座長：何か施設だけを作ったところで人が来てくれるかどうか問題だ。魅力づけが難しいと思う。

高村委員：現在、刃物の歴史がわかる資料が点在しているので、それらを、順を追って並べて見学できるようにすると、一つの素材になると思う。昔の人が苦勞して各刃物を作った意味、なぜその技法が生まれたのかということに関して深く考えることができれば、新しい刃物の本質を見ていくきっかけになるのかもしれない。また、観光客の人が見たことのない越前特有の道具などもあると思う。そういうものを見せることで、越前の人考え方が伝わると面白いと思う。

河野座長：タケフナイフレッジに独立工房を作る話が出ているが、池ノ上工業団地でも歩いて工房をまわるというような、職人と触れ合える良い方法はないか。

高村委員：諏訪田の工場はガラスで区切っているので危なくないのだが、私達の工房はリアルな工場なので、例えば何かに引っ掛けて服が敗れたり、油が飛んで汚れたりということが起こりえる。怪我の可能性もある。また、見せても良い部分と見せられない部分をそれぞれの企業が持っている。例えば、各会社が部分ごとを見せるというような方法であれば、工房を見学いただけると思う。全体で見るとわかったようになる。実際に私の工房にもいろいろな人が訪れるが、あまり詳しく話しても、聞いている側が飽きてしまう。

河野座長：飛び散った油のクリーニング代を、市が補助するといったことはできないのか。

内藤委員：最初から汚れる可能性を承知で見学してもらおうほうが良いと思う。

渡辺委員：クラフトツーリズムに関していろいろな意見が出ているが、工芸の里構想の本来の目的は、産業全体の振興についてある程度の方向性を示すということであり、ツーリズムはあくまで方法の一つだと思う。方法論はいろいろとあるかと思が、それについては、今議論しなくて良いと思う。コンセプトなどもうちょっと高い位置での議論を進めるべきだと思う。

私もここ1、2年、産地を手伝う機会があった。そこで、それぞれの産地には非常に高いクラフトマンシップがあるということがわかった。世界的にも認められる非常に高いクラフトマンシップだ。まずそこが何よりも重要だと思う。また、それをどういう風に振興していくかという点だが、単なる物見遊山ではなく、もっとプロフェッショナルを見たいという方が、産地の持つ高いクラフトマンシップをリスペクトすることが重要だと思う。しかし、そのクラフトマンシップが、越前の地においてさえもリスペクトされていない。リスペクトされることにつながる政策が必要なのではないかと思う。例えば縦割りではなく、横串でのマイスター制度のような認定制度ができないか。

また、現状では三産地の連携がほとんどなされていない。私は個人的に刃物のデザイン制作に関わっており、最近パッケージを和紙で作るなどしている。また、

筆筒職人の方に和紙を勧めて、照明器具を作ったりしている。そういう新しい取り組みの切り口はあると思う。

何よりも重要なのは、今いる職人さんなのかと思う。いかに、そこがリスペクトされるようなシステムにするかが大事だ。和紙でいうと、レンブラントも、井上雄彦が越前和紙で絵を書いて六本木ヒルズで展示していることも、すごいことだ。しかし、東京で知られていても意外と地元では知られていない。刃物においては世界中の名立たるシェフが武生のナイフを使っている現実がある。そういった、プロフェッショナリズムをアピールしていくような制度があっても良いかと思う。

保坂委員： 工芸の里構想の根本的な目的は、各地区の新しい動きを捉えながら、産業の発展と産業観光を進めていくことだ。10年の計画だが、なんとか5年間で日の目が見えるようにしたいというのが、基本の計画だったと思う。そういう意味ではプロフェッショナルの目を強化するという取り組みには共感する。しかし、産業の発展という目を見た時に、本当に今の構想で良いのか疑問を感じている。既存の商品や製品を前提として施設を作り、美術工芸で人を呼びこむという計画が現段階なのかと思う。本来伝統工芸というのは、時代の流れによって移り変わっていくという宿命を背負っている。その中でハンドメイドの高級品というターゲットゾーンが発展しない限り、産業は大きくならないだろうと思う。このゾーンに関する話が欠落しているように思う。地元の産業構造を大きくしていくための話が今の構想にはない。例えば和紙の場合、今までの主要製品はふすま紙と株券だったが、それらに代わる製品の話が全く出てきていない。ふすま紙や株券に代わるもの据えて振興に取り組むことも必要なだろう。

昨今、京都を含めて外国人を相手にした小さな店の免税店申請が増えている。免税となる購入額が1店につき1万円から5,000円に下がったからだ。そういった時代の流れをとらえた観光戦略を含め、産業の底上げをしていくことが、ハード、ソフト面を含めて必要だと感じた。

もう少し詰めていければ、より、地場の産業が強くなっていくと思う。ふすま紙と株券に代わるものは何かを探るところに、お金をかけていけないといけないと思う。

青木委員： 私個人としては、ふすま紙と株券に代わるものは、版画用紙などの美術用紙だと思う。私もそれらの振興に力を入れており、どうやったら生産を大事にしながら消費者に届けられるかということを考えている。今はまだ、美術用紙に関して、どういう版画をした場合は、どういう効果があるのかといった具体的な説明をできる人がいない。そこで、和紙を使った版画や水彩画、水墨画の制作をはじめた。なぜ和紙が良いかという理由はいろいろあるが、その理由を説明できる人がいない。パピルス館にも紙の販売店があるが、最終製品となったものばかりが目立ち、私が一番力を入れたい紙の棚に目につきにくい。

来年、ロンドンでの水墨画と木版画の講習会の依頼を受けている。修復家向けの学会だ。そこに越前和紙を持って行き、使い方を説明する。

紙で絵を描きたいという人は多くいると思うが、なぜそこがクローズアップされないかという、美術教育が低迷しているからだと思う。福井県は生徒たちに和紙を使わせるようにお金をかけてほしい。私としては、ふすま紙、株券に代わるものは美術用紙だと思う。子供でも大人でも使えて、年齢層を問わない。

江川委員： 最初の委員会から住民参加について発言させていただいている。以前の資料から比べると住民の意識についての観点がいくつか出ていると思うが、さらに、一つ一つの振興策にも住民の視点を入れていけば良いと思う。

教育の面では、伝統工芸を使った日本古来の本物を長くメンテナンスしながら、未永く使うライフスタイルを越前市に根付かせていくための授業が必要だと思う。市民生活への浸透のための振興策5として「越前市に対する誇りを醸成するとともに、伝統工芸を生活の中で使う豊かなライフスタイルの形成を推進する」と書いてあるが、ここをもっと強調したほうが良いかと思う。

また、振興策6についてだが、市民の日常生活で工芸を浸透させれば、市民が3つの伝統的工芸品をつなぐ役割を果たすことにもなると思う。そういう観点から言うと、現在の資料には日常的な事例が少ないと思う。越前市では、伝統的工芸品を丁寧に使うことができる、あるいは観光客や訪れた方に何か聞かれた場合には、ある程度の知識と経験を持っていきいきと自らの土地の伝統工芸を誇ることができる、ということが大事だと思う。青木委員のようにオーダーメイドの形でガイダンスをすることも必要であり、一方、マニュアル的なガイダンスも必要だと思う。さらに、観光ボランティアのように住民レベルで、伝統工芸に関する使い方という視点から、自らの生活や経験を踏まえて話せるような人が多くいる町であると、非常に面白いのかと思う。一方、いわゆる観光客の方で、伝統的工芸品はおしゃれでかわいいなと思っても、高いから買わないというお客さんが必ずいると思う。そういう方には、どうやってまち歩きをしてもらおうかという観点で、対応策を考える必要がある。プレミアム商品券も良いが、これは手法論である。本質的な部分での住民の底上げというのも大事だと思う。

清水部長： 先ほど保坂委員から、株券やふすま紙に代わるものを見だし、産業構造を高めていく必要があるという話があったが、和紙に関する振興策2で「従来の流通から転換し、中ロットのマーケットを開拓する…」と書いている。これは方向性だが、構想としては具体的なものは書けないというか、具体的なものがわからないのが現状だ。具体的なものを見つけるために、こういう方向性で取り組んでいこうとしている。さらに深掘りするべきだとおっしゃるのか、その辺をお伺いしたい。

保坂委員： 振興策2の図で、ふすま紙や株券に代わる新しいものができるかどうかという話だ。行政だけでもできないし、一部の人たちだけでもできない。3地区が深掘りをして次のクリエイションをしていくということが重要だ。創造とはクリエイションだ。ふすま紙と株券を作った方は、のたうちまわって、ふすま紙と株券に到達していったのだと思う。のたうちまわるくらいの取り組みを各3地区が行っていく必要があり、行政は、ともに方向性を見出し、支援していければ良い。考え方としては

正しいと思う。新しい市場を創造した企業が大きくなる。そこに向かう足がかりができないと、以前の売上には戻らないと思う。

## (2) 中間報告取りまとめについて

事務局： — 中間報告についての説明 —

河野委員： 何かご意見はあるか。

五十嵐委員： 先ほどから会議を聞かせていただいていたが、最後にやっと資料に基づいた意見が出てきたかと思う。資料がせつかくあるので、資料に基づいてもう少し方向性を見出していただければと思う。実際は各産地で考えなくてはいけない問題もたくさんあると思うが、我々が考えても答えがわからないことに関して、検討をお願いしている。会議に参加するだけでなく、もう少し真剣に考え、前向きに検討を進めていただきたい。資料に基づいて意見をいただき、それをたたき台として次の会議に向けたステップを踏むという形でないと、話が前に進まないと思う。

河野座長： 我々としても、真剣に考えるつもりで集まっている。各産地で議論していただいた集大成が今日の会議だ。

先ほど事務局から説明があったように、中間報告に際しての修正資料の確認は、正副委員長に一任していただくということで良いか。

一同： — 合 意 —

河野座長： 次回は中間報告の結果を見ていただき、さらにご議論いただきたいと思う。

## (3) その他

事務局： — スケジュールについて説明 —

三崎委員： 人数が増えると、発言する機会がないまま会議が終わってしまう。次回は会議の時間を伸ばすなどしたほうが良いと思う。

(事後、日程調整の結果、11月13日(木)14:00より第5回委員会)

以上

## 6. 越前市工芸の里構想策定会議（第5回）及び三産地施設整備検討会等合同会議 議事録

日 時：平成26年11月13日（木） 14：00～16：30

会 場：越前市役所別館2階 大会議室

出席者名簿：

（委 員）

	職	氏 名
1	武生商工会議所副会頭 武生特殊鋼材(株) 代表取締役会長	河野 通重
2	福井県産業労働部プロジェクトマネージャー 本田技術研究所(株)元常務取締役	保坂 武文
3	福井県立大学 地域経済研究所 講師	江川 誠一
4	デザイナー (株)プレーン代表取締役 グッドデザイン賞審査委員	渡辺 弘明
5	インテリアコーディネーター ライフコーディネートショップ ゆー・代表 県都デザイン懇話会委員	竹内 幸子
6	(株)JTB 中部国内商品事業部 仕入販売部金沢デスク るるぶトラベルプロデューサー	森 小春
7	工芸品コーディネーター 市新事業チャレンジ支援事業審査員	杉原 敦子（欠席）
8	越前和紙 美術作家	青木 里菜
9	市民公募委員（丹南FMパーソナリティー）	近藤 和佳
10	市民公募委員（自営業）	三崎 俊幸

（セントラル地区越前指物組合）

1	越前指物協同組合 理事長	上坂 哲夫
2	越前指物協同組合 理事	内藤 吉男

（イースト地区推進委員）

1	仁愛大学講師	升田 法継
---	--------	-------

（オブザーバー）

1	福井県総務部市長振興課 課長	（代理）前田
2	福井県産業労働部地域産業・技術振興課 課長	（代理）坂本
3	公益社団法人福井県観光連盟 観光プロデューサー	中本 秀史

(事務局)

1	越前市産業環境部 部長	清水 俊行
2	越前市産業環境部産業政策課 課長	藤下 利和
3	越前市産業環境部産業政策課伝統産業振興室 室長	転法輪 信
4	越前市産業環境部産業政策課 副課長	小泉 陽一

産業政策課、商業・観光振興課、文化課、地域振興課、越前市観光協会

(コンサル事業者)

1	株式会社 計画情報研究所	安江 雪菜
2	株式会社 計画情報研究所	米田 亮
3	株式会社 計画情報研究所	鶴沢 木綿子

## ■議事録

### 1 開会挨拶

河野座長： 前回、9月に合同委員会を開催し、10月21日に市長へ中間報告を行った。本日はまず、事務局より中間報告の内容についての説明を受け、それに対する質疑応答を行う。また、新たに他の伝統工芸を織り交ぜた取り組みをどうするかということに関しても協議していきたい。よろしくお願いします。

### 2 協議事項

#### (1) 中間報告及び中間報告後の整理について

##### ①中間報告内容についての意見交換

##### ②新たな項目についての意見交換

事務局： — 資料説明 —

保坂委員： 中間報告をした際に、市長から何かコメントがあったかと思う。教えていただきたい。

清水部長： 三産地の振興策を中心に報告を行った。市長からは「産地振興に関しては、大変わかりやすく整理されている」と評価があった。また、越前の1500年の歴史を活かしてほしいという話があった。観光等については、いかにつないでいくか、交流人口を増やしていくかということに関しても、当策定会議で議論、お知恵をいただきたいという要望があった。

江川委員： 私は市長報告に同席したが、市長から、全体的に中間報告としてよくまとまっているという評価をいただいた。また、レンブラントや打刃物の海外輸出の動きなど、最近の目覚ましいマスコミのネタになるような大きな事柄についても市長はご存知であり、それについてしっかりと報告書の中でも反映してほしいという指摘があった。個別の点では、紙の文化博物館における生活提案の展示については、市長から「良いね」という発言があった。全体的には、現状の方向性をもって具体的な部分まで取り組むようにと、評価を得たと思っている。

事務局： 江川委員より発言いただいた通り、中間報告の方向性については評価をいただいている。その点を踏まえながら、三産地の振興策についてご意見等あればお願いしたい。

渡辺委員： 気になっているのは現在の構想に対する三産地の当事者の方の意見だ。どのような印象をお持ちか、お伺いしたい。

上坂委員： タンス町について具体的にどのようにお思いになっているのか伺いたい。和紙や打刃物は紙の文化博物館や工芸開放試験場の跡地活用等、それぞれの施設を持つ予定だ。ただしタンス町の場合は施設ではなく、住民に関わってくる空間だ。我々単独では、まちづくりをするという構想を持ってない。どのようになるのかお聞きしたい。

清水部長： 箆笥の拠点施設がないので、どうやってつなぐのかというご質問か。

上坂委員： タンス町そのものをどういうふうに思っているのかということだ。

清水部長： タンス町そのものをいわゆる一つのミュージアムというような形として位置づけ、そこから魅力を発信していこうという考え方だ。拠点施設がなくても、エリアそのものがそれに値するということであり、魅力を引き出していこうということだ。タンス町を中心とした周辺エリアを、魅力ある一つの拠点として運営していこうと考えている。

上坂委員： タンス町通りには空いている家がない。場所が空いていない状態でギャラリーやショップを増やすと書いてあっても、実現できると思えない。

清水部長： 現在ある店の魅力アップをするということでも良い。また、タンス町通りから少し離れるかもしれないが、ある程度関連性のある空き空間の活用は十分に考えられると思う。セントラル地区は町家が多いところなので、町家の魅力を活用しながら何らかの情報発信に使うことも可能かと思う。あくまでもタンス町通りだけに限っているというわけではなく、周辺のエリアに関することだと思っている。

内藤委員： タンス町通りには、箆笥に関係のない一般住民のほうが多い。他の商売をしている人も交えてまちづくりに取り組んでいかななくてはいけないと思う。箆笥業界が強くなりすぎると他の人が引いてしまう。通り全体で考えていかななくてはいけないことなので、どのように一体化して振興する計画を立てているのかをお伺いしたかった。工芸の体験教室を開いてくれと言われても、工場自体が小さく、スペースがない。例えば体験希望者が20人程度訪れた場合、教える場所がない。近くに体験で利用できる施設がほしい。良い提案があれば聞かせていただきたい。

三崎委員： 箆笥屋や建具屋だけではなくタンス町のみんなを巻き込むための良い案や策を出してもらえると、住民みんながそれに向かって取り組んでいける。クラフトマーケット等を行うことも面白いと思うが、空いている店舗がない中でどうやって行うのか、疑問しか出てこない。会館を作らずに木工教室を開くとしても、どこで行うのか疑問だ。その疑問を埋めていっていただき、タンス町が10年後にはこうなるといった夢が持てるようになれば、産地としてありがたい。

また、序章の歴史物語についてだが、箆笥に関してももう少し記述していただきたい。このままマスコミ等に公開されてしまうと、箆笥には歴史がないというふう



に思われてしまう。法隆寺の厨子に越前という名前が書いてあるという話がある。それが越前の技術を用いたものであれば、越前指物は1400年くらいの歴史があることになる。そういったことを書いていただければ、もう少し越前の木工はすごいという印象を持っていただけるのではないかと思います。さらに、越前箆笥は、岩谷堂に続く、全国で二つ目の民芸箆笥での伝統的工芸品指定を受けた箆笥だ。そういったことも表現していただければありがたい。同じ伝統工芸品だが、他の地域とは違うということを訴えていただきたい。

また、越前箆笥の工芸の構造を示した三角形の一番上である美術工芸の部分が、空白だ。確かに武生には箆笥の作家がおらず、越前箆笥は作家が作るようなものではないかもしれないが、例えば岡本太郎の作品に越前焼のモニュメントがあるというだけで、越前焼に岡本太郎が関わっているという印象につながるように、外の人にとってのランドマーク的な箆笥を、誰か作家などに作っていただければ面白いのではないかと。箆笥の美術工芸品の部分も構想に入れると良いと思う。

また22ページに箆笥の写真があると思うが、この説明書きに「引手は角手を用い」と書いてあるが、写真は蛭鉋というもので角手ではないので、整合性をとっていただきたい。

先日、私のところに福井県社会科研究協議会に属する学校の先生がお見えになった。社会科の教科書に越前箆笥について載せたいということで写真撮影に訪れた。教育委員会は教育機関として箆笥を取り入れるように動いているという姿勢が見えた。越前市としても職人が出張して行う工芸授業の企画など、子供の頃から産地で作られているものがわかるような施策を入れていただきたい。地元の人でもタンス町がどこにあるか知らないという声をよく聞くので、いかに幼少の頃から認知していただくかが重要だと思う。

時間軸の話だが、私は10年先の夢を見て毎日の仕事に取り組んでいきたいと思う。次の段階かもしれないが、アクションプラン的なものが各産地に対してあると、具体的な夢が持てるのではないかと思います。

清水部長： 歴史的な部分に関しては、越前箆笥が伝統的工芸品に指定された際に発掘をした内容をベースに書いているので厚みが少ないことは間違いない。今ご提案いただいたことも含めて市で検討させていただく。民芸箆笥に関しても確認する必要があると思う。

教育の話だが、56ページで市民生活への浸透を挙げている。学校教育の中に取り入れていきたい。方向性は示しているので具体的な内容は今後詰めていきたい。

事務局： 先日、指物組合の上坂委員、内藤委員に議論に加わっていただき、指物組合として今後、何から取り組んでいけば良いかについて議論した。その際、越前箆笥というものは何かということを再度勉強する必要性が挙がった。法隆寺の厨子を見に行くことなどからはじめ、しっかりした産地の議論を産地内で取り組まなくてはならない。越前箆笥は伝統的工芸品の指定を受けたばかりであり、国の申請書など歴史的なまとめはあるが、職人が共有していない情報が多い。木工技術などの撮影を含めて再度やり直し、技術が越前箆笥の特性なのだというところを見つめ直すための資

料集も必要なのではないかという意見があった。資料集を作ることにより、それが教科書にもフィードバックできると思う。

竹内委員： 私は福井で田原町デザイン会議という住民活動団体に所属しています。取り組み始めた当初は、商店街に人がたくさん訪れさえすれば、町全体がどうなろうと関係ないという店主も多かったが、住民と色々なイベントを行い、話し合いを進めていくうちに、田原町がずっと住み続けられる町、住んで良かったと思える町、子どもたちが帰ってきたいと思える町にすることを考えてメンバーは活動するのだという意識に変わってきた。目先の商売ではないし、住民達のためだけではないということに気がついて、現在、10年続いている。

はじめて工芸の里構想の取り組みについて伺った際、合併後、改めて越前市という一つの町として、誇りや意味を再認識するためのツールとなるので、羨ましいと感じた。しかし実際会議に参加すると、産業をどう発展させるかという話を中心になってしまい、市民がどのように加わっていけるのかという話がなくなってしまった印象を受ける。私は、自分たちの町が住んで良かったなと思える町であれば、産業に携わりたいと思う人も出てくると思うし、外から人を呼ばなくても自分たちでやっていける町になるのではないかという希望的観測を持っている。一部の人達だけで盛り上げて、終わったというような町にはなってほしくないと思う。

内藤委員： タンス町通りでは屋台祭りを行っているが、住民がほぼ全員参加してくれる。一般の人が一緒になってもものづくりをして販売している。先ほども言ったが、箆笥の商売ばかりを先行させると、住民の人は勝手にすれば良いと感じてしまう。住民も一緒に取り組める方法があれば良い。

河野座長： 三つの拠点づくりの中で、越前箆笥に関しては内容が希薄というようなご指摘もあったのかと思う。なんといってもセントラルなので、人を巻き込んだ取り組みを織り込んでいければ良いと思う。

近藤委員： 以前、タンス町の内藤さんのお宅におじゃました。箆笥は産業だが、内藤さんのお宅での経験は私にとっては観光であり、アミューズメントだった。和紙についても同様だ。工場体験でありながら、そこに加わるとその場所の魅力に気づく。

何より、住民が知らないことが多いので、観光や非日常の部分がこの町にはたくさんあるということを知ってもらい、町の人同士でつながりが広がれば良いなと思う。住民も観光させてもらえると喜ぶのではないかと思う。

保坂委員： 視点が違うかもしれないが、今ここで議論しなくてはいけないのは工芸の里構想全体をどうしていくかということだ。三地域の振興策についての議論がスタートかと思う。やはり工芸の構造の三角形について、例えば越前箆笥に関しては一番上の美術工芸品の部分に対する策がなく、打刃物に関してもあやふやだ。和紙に関しては方向性が漠然と見えているが、具体的な話になると何も見えていない。一方、施設の話になるとかなり具体的な話になっており、タンス町についての意見が出たような問題点も多く出ているという印象だ。さらにこれからは三地域だけではなく、織物、漆器、瓦、指物も含めて振興策に取り組んでくれということになる。

越前和紙が世界遺産から外れた。工芸の里構想策定委員の立場として、とてもショックだった。そこでなぜ世界遺産に認定されなかったのかを調べたところ、いわゆる伝統産業としての継承がなされていないということだった。マイスター制度や学校教育など、これから伝統をつないでいく職人の後押しに取り組んでいないからだ。それらに関しては、我々が議論している中にも欠落してしまっていたのかもしれない。どうしても販売が先となり、売りたい、人を呼びたいという話を先に議論してきたと思う。世界遺産に認定された暁には、人の訪れる量が違う。まずは、織物、瓦など三産地以外の産業を含めたすべてにおいて、技術を守り育てていくための仕組みを作る必要があるのだろうと強く思った。

また、ハンドメイドの高級品に関して、和紙の例で話をさせていただく。先だって京都に行く機会があり、堀木アソシエイツのショールームを見る機会があった。2.1m×2.7mの越前和紙を使った壁を展示していたが、素晴らしかった。世界のVIPも使っているそうだ。越前和紙の職人と10人程度のチームを組み、1ヶ月まるまるかけて制作するほか、前段階での設計にも相当の時間をかけるそうだ。そのため高値であることは想像がつくが、そのような高級品を手漉きで大量に作っている。さらに、自分たちで10mの手漉き和紙を開発し、販売している。これは越前和紙を上回る素晴らしさであり、感動した。新しい産業としてこういったものを世に出していくことも、高級品のターゲットゾーンとして取り入れていけば良いと思う。そのまますべてに当てはまるとも思わないが、切り込んだサポートをしていかないと、チャンネルとして大きく伸びることは難しいと思う。同じ話が打刃物にあり、箆筒にあり、織物にもあるのだと思う。具体的な話を詰めていきたいと思う。

世界遺産をとるということをターゲットにすれば、取り組むべきことは明確になると思う。認定されれば、人がどれだけ訪れるかということも想像がつく。タンス町や住民が云々という話があったが、人が大量に訪れるのでどうにかしてほしいという話になるのだと思う。そこで、世界遺産のような明確な目的を打ち出したほうが良いのかと思う。

渡辺委員： 私は、今回越前和紙が世界遺産に認定されなかった理由の一つは、やはり遺産ではないからなのかと感じた。認定された他の地域には保存会があるということだが、保存会があるということはほとんど産地として機能していないということだ。だからこそ保存会が必要だということだ。そういう定義で見えていくと、越前和紙は活発に活動し、保存会を作らなくても機能しているということになる。そういう意味では遺産ではない。富岡製糸場は施設としては残っているが生産は行っておらず、建物や工場の施設、機械などを見に人が訪れている。解釈が非常に難しいところだと思う。世界遺産を目的として、単純に保存会を作れば良いものなのかということだ。

また、工芸の構造の三角形のヒエラルキーについての話も出たが、私の認識ではあくまで三産地すべてが実用品である。和紙に関しては美術工芸品として和紙作家の作品が挙げられているが、和紙そのものが美術工芸品ではなく、あくまで和紙は美術工芸品を乗せるベースであるのだと思う。そのような考え方でいくと、やはり実用品であると思う。三角形の頂点の部分に必ず何かを当てはめなくてはいいけ

ないということではなく、むしろ無くても良いのではないかと考えている。筆筒も和紙も、打刃物もすべて実用品であり、決して美術工芸品を作っている産地ではない。むしろターゲットゾーンに集中し重点を置くということで良いのかと思う。

また、三崎委員よりアクションプランの話が出た。アクションプランに関しては、どの程度のスパンかはわからないが、ある程度明らかにすべきだと思う。

報告書案は非常に盛り沢山なので概要版のようなものを作ってはどうかと思う。これをすべて理解することは難しいと思う。

事務局： 後ほどご説明させていただこうと思っていたが、パブリックコメントを12月15日に市の広報に掲載させていただく。パブリックコメント前の議会説明および、パブリックコメントの際は、ダイジェスト版で要点を抜粋してコンパクトにまとめたものを用いて説明させていただく予定だ。

青木委員： 世界遺産に関してだが、まず遺産ではないという地元の職人の意見が大半であった。私としても、実際に現場で働いているところに観光客がどんどん押し寄せてきては、仕事が大変になるのではないかと考えている。フランスにいる知人から、今年の3月に、「ユネスコに知り合いがいるから、どうやったら世界遺産になれるか聞いておいてあげようか」と言われたことがあった。その方はフランスでガイドをしているのだが、話を伺ったところ、世界遺産めぐりだけが目的の旅行客もいるということだった。つまり、コアなお客さんをつかむには世界遺産は必要でないだろうということだ。私も納得をした。

保坂委員の言われた堀木アソシエイツの件だが、堀木エリ子さんは地元でも知られている方だ。彼女は地元の技術に関して特許をとってしまったことから、地元での評判が落ちてしまった。越前和紙の人に限っては技術を使っても良いということになっているが、なぜこういったことがまかり通ってしまうのかと、憤っている方はいらっしゃる。これは少数派ではない。

私は現在、中学生を対象に、自宅で英語を教えている。確認テストがあり、なぜこの北陸で伝統工芸や家内工業が多いのかという社会科の問題があった。模範解答としては冬の寒さを凌ぐための工業だからということだった。東京などで教科書を作っている人が統一して、そう思ってしまった。1500年の歴史や渡来人のことは全く出てこない。寒い地域だからという理由が常識になってしまっているところを覆さなくてはいけないと思う。

先日、スウェーデンのデザイナーが2週間程度滞在した。長期滞在だったのでお寺に泊まっていた。1泊4,500円で14日間宿泊したため、結局、計15万円程度を越前和紙の里に落としていってくれた。なぜそれほどお金があるのかということ現場にいた人が尋ねた所、スウェーデンには私立財団が多くあり、その財団からの資金を元手にやってきたからだという答えだった。財団から支給される金額は3週間で50万円であり、目的は日本の文化を理解することだ。彼女はストックホルムに住んでおり、H&Mのパッケージデザイン等を行っている人だが、越前を気に入り、現在、彼女の得手とする分野でこの土地のためにできることがないものかと、考えてくれている。

彼女の滞在中、私の英語の生徒でデザイナーになりたいという子と彼女を合わせる機会があった。中学生の子が、デザイナーになるにはどうしたら良いか質問した。スウェーデンの彼女は、「i pad などデジタル機器を持っている世代だが、そういうものは出来るだけ使わないようにした方が良い。大人になったらパソコンだけの人生になるので、子供のうちに、手でする仕事を大事にしてください」と言ってくださった。そして、「あなたたちの住んでいる地域、越前和紙にはとても良いところがある。その身近にある産業を大事にしていきなさい」と言ってくれた。中学2年生の子は目を輝かせていた。

その後北欧の方が多く訪れるのも、スウェーデンの彼女が帰国後に宣伝して下さっているからだ。小さい話だが何かにつながるのではないかと感じている。

先ほど三産地と他の産業をどうつなげるのかという話が出たのだが、私は個人的に、紙漉きと織物はつながりがあるのではないかと考えている。中国の紙漉きを見学に行った際、和紙の産地である安徽省にはクワ科の植物である楮が植えてあった。紙の原料なのかと尋ねた所、葉を蚕に食べさせるのだと教えてもらった。似たような話はよく耳にする。織物の産地と一緒に紙の産地がある。どちらもクワ科の植物を利用しており、このつながりには理由があるのではないかと思う。個人的には渡来人と結びつけながら、そういう話をしている。

また、35 ページに「レンブランド」と記載があるが、「レンブラント」だと思う。

升田委員： 短期間でしっかりまとめていただいております、感謝申し上げます。追加された点について、意見を申し上げたい。

まず、序章の伝統工芸の歴史物語についてだ。連携を考える際にどうしても物理的、かつ機能的な連携を考えがちだったところ、前回、座長より点と点を線でつなぐという表現があり、まさにそうだと思った。三つのエリアをつなぐストーリー、物語が大事だ。それぞれのエリアの物語はすでにあるが、その物語の基板となるような、プラットフォームとなるような物語が必要だった。それがここの序章に書かれていることだと思うので、更に練っていただきたい。決して筆筈の物語、和紙は物語、打刃物の物語といったような単発をまとめた文章ではなく、共通のプラットフォームになるような、越前の風土、自然、人とそれらの魅力が伝わるような物語になれば良いのかと思う。それができれば、市民の共通認識としてしっかりと根付き、情報発信にも使えるのだと思う。

2 点目は 35 ページのレンブラントの取り組みだ。この取り組みを見て、逆に伝説を作ってもいいのだと気づかされた。例えばエリザベス女王に使ってもらおうとか、ローマ法王に使ってもらってコメントをもらおうとか、首長のトップアプローチをどんどん行い、伝説を作ってもいいのではないかと思った。

3 点目は 54 ページの振興策 5 だ。京都ではここ数年、外国人の観光客が激増している。10 年前からの取り組みだが、体験型が増えているということだった。体験というのは非常に大事である。体験というのは作業をするだけではなく、回遊することも体験であり、あるいはその場において肌で感じることも体験である。実際京都で一番人気があるのは伏見稲荷神社の鳥居のところに身を置くということだ。何が良

いかというと、気持ちが良い。くらま温泉も人気があり、その理由は、そこに行く  
と気持ちが良いからということだ。

私はナイフビレッジに行った際、見学場所としてももう少しやりようがあるのでは  
ないかと思った。見学した後は必ずファンになっているということが、見学の目的  
だと思う。その点、サントリーのビール工場やウイスキー工場は、訪れた後ファン  
になって帰るとい人が多い。ビールと打刃物は違うものだが、もう少し手の加え  
様があるのではないかと思う。ナイフビレッジで一番驚いたのは、その迫力だ。迫  
力はビール工場にはないものなので、良いところは活かし、守るべきものは守り、  
変えるべきところは変えていけば良いと思う。

河野座長： 特許の問題もそうだが、やはり「背景は産地にありて」ということだと思う。そ  
の辺の提案があれば聞かせていただきたい。産地振興のためにどう思うか。

保坂委員： 堀木さんに関して、なぜ彼女が特許をとって独立していったかわからないが、越  
前は2.1m×2.7m以上の要求に対して答えられなかったということが課題だと思う。  
その要求に対して、越前のやり方では限界があるので、堀木さんが自分で考えた。  
世のニーズを一早く取り込んでそれを商品化する技術、新しい伝統を作っていくこ  
とが重要だ。大きさだけではなく、要求は多くあると思う。それを何とか見つけて  
対応できる体制、サポートが必要なのだろうと思う。

青木委員： すべてはお金かと思う。

保坂委員： お金ではない。知恵がすべてだ。思いがある人がいるはずだ。

青木委員： 21世紀美術館に展示された有名な漫画家の使用していた和紙も、越前和紙の大紙  
だった。やはり宣伝力が足りないのかと思う。

保坂委員： 何が欲しがられているか、世界でどんなものが好まれるか、それを取り込む目利  
きの人が必要なのは事実であり、その人を中心に展開していく必要があるのだと思  
う。必要があれば、目利きの人を見つけてでも取り組んでいくというのが、アプロ  
ーチの一つかと思う。

青木委員： 目利きは問屋がすべてやってきたというのが、現場の言い分だ。そこを差し置い  
ては勝手なことをできない。また、発想や時間のロスなどの手間を考えると、自分  
たちのすることではないと考えてらっしゃる職人の方が多い。その代わり、きちん  
と対価を払って依頼されれば協力的な方が多いと思う。逆に、今までは、デザイナ  
ーの方にサンプル依頼を受けてサンプルを出した後、代金をもらえなかった例が少  
なくなかった。現場としても、提案に飽いてしまったというか、提案よりも原料の  
お金をきちんと出して欲しいという声をよく耳にする。

事務局： 保坂先生をはじめ、改めて難題をいただいたという印象だ。

保坂委員： 世界遺産の話などで驚かされているかもしれないが、私が言いたいのは、7地区に  
共通のマイスター制度や教育など、今まで議論してきた内容をまとめて、串刺しに  
して、サポートしていくような体制でまとめていけるのではないかということだ。  
伝統を継続していくということはそういう意味だ。世界遺産を取る為に今までやっ  
て来たことを全部ゼロにするという話をしているのではない。

事務局： 理解している。七産地にかかわる共通項として、継承、守っていくというヒントをいただいた。まとめられると思う。

森委員： 私は観光業に就いている者なので、まず人をどうやって呼んでこようかということを考える。非常に良いコンテンツがあり、漠然とではあるが見せ方としても方向性が決まってきた。さらにまちおこしが成功するとなれば、個人のお客様も団体のお客様も誘客することは難しくないのではないかと思う。ただし人を呼んでくるというのは検討の第3ステップだ。保坂委員のおっしゃったように、第1ステップのところの、産業や、職人の多くをより元気にする話を盛り込んでいくための議論が、最優先かと思っている。

河野座長： 人が住んでいて、かつ訪れているというまちづくりが、まず大事なのかと思う。

青木委員： 以前、渡辺光一先生が「海拔 30m 構想」という構想を立ちあげていらっしゃった。1500 年前に渡来人が訪れた際、高台を目指したというところから、海拔 30m 以上のところに伝統工芸が発展したのだとおっしゃっていた。そういったことも、七産地のつながりになると思う。打刃物の起源時期が違うのも、たたら製鉄が由来だからという理由があるので、1500 年前の伝説なり、渡来人が訪れた時期のことで、つなげることもできるのではないか。

前田委員： 今後事業を実施していくにあたり、ご検討いただきたいこととして、事業主体、つまり、誰が担っていくかという点がある。各産地をつなぐ魅力的な拠点づくりというのは民間事業主または越前市が担うと書いてあるが、竹内委員やタンス町通りの話を聞いていると、まちづくり団体や住民が、中心的な伝統工芸の良さを発信する担い手になっていただくと、より良い工芸の里になるのかと感じた。クラフトショップに関しても、おそらく住民の方で運営に興味のある方もいると思うので、担い手として巻き込んで実施していただければ良いと思う。

渡辺委員： 三産地以外についてだが、例えば朽飯八幡神社というのははじめて聞いたが、似たようなものがあるのであれば、55 ページのようなマップに落としこんではいかがかと思った。三産地以外の伝統産業を、今後どのように工芸の里構想に組み込んでいくかお伺いしたい。

また、三産地を連携していく方法として、教育というのも一つの方法かと思った。市内の小学校では卒業証書用の和紙を自分たちで漉いており、材料となる木から育てるといった取り組みも行われている。箆笥であれば、木で額縁を作ったり、打刃物であれば校章を金属で作ったりと、越前市の生徒として巣立っていくうえで思い出づくりになるような取り組みができれば良い。

事務局： 三産地以外の伝統産業の取り入れ方であるが、主に観光をメインに考えているところである。キーワードとしては歴史文化、それと伝統工芸を結びつけて、組み合わせるうえで 54 ページの振興策 5 を加えている。また、地図に関してだが、基本的に三産地以外に関連した場所としては朽飯八幡神社しか入れていない。その他瓦、指物、漆器、織物については、共通の歴史や文化的背景を用いて観光に取り入れるというような政策は考えていない。

江川委員： 保坂委員の意見とも関連するが、これは工芸の里構想であって、三つの伝統産業ビジョンではない。三つの産業ビジョンはある程度完成されており、個別具体的な振興策に関しては皆様方のご意見を聞きながら充実させていければ良いと思う。工芸の里構想としてのビジョンをもう少し明確にすれば、今まで出てきたいくつかの意見を受け入れられるのではないかと思っている。

49 ページのところでは三産地の連携の話が出てくるが、これはあくまで三産地を連携するための振興策である。越前工芸の里が目指すべき姿が描ききれていない。単に連携するために目指すべき姿が書いてあるだけで、産地としてこんな産地にしたいということが今ひとつ描ききれていないと思う。その部分に関して項目立てをし、ビジョンを大きく構えることが必要かと思う。最後にまとめて、三産地の共通項や連携すべきことなどを項目立てて示せば良い。項目立てする際、これまでの議論に出ているような、クラフトマンであるとかクラフトマンシップが大前提であり、そこが非常に重要な点だと思う。そこで、市民という目線で造語が作れないか考えた。クラフトマンに対応してクラフトシチズンといったように、工芸を愛する市民、工芸を使う市民という概念があっても良い。升田委員がおっしゃっていたように、物語、ストーリー、歴史が必要であり、また、三崎委員がおっしゃっていたように、箆笥に関しては歴史が足りないという話もあった。もちろん個別の産地で書けることは個別で書いていけば良いと思うが、三つの産地の共通項としてストーリーを出していく。言葉遊びだが、「クラフト〇〇」という言葉をどんどんつないでいき、こんな産地にするのだという共通項のビジョンを作っていく。クラフトマンシップを中心に、工芸のことをよく知り、伝えることができ、しかも扱っているクラフトシチズンがいる。そのまわりには体験するというツーリズムが絡んできて、さらにそこにはそれぞれの伝統工芸のストーリーがある。冬、仕事がないから生まれたというだけではない三産地をつなぐ共通したストーリーがここにはある、というところを強くアピールすることも大事かと思っている。クラフトスタイルという言葉があっても面白いと思う。

要するに工芸の里が目指すべき姿、将来像というものを改めて描き直すことで、全体像がはっきりするし、それを書くことによって個別具体的に漏れている部分が浮かび上がってくるかもしれない。そういう部分も足していったら良いかと思う。

また、四つの伝統産業について、まだ振興策やその他、内容が薄い。一つずつ独立して考えていくと難しいと思うので、産地全体として考えた時の、指物、織物、瓦や漆器、それぞれの位置づけが明確化すれば、動き出すのかと思っている。

また青木委員がおっしゃっていたが、四つの伝統産業については、三産地との結びつきが非常に良い。打刃物と箆笥と和紙の結びつきを考えていてもなかなか思いつかないが、四つの伝統産業とであれば食と生活という面で結びつけやすい。二つ以上の伝統産業がクロスオーバーし、何か新しいものを生み出せる、そういったことが一つあるのかと思っている。

また、ユネスコの話だが、2009年、石州半紙が世界無形文化遺産に認定され、その後、和紙の世界無形文化遺産の認定は団体でないと認められなくなった。越前と



しては、PR手段として、したたかに、取っていくべきものは取っていけば良いと思う。ただし、世界遺産認定を大上段の目標に構えるというのは、難しいのかと思う。

## (2) パブリックコメントについて

事務局： パブリックコメントについて、先ほど簡単にお伝えしたが、12月15日に市の広報やホームページあるいは公民館などに資料配布し、市民からの意見を募集する。その際はダイジェスト版にまとめたものをお示しする。当然、本日いただいたご意見をできるだけ反映した修正形でダイジェスト版を作っていくのでよろしく願いする。約1ヶ月間、1月15日頃までパブリックコメントを募集する。意見についてどのような対応をするかということはホームページ上、あるいは個別に回答させていただく仕組みだ。パブリックコメントや12月議会でいただいたご意見、さらに本日のご意見、それらを総合的に踏まえ、年明けに第6回策定会議を開催させていただきたいと思っている。

## (3) その他

事務局： — 日程調整 —

日程調整の結果1月28日（水）14：00より第6回委員会

以上

## 7. 越前市工芸の里構想策定会議（第6回）及び三産地施設整備検討会等合同会議 議事録

日 時：平成26年11月13日（木） 14：00～16：30

会 場：越前市役所別館2階 大会議室

出席者名簿：

（委 員）

	職	氏 名
1	武生商工会議所副会頭 武生特殊鋼材(株) 代表取締役会長	河野 通重
2	福井県産業労働部プロジェクトマネージャー 本田技術研究所(株)元常務取締役	保坂 武文
3	福井県立大学 地域経済研究所 講師	江川 誠一
4	デザイナー (株)プレーン代表取締役 グッドデザイン賞審査委員	渡辺 弘明
5	インテリアコーディネーター ライフコーディネートショップ ゆー・代表 県都デザイン懇話会委員	竹内 幸子
6	(株)JTB 中部国内商品事業部 仕入販売部金沢デスク るるぶトラベルプロデューサー	森 小春
7	工芸品コーディネーター 市新事業チャレンジ支援事業審査員	杉原 敦子（欠席）
8	越前和紙 美術作家	青木 里菜
9	市民公募委員（丹南FMパーソナリティー）	近藤 和佳
10	市民公募委員（自営業）	三崎 俊幸

（セントラル地区越前指物組合）

1	越前指物協同組合 理事長	上坂 哲夫
---	--------------	-------

（イースト地区推進委員）

1	仁愛大学講師	升田 法継
---	--------	-------

（ウエスト地区施設整備検討委員）

1	越前打刃物産地協同組合連合会 理事長	高村 光一
2	タケフナイフビレッジ 理事長	加茂 詞朗

（オブザーバー）

1	福井県総務部市長振興課 課長	（代理）前田
2	福井県産業労働部地域産業・技術振興課 課長	（代理）坂本
3	公益社団法人福井県観光連盟 観光プロデューサー	中本 秀史（欠席）

(事務局)

1	越前市産業環境部 部長	清水 俊行
2	越前市産業環境部産業政策課 課長	藤下 利和
3	越前市産業環境部産業政策課伝統産業振興室 室長	転法輪 信
4	越前市産業環境部産業政策課 副課長	小泉 陽一

産業政策課、商業・観光振興課、文化課、地域振興課、越前市観光協会

(コンサル事業者)

1	株式会社 計画情報研究所	米田 亮
2	株式会社 計画情報研究所	鶴沢 木綿子

### 3 開会挨拶

河野座長： 本日は最後の合同会議となる。2月20日に、市長へ最終報告を行う予定だ。皆さんのご意見をいただきたい。よろしく願います。

### 4 協議事項

#### (1) 工芸の里構想報告書（案）について

事務局： — 資料説明 —

#### (2) 議会、パブリックコメントの意見等について

事務局： — 資料説明 —

#### (3) 意見交換

江川委員： 私から、4点お話をさせていただきます。

まず全体としては、これまでの会議での検討が踏まえられており、内容も深まってきたという印象だ。三産地のビジョンについても、なるほどと思う部分が多い。三つの伝統産業のビジョンではなく、工芸の里のビジョンとしての取りまとめを行うべきだという私からの意見も、取り入れていただき、恐縮している。

まず、25ページから27ページについて感想を述べたいと思う。25ページは、各委員の意見が集約されている箇所だ。体系的な整理がなされており、工芸の産地としての位置づけが、ある程度明確になったと思う。26ページ以降では、全体を通す串として、工芸の里のビジョンが明確になったと思う。27ページでは、各振興策を、クラフトマン、クラフトシチズン、クラフトツーリズムそれぞれに当てはめて再整理していただいている。どこに当てはまるか悩ましい部分もあるが、全体として非常にバランス良くなっている。前回までの資料は、市民生活から離れた内容だという印象だったが、こういう整理がなされれば、市民の目線で見ることができる。ただし、あくまで観念的な整理であり、ここで整理されたことを、具体的にどのよう

に事業として落とし込んでいくかが重要だ。ここで出た魂を、他の事業にも再度展開していくことができれば良いと思う。

2点目だが、前回の委員会から本日の委員会の間、年末年始にかけて、越前市あるいは福井県を左右するような大きな動きがあった。北陸新幹線延伸時期の前倒しがほぼ決定したことだ。確定ではないが、平成35年春開業を目指すということなので、工芸の里構想の計画期間中である。これは明らかに気をつけなくてはいけない視点だと思う。これまでは、工芸の里構想の計画期間中に北陸新幹線の福井県開業はしないという前提で、あまり議論せずにいたが、もう一步議論を進める必要があるのではないか。工芸の里構想において、南越駅をどう位置づけるかといった程度のことは、書くべきだと思う。具体的に、南越駅に工芸のショールームを設ける、案内ができるガイド機能をおく、工芸の集客施設をおくなど、色々と案はあると思う。しかし、当策定委員会では議論がなされていないので、そこまでは踏み込んだ内容を示すことはできない。そこで、頭出しでも良いので、今後の計画見直しの際に踏まえらるよう、受け皿的に内容を加える必要があるのではないか。北陸新幹線が開業すると、今までとは違う方向から、違うボリュームの観光客が訪れることになる。

3点目だが、福井県には六つの伝統的工芸品があり、そのうち四つが越前市に係っている。それら四つの工芸に関しては、広い観点で見ると、鯖江市や越前町にまたがっていると認識できる。残りの二つの伝統的工芸品に関しても、産地間の距離は離れているが、福井県という括りで見えた場合、連携していくべきものだと思う。また、福井県内には、工芸品と結びつきやすい永平寺などの精神的施設や、継体天皇など歴史上の人物に関連した観光施設が多くある。さらに、観光客のことを考えた場合、越前市内には十分な宿泊施設がないため、あわら温泉などとの連携も視野に入れる必要があると思う。今後は、クラフトツーリズムを中心に、市外との連携にも取り組んでいければ良いと思う。

最後になるが、パブリックコメントや、これまでの議論でも、「市民全体で工芸の里を盛り上げていくべきだ」、「市民が工芸についてもっと知るべきだ」、「市民を巻き込むべきだ」というご意見があったと思う。その点については、工芸の里構想にも多く取り入れていただいた。ただし、本当に市民に浸透しなくては、絵に書いた餅になってしまう。根気強く、市民に訴えていくことが必要なのではないかと思う。実際に推進していくにあたっての十分な周知が必要であり、市としてパンフレット等を作る予定であれば、それらの広報活動にも気を遣ってほしい。また、工芸の里推進協議会を設けるのであれば、なるべく多くの市民に参加いただき、クラフトシチズンの部分をきちんと形にしていくことが必要だと思う。今後の、構想の推進、具体化、実施に向けて、幅広い方が参加すべきだということを、今一度ご指摘させていただいた。

上坂委員： 工芸の里構想では、「越前箆笥」という表記になっているが、「越前箆笥（指物）」とし、指物も構想の対象に取り入れていただきたい。

河野座長： 事務局と検討し、対応する。

高村委員： 越前打刃物拠点施設の整備が構想の中に組み込まれているが、拠点施設は52ページにある「瓦が印象的な富山水墨画美術館」のような建物が良いなと感じた。打刃

物だと火が関係してくるので、漠然と鉄筋のシンプルな建物を想定していたが、毎年毎年少しずつ手直しができるような建物が、非常に良いと思った。

また、武生駅にある刃物でできた龍のオブジェについてだが、武生駅に置いていても目立ちようがないと思う。市外との連携という話があったので、例えば南越駅など、もっと人目につくところに置くなどして、それを呼び水に産地に訪れてもらえるような打ち出し方をしていければ良い。

海外展開のための支援というのは、ありがたい。一方、国内に関してだが、今まで長く販売していても、越前打刃物という名前が浸透しない。問屋側から「越前打刃物を取り扱いたい」と言われるような仕掛けが必要になってきていると思う。

加茂委員： クラフトツーリストが滞在する町を目指すということだが、タケフナイフビレッジにも、海外の方が、ガイドを連れて少人数で訪れ、包丁を作ることが増えている。他の工芸の産地も巡りながら体験できるような仕組みがあれば、2、3日滞在できるのではないかと。そうすれば、越前市の美しい風景なども見てもらうことができる。

クラフトシチズンについてだが、岐阜県の関市は同じく刃物の町だが、小学生は必ず刃物の工場を見学するそうだ。市長は、子供の頃から刃物の町だということを伝えることが重要だと思っておられる。越前市の場合、池ノ上工業団地にしてもタケフナイフビレッジにしても、見学に来る子どもたちが非常に減っている。小学生は必ず各産地に見学に行くような形を作っていただきたい。

また、タケフナイフビレッジには若手が多く、独立したいと言っている。現状の場所が手一杯になってきている。我々からも色々提案をさせていただくので、引き続きよろしく願います。

藤下課長： 今までのご意見に対し、返答させていただく。北陸新幹線開業前倒しに関しては、事務局で検討し、内容を書き足すなどして、対応させていただく。また、県内での連携についても、工芸の里構想をもとに連携をはかっていきたい。市民への周知という点については、来年以降積極的に広報を行っていく。また、上坂委員のご意見についても事務局で検討させていただく。打刃物の拠点施設整備については、平成27年度中に組合と具体的な検討を進めたい。また、武生駅の龍のオブジェが目立ちにくいという点については、武生駅と相談し、ライトアップをするなど工夫をしていきたい。未定だが、南越駅に移転するということも考えていきたい。小学生の産地見学についても、教育委員会に伝えさせていただく。

事務局： 59ページの図には南越駅を組み込んでいる。南越駅にはそれぞれの産地をつないでいく役割が必要だと思う。交通面での連携も必要だ。工芸の里構想に、新しい庁舎建設に伝統工芸を取り入れることを示しているが、南越駅の駅舎も、工芸の産地が集積しているということが象徴されるような建物にする必要があるのだと思う。今の段階で具体的な内容について精査できるとは思わないが、議論しながら、南越駅と、各地域の新たな拠点との連携についても、示していく必要があるのかと思う。

清水部長： 現在、越前市として、南越駅周辺整備計画を策定中だ。計画に入ったばかりの段階だが、南越駅とその周辺を含めてどう活用するかなどについて検討している。工芸の里構想を、その計画にも反映していくことになると思う。

河野委員： 中心市街地についてだが、今後新庁舎ができ、中央公園も再整備される。それらと各産地との連携についての検討は、なされているのか。

清水部長： 中心市街地活性化計画も、現在2期目の改正に入っている。新庁舎の建設や中央公園の整備が決まったので、それらとタンス町や市内中心部とをいかにつないでいくか検討している。中心市街地活性化計画にも工芸の里構想を活かしながら、検討と整備を進めていきたいと考えている。

三崎委員： 中央公園についてだが、ただの芝生の公園になるということで、中心市街地に住んでいる者としてはがっかりした。

先日、石川県小松市からお客さんがいらっしゃる機会があった。ご高齢でカーナビの使い方がわからないということで、タンス町までの行き方について問合せがあった。しかし、高速道路を降りてから説明がしづらかった。例えば、武生インターチェンジからまっすぐ万代橋までをトンネル等をつなぐことができれば、イースト地区とも密な連絡が取れる。工芸の里構想とは違う話かもしれないが、ぜひ検討、実現化していただきたい。

中心市街地が空洞化しており、後継者がいないためアーケードも壊すなど、後ろ向きの話が多くなっている。残念だ。中心市街地にパワーがないので、なんとかしていただきたい。

現在、越前市にある木工に係る施設は、工芸解放試験場のみだ。木工に関してわからないことがあった場合、工芸解放試験場の森川さんに聞くという形をとっている。しかし、工芸解放試験場は2年後に取り壊され、その後釜になる施設を作る予定がない。先日もイタリアから、一竿80万円程度の越前箆箆を月に2,000竿ほど作ってほしいという依頼があったが、越前の職人全員を集めてもこなせない仕事だったので回答を保留にしている。その依頼があったので乾燥技術を学びたいと考えたが、1年間ほど休業して遠方の学校に入る方法しか見つからなかった。技術継承に関しても、現在使っている技術だけではなく、新たな技術を学びたいと思った時、勉強できる場所があれば良い。新しい技術が学べ、かつお互いに研究もできるような拠点がほしい。せっかく越前箆箆が伝統的工芸品に認定され、大きな仕事の話が舞い込んでいる時に、発展できる要素を潰してしまっては面白くない。若い人たちにも越前箆箆、木工産業が面白いなと思ってもらえるような、両方を満たす方法があれば良い。今回の構想に反映するというよりも、今後の検討内容として考慮していただきたいと思う。

清水部長： 越前箆箆の振興としては、タンス町を中心とした取り組みを行っていく予定だ。後継者育成に関しても、産地全体で取り組むべきことと、個人単位で取り組むことがあると思う。木工業界では親方、子方という形での技術継承を行っているということだが、今後どういう形で技術を継承していくか、産地の方とやりとりし検討していく必要があると思う。最終的にどういう人を育てたいかということを明確にしてから方法を考えていかななくては、例え建物を作っても役に立たなかったということになってしまう。今後しっかりと、産地の方と話をしていく必要があると思う。

青木委員： 30ページの紙の文化博物館改修についてだが、場所がしっかりしていないと、良い作品も良く見えないと思う。前回の工芸の里構想策定委員会の後、いまだて芸術館で展示会があった。私を含め10名程度の方が作品を飾った。しかし、展示を見た友人から「学園祭の延長のようだ」と言われた。友人は文句をつけるのではなく、残念だったということで意見してくださった。私は2メートル×8メートルの作品を二

つ吊り下げたが、作品の間を関係者が平気で通り抜けるということもあった。便器ですらアートになる理由は、見せる空間があるからだ。紙の文化博物館に関しても、プロの方が携わり、照明を含めて緊張した雰囲気を出していただかないと、作家としても展示したいという気持ちにならない。たかが紙と思う日本人の方が多く、作品として見ていただける場所は特殊だ。整備の際は、展示をよくご存じのプロの方に、相談していただきたいと思った。

また、63 ページの伝統工芸授業の実施という点に関する提案だが、作るだけでなく、使うことも、ぜひ授業に取り入れていただきたい。先日東京で和紙関係の方に会ったが、これからは版画用の高級な紙を売らなくてははいけないとおっしゃっていた。版画家というのは要望が高い。私も木版画をするが、実際に紙に触って、刷ってみることで、にじみ方やめり込み加減など、和紙の細部までを知ることができる。作るだけでなく、使うことにもクローズアップして授業をしていただけるのであれば、もっと和紙の良さがわかると思う。

54 ページにある「コアなファンリピーター」については、現在も例がある。卯立の工芸館では5,000 円で和紙作りの本格体験を行っている。その体験では、プロの職人が使っている道具を使うことができる。素人の方にプロの道具を触らせるのはいかがかという意見もあったが、3、4 年前に、一度やってみようということで始めた取り組みだ。インターネットで見たという希望者が、東京や大阪からいらっしやっている。外国人の方も、研修制度なり本格体験を求めて訪れる方が多い。さらに、滞在型スタイル、コアなファンに人気なのが、墨流しの体験だ。「墨流し」という言葉が英語になりつつあるほど、外国では有名な技術だ。今日もスイスから体験者が産地を訪れており、墨流しを体験している。そのように、多くの方に体験していただく場所が、もっとあっても良いのではないかと思う。

事務局： 紙の文化博物館の改修については、プロの方と検討を進めている。また、実際の使い手がどう使いたいかということも大事な観点なので、今後、コミュニケーションをとりながら検討を進めていきたい。

渡辺委員： 委員として、感想を述べさせていただく。構想全体は非常にバランスが良くなった。ただし、全体としてフラットな感じがする。もう少し強弱があっても良いと思う。強さを出すとするれば、工芸の里の目的や位置づけの部分だろう。私は東京で暮らしており、活動の拠点が東京だが、客観的に見ても、越前市は工芸だと感じる。現在の構想は主観的なもので、もう少し客観性があっても良いのではないか。昨年末、テレビ番組の「和風総本家」に加茂委員が出演なさっていた。素晴らしい技術をお持ちで、ドイツの方が驚いていたほどだった。和紙に関しても、凜とした寒いところで和紙を漉いている姿を見ると、誰もが感動すると思う。越前には世界に誇れる技術がたくさんある。工芸の里構想の目的の部分で、もっと強い決意が表明されても良いと思う。

先ほど新幹線の話が出たが、構想全体として、2023 年をターゲットとして組み込むことは、非常に良いことだ。越前市として「工芸の里を中心にまちづくりをするのだ」というような想いを客観的に描ければ良い。いかに世界的にアピールしていくかということは、住んでいる人にとっても重要な事だ。もっと明快に、大意としての工芸の里構想を謳っていくと良い。

また、菊人形というのは越前市の人にとっては重要なイベントなのかもしれないが、客観的に見ると意味が薄く、今後の取り組みに関しても考えた方が良いでしょう。

新幹線の「南越駅」というのも、「南越」という言葉を知っている人は少ないだろう。「越前」という名前を主張すべきだと思う。

保坂委員： 委員の皆さんの意見が反映され、まとまった構想になったかと思う。しかし、渡辺委員がおっしゃったとおり、総花的になりすぎている部分がある。

現在、構想に反映されていないのは、江川委員から指摘のあった新幹線についての話と、議会意見であがってきた、後継者、世界遺産についての話だ。これらの意見はどう反映していくのか、気になっている。

また、これから工芸の里構想を中心に具体的にプロジェクトを進めていくことになると思う。ここが正念場だと思う。工芸の里が実現するかどうかは、プロジェクトを担う人の本気度で決まる。そこの部分に対して何か施策を組み込むことを考えなければ、構想が無に帰する可能性もある。パブリックコメントにもあったように、前回までの施策の振り返りはどうなったのか、反省はしたのか、という意見とイコールになると思う。具体的な推進をするにあたって、担い手が本気になるような仕掛けも盛り込んだサポートができれば良い。

新商品の開発、有名デザイナーやブランドとタイアップなどと書いてあるが、そんな甘い考えでは商品は作れない。根底から認識を改めていただきたいと思う。新しい商品を作ることは、のたうち回るほど苦しいことだ。人に頼って行くと考えているうちは、新しい商品はできない。死に物狂いで生み出した新しい作品を、世界の大きなショーで認めてもらうなどといったことを繰り返しながら、広げていくべきだと思う。

また、世界遺産についてだが、打刃物についてはどうして話が出ないのか。打刃物も世界遺産認定に向けての取り組みを行えば良いと思った。

できれば修正していただきたいという箇所がある。4ページに、ボキューズ・ドールのナイフについて「デザイナーは渡辺弘明氏が関わっている」と書かれているが、これは渡辺委員がデザインしたのである。「渡辺弘明デザイナーによる」といったように表現方法を修正していただきたい。

事務局： 渡辺委員、保坂委員より、強弱について、また、政策の中における工芸の里としての真剣味についてご意見が出たが、行政計画として、政策の中では強弱をつけず、実施段階で強弱をつけるということが多い。実施段階で産地の方と議論を進めるうち、自然に強弱がついていくし、できることとできないことの色分けもできていく。総花的に見えてしまうことが政策の弱いところではあるが、中身には強弱をつけて取り組んでいる。その点、ご理解いただきたい。

竹内委員： 本気度という話が出たが、産地の方はかなり本気だと思う。いかに応援団をたくさん作るかが重要なのだと思う。

現在、鉛筆を刃物で削れる人が、大人を含めて3割しかいないそうだ。刃物を危ないと言わずに、大人と子供がともに、楽しみながら道具の使い方を身につけられるような取り組みができれば良い。

クラフトツーリズムに「滞在するまち」という表現が出てきたが、滞在するとなると1、2泊することになるのだと思う。当然、宿泊施設の問題も出てくると思う。



空き家問題などと上手に連携し、管理することができれば、自然のなかの暮らしを体験してもらうことができると思う。さらにそれを維持することが、地域のコミュニティ再生のきっかけにもつながるのではないかと。

また、59ページの図は、新幹線の駅を中心に「∞（無限大）」を描いているように見える。無限大に広がる施策を考えていただければと思う。

近藤委員： 子どもたちの教育についてだが、中学校の授業でも取り組んでいけば良いと思った。以前「ようこそ先輩」という中学校での授業に参加した。その授業では、地域の大人として、農業関係者、食堂の人などが話をする。その中に伝統産業の方が入っても良いのではないかと。子どもたちの心に残ると思う。また、夏休みに行われる職場体験の体験場所にも、伝統産業の産地が加われば良い。中学生というのは、小学生よりも、将来何をを目指すのか、どこの高校を選ぶかなどといった将来についての情報を必要としている時期だ。

正月に静岡を旅行したが、とても暖かかった。その気候では絶対に、越前市のような伝統産業は生まれなかつただろうと感じた。今ある越前市の伝統産業は、水などの自然があったからこそ生まれたのだと思う。越前市はグリーンツーリズムにも力を入れており、数年前には今立で全国大会が行われたほどだ。グリーンツーリズムに関わっているNPOも多くあるので、クラフトツーリズムとつなぐことができれば良い。中学校で赤米などを育てている学校があり、収穫後に赤米を使ってボルガライスなどの料理を作る授業がある。その際には、越前打刃物の包丁を使用すれば良いと思う。

また、越前箆笥を発信する際も、着物がセットになっていけば、より伝え方が良くなると思った。和紙に関しても折形をするときには和紙を使うなど、民芸と礼法の両方で発信していけば良いと思う。

森委員： 現在、クラフトツーリズムをgoogle（グーグル）などで検索すると、上位に金沢クラフトツーリズムが出てくる。金沢のクラフトツーリズムは、多様なテーマでモデルコースが作られており、非常に親切だ。例えば、東山へ行って金箔を打つ体験する場合、「ふらっとバスで大人は200円です。1日フリーパスだと500円です。時間は12分かかります」といった形で、現地についてのアクセスや時間が細かく書かれている。先ほど事務局の方が、実際の交通整備を進めていくとおっしゃっていたので、南越駅を訪れた方にとってわかりやすく、かつリーズナブルな2次交通の提供を計画に入れていただきたい。

また、先日、朝日新聞の記事で、首都圏の方が北陸新幹線開業後に行きたい観光地ランキングが発表されていた。兼六園、黒部峡谷、黒部ダムに次いで、永平寺が4位、東尋坊が6位にランクインされていた。先ほど江川委員からも発言があったように、周辺には観光の良いコンテンツがあるので、市外との連携を含め、宿泊の問題も解消しつつ、広域でツーリズムを考えていただきたい。

前田委員： 63ページに事業主体が書かれているが、主体として地域の人が含まれていないことが気になる。地域で、文化や工芸を研究されている方がいらっしやると思う。先ほど渡辺委員から、「工芸でまちづくり」という話があったが、まちづくりで盛り上がっている地域というのは、行政よりも、地域の人自身が積極的に取り組んでいる場合がほとんどかと思う。せっかくの良い計画ができたので、住民をできるだけ巻

き込んでほしい。希望でも良いので、こういう人が関わってほしいという人を主体に加えていただきたい。そうすることで、その方々に役割を担っていただき、計画を運営していけるのではないかと。

坂本委員： 全体としてある程度まとまったが、総花的な形になっており、工芸の里の目玉が見えてこない。もう少し重点プロジェクトという形で打ち出しをした方が良いと思う。

前回、渡辺委員よりアクションプランについての指摘があり、もっと中身をつけた修正をされているのかと思ったが、最後に表が付録されているだけだった。もう少しアクションプランを具体化した方が良いのではないかと。本文中には書いてあるが、事業によってはイメージ的なことしか書いていなかったり、あるいはとても具体的に書いてあったりと、内容がバラバラだ。

また、越前市が工芸の里として謳っていくのであれば、教育の部分については、しっかり考えていただきたいと思った。学校の授業に取り入れるというだけではなく、具体的にどんな形になるか明記していただきたい。また新幹線の話があったが、東京オリンピック、福井国体が間近に迫っている。そういったことも見据えて、今後どういったことをするのか、具体的に見える形にしていきたい。

升田委員： 工芸の里構想及びふるさと創造プロジェクトの検討経過を見せていただいたが、これだけ丁寧に取り組んでいただいたことに、改めてお礼を申し上げる。ビジョンやコンセプト、アプローチの手法が体系的にまとめられたので、これからいよいよ必要条件や求められる機能、施策に取り掛かっていくのだと思う。改めて、一汗、二汗かかないといけないな、と実感した。

保坂委員もおっしゃっていたが、パブリックコメントで、これまでの施策に対する反省がされていないという指摘があった。今後の実施段階では、ぜひそこを意識して取り組んでいければ良いのではないかと考えた。

高村委員： 伝統工芸とは何なのかということをよく考える。私は、見るだけでも聞くだけでもなく、実際にそのものを触ってもらいたいと思っている。それが感性を広げることにつながる。

私の作った包丁の説明書には、越前和紙を使っている。拙い文でも越前和紙に印刷すると、すごく良い文に見える。越前和紙が文章を引き立てる。また、打刃物を使うと、料理が下手だと思っている人でも、キャベツを切るだけで美味しい料理を作ることができる。包丁と野菜一つで料理ができる。越前筆筒に関しても同様で、つまらない物でも越前筆筒に入っていると、それが宝になる。また、越前筆筒には重要なものを入れたいと思うようにもなる。それが伝統工芸なのかと思う。その物だけではなく、その人の体験と物が一つになって初めて、本当に良い物になると思う。

ただ見せるだけではなく、触ってもらいたいし、使ってもらいたい。越前和紙も1枚1枚、紙の厚さも感触も違う。筆で書いてみても、それぞれタッチが違う。越前打刃物の包丁にも、厚い、薄いがあり、切れ味もすべて違う。越前筆筒も、開け閉めなどに関しても違いがあると思う。実際に触ってもらい、市民の方にそういったことを感じてもらうことができれば良いと思う。今はまだ伝わっていないのだと思う。

先日、小学校の生徒 70 人全員に、越前打刃物の包丁で野菜などを切ってもらった。皆、包丁を使って野菜を切るときの目が生き生きとしていた。誰一人として怪我することもなかった。授業の後半になればだんだん使い方が上手になっていった。そういうふうに、物を使うチャンスを、大人、子供ともに与えることができれば良いと思った。

河野座長： 本日いただいた貴重なご意見をまとめ、市長報告、議会に向けて対応していただければと思う。良い施策を期待している。

## 報告事項

### (1) ふるさと創造プロジェクトについて

事務局： 今立、味真野地区については、ふるさと創造プロジェクトとして、より実施施策的な意味合いを持った計画を策定する。これは県の事業であり、平成 27 年、28 年の 2 ヶ年で実施していくものだ。具体的には、ハード事業で 1 億 4,000 万円、ソフト事業で 3,000 万円の事業であり、県からは 1 億円の補助をいただく。先ほど青木委員のご意見にあったように、中心となるのは、紙の文化博物館改修だ。既にプロを交えて、予算との関係も見極めながら事務局レベルで動いている。今後、2 月から 3 月にかけて各産地の方と協議させていただき、4 月には速やかに実施の体制を整えられるようにしていきたい。よろしく願います。

### (2) 今後のスケジュール

事務局： 2 月、3 月に、平成 27 年度事業実施について三産地との説明、協議に入る。現在は、県の方からご意見いただいた通り、実施計画を作り、重点的な取り組みについての整理などを行っているところだ。ふるさと創造プロジェクトとして先行して事業を実施するイースト地区には、先党的な役割を担っていただく。ウエスト地区の、拠点整備については平成 27 年度に産地の方と大枠を考えて、検討を進めていきたい。タケフナイフビレッジの工房についても、具体的に話を進めていかななくてはならない。産地の方にはよろしく願います。越前箆筥については、伝統的工芸品に指定されたことから、工芸の里構想とは別に、振興計画を国に申請している。認めていただければ、産地直轄の国の補助事業として、平成 27、28 年度実施に向けて動いていくことができる。タンス町境界を中心とした面的整備については、産地の方と四町まちづくり協議会と話をしてきたなかで、まず地元における組織づくり、体制、リーダー育成を中心に進めることとなった。平成 27、28 年度に体制の基板を作り、平成 29 年度から事業に向けて取り組んでいく予定だ。今後も、日程調整などをよろしく願います。

工芸の里構想策定会議は、当初予定していた 6 回が本日で最終回を迎えたこととなる。本日いただいた意見は事務局でしっかりと整理させていただく。2 月 20 日には、座長より市長へ報告していただく。ダイジェスト版、概略版も市民に公表できる形で作成し、どんどん市民にアピールしていく。また、23 日からはじまる 3 月の審議会がでは、工芸の里構想に基づく予算の審議をいただく。議会に対しても丁寧に説明し、予算の許可をいただけるよう対応していきたい。よろしく願います。

### (3) その他

青木委員： イースト地区に関しては、平成 27 年、28 年度にかけて事業を行っていくということだが、越前和紙ゾーンと歴史ゾーンをどうやってつなげていくのか、具体的な話が出ているのであればお伺いしたい。

事務局： 継体天皇など歴史的な着眼点を持ちながら、それと伝統工芸を組み合わせ、今立、味真野地区を結ぶ取り組みを行っていく。また、具体的にはサイン整備なども考えている。58 ページに、「(1) イースト地区をつなぐ魅力的な拠点づくり」として、伝統工芸と歴史の組み合わせの概念的な考え方を示している。どういう事業を進めていくかは、今後の検討事項となる。

青木委員： 交通面に関しても整備が考えられるのか。

事務局： 具体的にはまだ検討していない。

## 4 閉 会

清水部長： 約 1 年間、6 回にわたって貴重なご意見をいただき、また、産地の方には別の機会でもご協力いただき、ありがとうございました。

やはり、これから具体的にどう実施していくか、いかに継続していくかが一番大事な部分だと思う。工芸の里構想は、市として取り組むことであり、つまりは組織として取り組むことだ。今後は推進協議会を活用しながら、皆さんと継続的な事業を成していきたい。

私達も一生懸命がんばっていくので、その都度、ご意見いただければ幸いである。よろしく願います。長い間ありがとうございました。

以上